

高安古墳群
芝塚古墳

—八尾市神立1081の農業用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告—

1993年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



高安古墳群
芝塚古墳

—八尾市神立1081の農業用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告—

1993年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、生駒山地の西麓と、そこから広がる河内平野のほぼ中央部にあります。この生駒山地の高安山麓一帯は高安古墳群として全国的にも知られている多くの古墳が遺存している地域であります。

またその西に広がる河内平野は古来より幾度となく旧大和川の氾濫を受けながらも豊かな水と肥沃な土壌に恵まれ、人々の生活や活動の場として從来より歴史の舞台としても重要な役割を果して来た所であります。

八尾市では、大阪都市圏の一角を占め近年市街化が急速に進み近代都市へと大きく変貌しています。このことは軽快な生活環境を与えてくれる非常にすばらしいことですが、反面では重要な文化財が開発によって破壊され失われる危険に晒されています。

そこで私共は、これらの文化遺産を後世に永く伝えるため、事業者の協力を得て埋蔵文化財の事前の発掘調査及びその記録保存に努めている次第です。

今回報告するのは高安古墳群に残る古墳の一つであります古墳時代後期の横穴式石室の調査成果であります。埋葬主体からは貴重な副葬品が多数出土しました。その整理が完了しましたので、これをまとめて報告書を刊行することに致しました。

本書が学術研究の資料として、又は文化財保護及び啓発に広く活用して頂ければ幸です。

最後になりましたが、この発掘調査に対し、ご協力賜りました関係機関の皆様に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

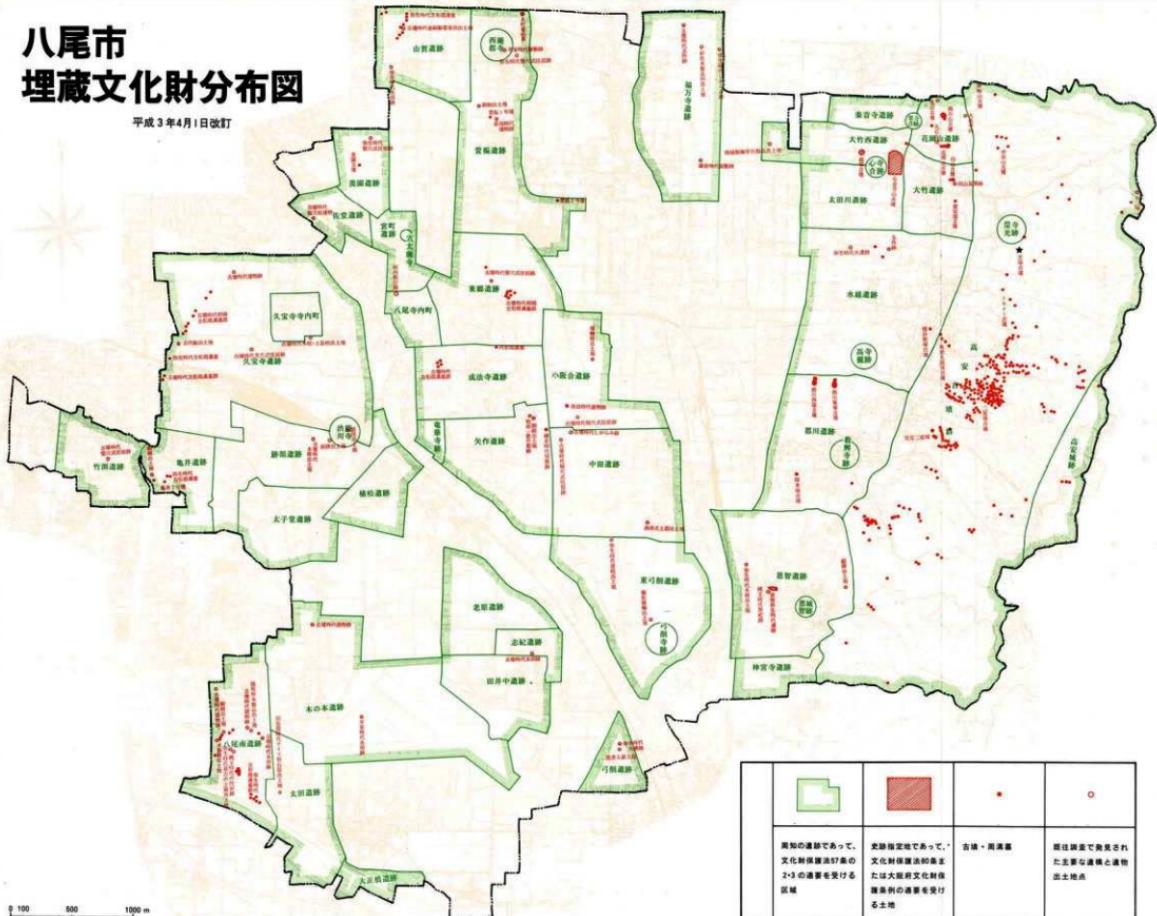
理事長 福島 孝

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神立1081に所在する農業用道路新設工事に伴う昭和63年度の高安古墳群芝塚古墳の報告書である。
1. 本書で報告する発掘調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第14号 昭和63年4月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市道路課から委託を受けて実施したものである。
1. 本調査は、昭和63年5月23日～6月11日の期間で実施した第1次調査（予備調査）、平成元年2月24日～4月16日の期間で実施した第2次調査の報告である。調査においては第1次調査の担当が駒沢敦で、補助員は八元聰志・田中秀行・中切孝彦である。第2次調査の担当が高萩千秋で、補助員は岡田聖一・並河聰也・若竹慶一・森本治一である。なお、労務関係としては株式会社島田組の協力を得た。
1. 出土遺物の整理作業及び報文作成業務は、調査終了後実施し、平成5年3月に報告書を行った。これに関わる業務は、遺物実測一坪田真一（調査員）・小椋（旧姓岩本）多貴子・亀田（旧姓村田）英子・岡田・西岡千恵子・圓面レイアウト一亀田・圓面トレース一小椋・亀田・市森千恵子・遺物写真撮影一高萩が行った。その他、中西明美・田島和恵・都築聰子・水里さと子・村井俊子が参加した。本書の執筆は主に高萩が担当した。なお、石材については、市立曙川小学校奥田尚教諭に依頼、象嵌遺物については奈良大学西山要一助教授の協力を得た。
1. 平成4年度より文化財室が文化財課に変更したため、本文では文化財課として記載した。
1. 全体の編集は高萩が行った。
1. 本書掲載の地図は、八尾市役所発行の2,500の1（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海平面（TP）である。
1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
1. 実測図の縮尺は、直溝が20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基調とし、遺物は大きいものは6分の1、小さいものは1分の1・2分の1、他は4分の1に統一した。
1. 遺物実測は断面の表示によって次のように分類した。
土師器・瓦器・石類一白・須恵器・瀬戸物一黒・金属製品一■。
1. 調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成3年4月1日改訂



本文目次

八尾市埋蔵文化財分布図	
第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2節 芝塚古墳調査日誌	3
第2章 遺跡の立地と環境	5
第1節 高安古墳群について	5
第2節 群集墳の占墳について	5
第3章 第1次調査	9
第1節 調査の方法と経過	9
第2節 調査前の現状	9
第3節 調査の成果	9
第4章 第2次調査	13
第1節 調査の経過	13
第2節 芝塚古墳について	13
1. 古墳の立地	13
2. 墓丘の形と大きさ	13
3. 石室内部の状況	14
■石室内に堆積した土層	
■石室の現状	
4. 石室の形状と規模	18
■高安古墳群の後期古墳	
■石室の床面の状況	
■石室の石材と積み方	
■閉塞石の状況	
5. 石棺	22
■配置と検出状況	
■石棺 I	
■石棺 II	
■石棺 III	
第3節 出土遺物	47

1. 石棺内の遺物	47
■石棺Ⅰ	
■石棺Ⅱ	
■石棺Ⅲ	
2. 石室内の遺物	49
第5章 芝塚古墳の象嵌遺物について	63
第1節 はじめに	63
第2節 象嵌の技法と種類	63
第3節 象嵌刀装具の種類と分布	64
第4節 芝塚古墳の象嵌遺物	65
1. 象嵌太刀の所持者について（奈良大学文化財学科 西山 要一助教授）	66
第6章 石材について（八尾市立曙川小学校 奥田 尚教論）	69
第1節 はじめに	69
第2節 石室材・閉塞石材	69
第3節 石棺材	70
第4節 石組み	73
第7章 家形石棺について	75
第1節 はじめに	75
第2節 家形石棺について	75
第3節 芝塚古墳の家形石棺	76
第8章 その他の出土遺物	79
第1節 はじめに	79
第2節 縄文時代から弥生時代の遺物	79
第3節 平安時代末から鎌倉時代前期の遺物	79
第4節 近世から近代の遺物	80
第9章 まとめ	115

挿 図 目 次

第1図 洪水位置図	1
第2図 高安古墳群分布図	7
第3図 現状地形図	10

第4図 墳丘及び周辺地形等高線図	12
第5図 墳丘トレント配置図及び石室縦横断面図	13・14
第6図 Aトレント断面図	16
第7図 石室内石棺及び副葬品検出状況平面図	17
第8図 石室床面平面図	20
第9図 石室展開図	21
第10図 石棺I復元展開図	25
第11図 石棺II・石棺III復元展開図	26
第12図 石棺I石材展開実測図1	27
第13図 石棺I石材展開実測図2	28
第14図 石棺I石材展開実測図3	29
第15図 石棺I石材展開実測図4	30
第16図 石棺I石材展開実測図5	31
第17図 石棺I石材展開実測図6	32
第18図 石棺II石材展開実測図1	33
第19図 石棺II石材展開実測図2	34
第20図 石棺II石材展開実測図3	35
第21図 石棺II石材展開実測図4	36
第22図 石棺II石材展開実測図5	37
第23図 石棺II石材展開実測図6	38
第24図 石棺III石材展開実測図1	39
第25図 石棺III石材展開実測図2	40
第26図 石棺III石材展開実測図3	41
第27図 石棺III石材展開実測図4	42
第28図 石棺III石材展開実測図5	43
第29図 石棺III石材展開実測図6	44
第30図 石棺III石材展開実測図7	45
第31図 石棺内出土遺物実測図	48
第32図 石室内遺物配置図	49
第33図 石室内出土土器実測図1	52
第34図 石室内出土土器実測図2	53
第35図 石室内出土土器実測図3	54

第36図 石室内出土金属製品実測図1	57
第37図 石室内出土金属製品実測図2	58
第38図 石室内出土金属製品実測図3	59
第39図 石室内出土金属製品実測図4	60
第40図 石室内出土金属製品実測図5	61
第41図 象嵌遺物の金属種分析図	67
第42図 芝塚古墳の石材種別図	71
第43図 石室東壁築造順想定図	73
第44図 石器実測図	80
第45図 石室上面実測図	84
第46図 中世遺物実測図1	85
第47図 中世遺物実測図2	86
第48図 中世遺物実測図3	87
第49図 中世遺物実測図4	88
第50図 中世遺物実測図5	89
第51図 中世遺物実測図6	90
第52図 中世遺物実測図7	91
第53図 中世遺物実測図8	92
第54図 中世遺物実測図9	93
第55図 中世遺物実測図10	94
第56図 中世遺物実測図11	95
第57図 中世遺物実測図12	96
第58図 中世遺物実測図13	97
第59図 中世遺物実測図14	98
第60図 中世遺物実測図15	99
第61図 中近世遺物実測図	100

表 目 次

第1表 高安古墳群内調査古墳の築造年代表	6
第2表 高安古墳群史一覧表	8
第3表 既往分布調査の古墳数表	19

第4表 石棺法量表	46
第5表 石棺内出土遺物法量表	47
第6表 石室内出土土器観察表	54
第7表 石室内出土金属製品観察表	62
第8表 象嵌遺物の研究史一覧表	64
第9表 芝塚古墳出土象嵌遺物と同一文様の出土一覧表	66
第10表 西山氏の象嵌遺物編年試案一覧表	68
第11表 家形石棺出土古墳一覧表	77

写 真 目 次

写真1 調査前の現状（北から）	2
写真2 石室の石材露出状況（西から）	2
写真3 第1次調査の調査状況（南から）	3
写真4 石棺実測風景（南西から）	3
写真5 ブレス発表風景（南西から）	4
写真6 現地説明会風景（西から）	4
写真7 石室埋め戻し風景（南西から）	4
写真8 石棺I検出状況（南から）	24
写真9 石棺II・石棺III検出状況（東から）	24

写 真 図 版

図版一	高安古墳群全景（上空から）
図版二	石室完掘状況（南西から）
	石室状況（南西横から）
図版三	玄室床面状況（南西から）
	玄室床面状況（北東から）
図版四	第1次調査の石室調査状況（南西から）
	石室上面状況（南西から）
図版五	石室奥の上面状況（南西から）
	石室玄門付近の上面状況（南西から）

- 図版六 石棺検出状況（南西から）
石棺検出状況（南西横から）
- 図版七 石棺配置状況（南西横から）
石棺内完掘状況（南西から）
- 図版八 石棺内完掘状況（南西横から）
石棺の底石配置状況（南西から）
- 図版九 石棺の底石状況（南西から）
石棺Ⅰ底石状況（南東から）
- 図版一〇 石棺Ⅱ・石棺Ⅲ底石状況（南西から）
石棺Ⅰ内遺物検出状況（南東から）
- 図版一一 石棺Ⅱ・石棺Ⅲ遺物検出状況（南西から）
石棺Ⅲ遺物検出状況（南東から）
- 図版一二 石棺Ⅰ遺物状況（南東から）
石棺Ⅱ器台片検出状況（南西から）
- 図版一三 石棺Ⅲ遺骸検出状況（北西から）
石棺Ⅰ東側床面直刀検出状況（南東から）
- 図版一四 石室奥の東側遺物検出状況（南西から）
石室奥の西側遺物検出状況（北東から）
- 図版一五 石棺Ⅲ東床面検出遺物状況（北東から）
石棺Ⅰ東床面検出遺物及び封石状況（北西から）
- 図版一六 芝塚古墳埋め戻し後の新設道路状況（南から）
芝塚古墳の石碑（南から）
- 図版一七 遺物写真 石棺内遺物
- 図版一八 遺物写真 石室内遺物 1 土師器 1～4・須恵器 5・6
- 図版一九 遺物写真 石室内遺物 2 須恵器 7～14
- 図版二〇 遺物写真 石室内遺物 3 須恵器 15～22
- 図版二一 遺物写真 石室内遺物 4 須恵器 23～27
- 図版二二 遺物写真 石室内遺物 5 直刀
- 図版二三 遺物写真 石室内遺物 6 直刀
- 図版二四 遺物写真 石室内遺物 7 直刀の柄・鐔
- 図版二五 遺物写真 石室内遺物 8 直刀の鐔・柄頭
- 図版二六 遺物写真 石室内遺物 9 直刀の柄頭

- 図版二七 遺物写真 石室内遺物10 直刀の鍔・鞘尻
- 図版二八 遺物写真 石室内遺物11 銃具・鉄鎌
- 図版二九 遺物写真 石室内遺物12 鉄鎌・刀子・不明金属製品
- 図版三〇 石棺 I
- 図版三一 石棺 II
- 図版三二 石棺 III
- 図版三三 石棺 IV
- 図版三四 石棺 V
- 遺物写真 石室内遺物14 石器（石鎌・石槍）

第1章 はじめに

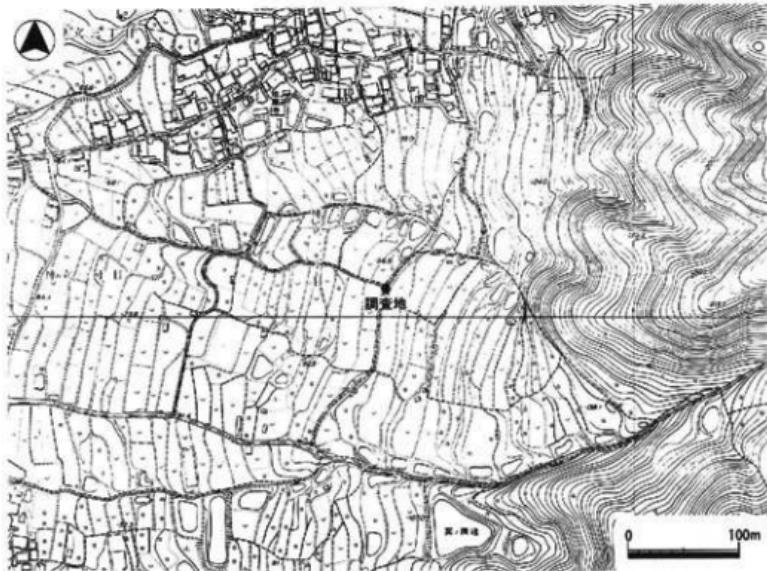
第1節 調査の経過

昭和62年11月22日、八尾市教育委員会では八尾市道路課から神立地区で農業用の道路新設を計画している旨の協議を受け、その道路計画路線上の分布調査を実施した。その結果、計画地内に古墳と思われるところを発見した。同年11月27日～12月1日の期間で市教育委員会は、古墳と思われる付近を中心にして地形測量の調査を行った。その測量結果、横穴式石室をもつ古墳であることが確認された。

市教育委員会では『古墳の概要』を、以下のように報告している。

「予定路線上に位置する当古墳は、八尾市神立集落の南方約1km、標高90mの畠地の中に所在している。地元の人によると、この付近はシバツカという地名があつたらしい。」

古墳の墳丘は、大半の部分が畠の開墾による改変を受けているため旧状を失っている。墳頂には柿の大木があり、古墳の上を里道が通っている。西の畠から墳頂までの比高は4.5m以上あり、等高線の変形部分より、直径20mほどの円墳であったと想定できる。



第1図 調査位置図

柿の下に露出している石材は大きさが1m以上もあるものがあり、積み重ねられた状況を呈する。このことから、これらは古墳の石室を構築する石材であると考えられる。特に最上にある巨石は、その天井石であろう。石材は石垣に使用されたものもあると言うことなので石室が完在しているとはいひ難いが、まだかなりの部分が土中に埋まっていることが考えられる。

石室の構造や内部の状況は一切不明であり、発掘調査の結果を待つしかないが、おそらく6世紀後半に築造された横穴式石室を内部主体とする古墳であると推定される。」(八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告18 1988.3の報告より)

上記の報告を踏まえて、八尾市道路課と市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との三者協議を行い、当調査研究会が調査主体となり発掘調査を実施することになった。その発掘調査では、第1次調査と第2次調査の2回に分けて行うことになった。第1次調査は予備調査で、石室構造及び墳丘規模を確認し、第2次調査を実施する基礎資料を作成することである。第2次調査は全面発掘により、墳丘の形状及び石室内を精査し、石室の構造状況を記録する。ということである。第1次調査は昭和63年5月23日～6月11日の11日間、第2次調査は平成元年2月25日～4月15日の45日間である。なお、第1次調査では仮称「高安神立1号墳」として取り扱っていたが、第2次調査ではその発見された地が「シバツカ(芝塚)」という小字名があったことから、その小字名から「芝塚古墳」と名付けた。以後、芝塚古墳として報告している。



写真1 調査前の状況(北から)

写真2 石室の石材露出状況(西から)

芝塚古墳調査日誌

八尾市教育委員会文化財課における経過

昭和62年11月22日

- ◆八尾市近郊より八尾市立で道路新設を計画している旨の協議を受け、分布調査を実施した結果、予定地内に露出した巨石を見た。古墳が存在することが確認された。

同年11月27日～12月1日

- ◆古墳の形状を知るため、測量調査を実施した。

昭和63年4月18日

- ◆文化財課と道路課が協議する。その結果、古墳の存在状況を把握し、保存のための記録を作成する。

4月26日

- ◆当調査研究会が指示書を受け取る。調査方法としては2度にわたる発掘調査を実施が必要であるとのことである。1次の予備調査、2次の全面調査である。

4月29日

- ◆道路課・文化財課・当調査研究会で調査日程・調査方法などについて協議を行う。

5月7日

- ◆道路課・文化財課・当調査研究会と三者協定を締結する。

第1次調査（予備調査）

5月23日（月）～24日（火）晴から曇

- ◆発生地～水準点の移動と同時に、調査地の樹木の伐採、下草の刈り込みを行なう。

5月25日（水）晴

- ◆調査区に面積杭の設置。

5月26日（木）晴

- ◆柿の大木の除去に手間取ったが、ついに撤去する。

5月31日（火）晴

- ◆墳丘頂と考えられる所に東北方向のトレンチを設定し、調査を開始する。

6月1日（水）晴～朝雨

- ◆右端の灰面を検査。天井石は現位置を保っていない。

6月2日（木）晴～3日（金）雨

- ◆現場作業中止。

6月3日（土）晴～午後

- ◆現位置と保っていない右の跡出作業。
- ◆トレンチ内より中層の土器が出土。

6月6日（月）～10日（金）晴

- ◆写真撮影、実測図の作成を行う。

6月11日（土）晴～ちぢれ

- ◆トレンチを一旦廃す。



第2次調査

平成元年2月28日（土）晴

- ◆本調査を実施する準備。

3月27日（月）～3月1日（水）晴から曇～時雨

- ◆予備調査で使用した状、トレンチの確認。

- ◆下層の除去作業。

3月3日（金）晴

- ◆予備調査のトレンチを再び振り起こす。

3月4日（土）晴～ちぢれ

- ◆中層の土器が出土。

3月6日（月）晴

- ◆土器（第1層）を除去すると、幸大の石集積を検出した。

3月8日（水）晴

- ◆石集積の調査を行う。奥壁付近で石棺の一部を検出する。また、中層の土器とともに鉄製の釘が3本出土する。

3月9日（火）晴

- ◆石室の北部にトレンチを設定し、掘削。

- ◆石室内の石室後の実測。

3月14日（火）晴

- ◆石室の裏面が終了し、除去作業を行う。石の間から多量の中層の土器が出土した。

- ◆石室裏の西側から右棺（石棺Ⅰ）の蓋3個を検出する。

3月15日（水）晴

- ◆後の下から石室を検出。またその奥側からもう1基の石室（石棺Ⅱ）を検出する。

- ◆文化財課・道路課に報告する。

3月17日（金）晴

- ◆3箱の右棺（石棺Ⅲ）を検出する。

- ◆文化財課（米田・西田）・道路課は小祝賀。



3月18日（土）晴

- ◆石棺の周辺に副葬品として置かれた土器類を検出。

3月20日（月）晴

- ◆奥壁付近で壊滅した土器類を検出。

3月21日（火）～23日（木）晴

- ◆石室・副葬品の状況を写真・実測を行う。

3月22日（水）晴

- ◆玄室の床面までの掘削。

- ◆覆面の実測。

- ◆当調査研究会の権原長（福島）・事務局長（園内）はか祝賀。

3月23日（木）晴

- ◆石室の蓋の取り上げ作業。

- ◆文化財課3名（森田・米田・山野）は祝賀。

3月25日（土）晴

- ◆石棺Ⅰの東側石の外側で鉄鋼を検出。

- ◆大阪府教育委員会（橋田）・当調査研究会の調査員（原田・武

- 海・西村) 検察。
- 3月27日(月) 墓のうち面
 ◆石棺周辺の床面までの剥離。
 ◆石棺 I の東小口・石棺 II ・Ⅲの北小口がはずされていた。
 ◆櫛原小学校教諭(米田) はか10名。
- 3月29日(火) 墓
 ◆奥塚付近の副葬品の実測・取り上げ作業。
 ◆文化財課(米田) - 青友高校教諭(吉岡) - 北高安小学校校長・市立更生所資料室館3名・共用通路2名見解。ほか神立地区住民多数見学。
- 3月30日(水) 墓
 ◆石棺内の剥離を開始する。
 ◆高安中学校長・北高安小学校校長・文化財課(米田・近江・岡田) - 当調査研究会(原田・成高・山内) の検察。ほか神立地区住民30名見学。
- 4月1日(木) 墓
 ◆石棺内の上を剥り上がる。内部から石棺片・人骨の一部や副葬品が出土。
 ◆大阪府教育委員会(原田) はか3名・粗糸萬能教諭(吉岡) はか2名・高安中学校校長・当調査研究会(原田・成高・西村) はか5名見解。ほか神立地区住民約50名随時見学。
- 4月2日(金) 墓
 ◆実地でのトレンチ調査実施と平面測量。
 ◆櫛原考古学研究所(石野ほか4名)・文化財課(米田) の検察。ほか神立地区住民多数見学。
- 4月3日(土) 墓
 ◆石棺内に落ち込んでいる石棺片を取り上げる。
 ◆文化財課(米田) - 共用通路の検察。ほか神立地区住民多数見学。
- 4月4日(火) 墓
 ◆石棺内の検査。
 ◆大阪府教育委員会(山神・堀) - 柏原市教育委員会(北野はか4名) 見解。
- 4月5日(水) 墓
 ◆石棺内の遺物の実測を取り上げ。
 ◆午後1時よりブレス公表を行う。
- 4月6日(木) 墓
 ◆石室の断面図及び平面図の作成。
 ◆直刀の取上げ。
- 4月7日(金) 墓
 ◆石室内の後削・縦断面の実測。
 ◆現地説明会場の整備。
 ◆多数の見学者がある。
- 4月8日(土) 墓のうち面
 ◆午後1時~3時現地説明会を行う。あいにく雨であったが概数150名見学者があった。



- 4月9日(日) 墓
 ◆石棺内の遺物・石棺側石の取り上げ。
 ◆見学者約100名あり。
- 4月10日(月) 墓一時雨
 ◆石棺側石の検査、写真・実測。
 ◆経済法科大学教授(村川) 視察。
- 4月11日(火) 墓
 ◆石棺側石の実測。取り上げ作業。
 ◆北壁石のトレンチをあけ、盛土状況を確認する。
- 4月12日(水) 墓
 ◆玄室の底石がない部分の床面を剥離。
 ◆石棺を住民まで運ぶ。
- 4月13日(木) 墓
 ◆玄室の床面を割り付け、実測。
- 4月14日(金) 墓
 ◆調査を終了し、シート・土のうを床面に敷き詰め、隠める。
- 4月15日(土) 墓のうち面
 ◆雨のため現地作業中止。
 ◆発掘用具の引き上げ。
- 4月16日(日) 墓
 ◆石室全体を埋め、開室を終了する。



第2章 遺跡の立地と環境

第1節 高安古墳群について

芝塚古墳は高安古墳群の北部に位置する。この高安古墳群は現在の行政区画では南から神宮寺・恩智・垣内・黒谷・郡川・服部川・山畠・大窪・神立・楽音寺にあたる広い範囲を捉えている。高安古墳群は八尾市東方の生駒山地西麓（標高50m～450mの斜面）に分布する古墳時代中期末～終末期にかけての群集墳で、その中心に高安千塚、北に楽音寺・大竹古墳群、南に岩戸古墳群がある。現在、それらを総称して高安古墳群と呼称している。古墳群の規模は大阪府下最大である。この生駒山西麓には南側の柏原市域に高井田古墳群・平尾山古墳群があり、北側の東大阪市域には山畠古墳群が連なっている。高安千塚では「郡川のあたりは千塚とて太古の窟多し。其中より陶器出づる。これ神代よりの品物にして、猿出彦命の製りたまひしやらん」の文章やさし絵が『河内名所図会』の高安郡に掲載されており、郡川付近の古墳とその乱掘の様子が窺える。高安古墳群の調査は第1表に掲載しているように、明治時代初期、イギリス人であるW.ゴーランド氏やアメリカ人であるモース氏が踏査し、その成果を論文によって世界に紹介された。その後、大阪府教育委員会等によって古墳の分布調査を数次にわたり行われている。昭和48年12月～昭和49年1月に中田遺跡調査会学生有志が実施した分布調査では、古墳の総数が320基余りと記録されているが、大正12年（1922年）に刊行された「中河内郡誌」の掲載された分布調査によれば540基と書かれている。この付近の一帯は、古くから石材が採取地として知られており、文献資料によれば、横穴式石室の巨石が豊臣秀吉の大坂城の築造に利用されたり、耕地等の開墾等で破壊されたりしてその古墳の数は減少していったようである。

第2節 群集墳の古墳について

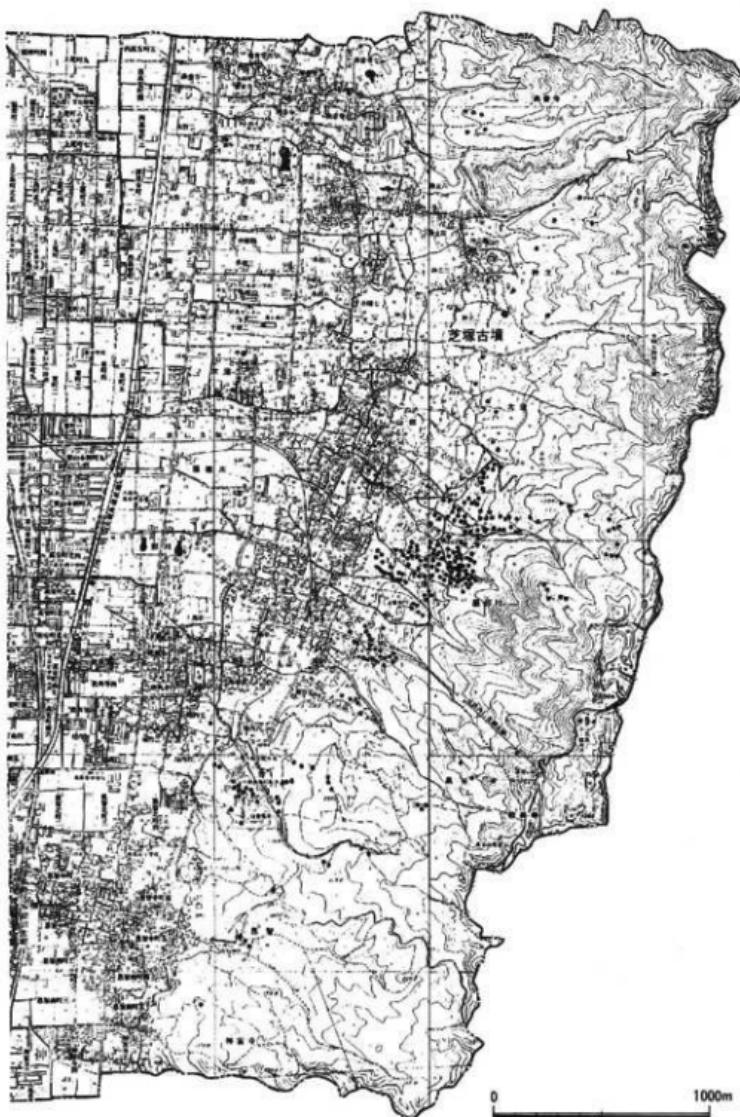
これまでに行なわれた分布調査や発掘調査のデータから見ると、高安山の山麓に分布している古墳群は、ほとんどが横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳で、山の斜面から伸びる尾根の先端を削って利用している。古墳の大半は墳丘径10～25mで、高さ3～5mを測る規模のものである。横穴式石室の全長は小さいもので3m、大きいもので10m以上のものがある。最大のものとしては神立地区に存在する愛宕冢古墳である。石室全長は17mを測る。これらの古墳は、5世紀後半～6世紀初頭に造営が始まり、7世紀後半までの約200年間に渡って造り続けられていたようであるが、6世紀の中葉～後葉にかけて集中して造営されていたことが今までの調査によって明らかになっている。また、古墳を研究している白石太一郎氏がこの高安千塚にある古墳の石室の形態から古墳を過去に編年されている。さらに石の分析を研究している奥田尚氏は石棺の形態、出土遺物、石室の構造、石材などを分析している。

下図の築造年代グラフに掲載した古墳は、大阪府教育委員会・市教育委員会・当調査研究会が調査主体で発掘調査を行った古墳である。それらの古墳の調査成果から築造年代から追葬が行われなくなるまでの使用期間をグラフにあらわしたものである。このグラフをみると7世紀以降に築造された古墳が半分以上ある。高安千塚は5世紀後半から6世紀末までに築造され、7世紀には追葬はあるものの新たな古墳の築造がないとされていたが、発掘調査によって7世紀前半まで築造されていることが明らかになってきた。このことにより、古墳を築造した氏族または豪族を限定する為の良好な資料となろう。また、高安城を探る会（市民グループで結成されている団体）では白石太一郎氏・大阪府教育委員会・市教育委員会等が行った分布調査の分布図をもとに現在（平成2年）に残る古墳の位置や現存有無を改めて分布調査を行い、その成果が報告されている。

芝塚古墳の立地については、前記に述べた群集墳とほぼ同じような条件の地形に立地しているが、周辺に存在する古墳はまばらであることから芝塚古墳は独立した古墳であることがいえるであろう。

第1表 高安古墳群調査古墳の築造年代表

古墳名	年代	500	550	600	650	700	750
神立芝塚古墳				↔	↔		
愛宕塚古墳			↔	↔			
神立恵智山古墳				↔			
郡川16号墳					◇		
垣内1号墳				◇			
垣内2号墳				◇		◇	
垣内3号墳				◇			
法藏寺境内2号墳				◇			
法藏寺境内3号墳				◇			
法藏寺境内3B号墳				◇			
高安山1号墳					◇		
高安山2号墳					◇		
大石古墳				◇			
寺池1号墳	？						



第2図 高安古墳群分布図

第2表 高安古墳群史一覧表

西暦	概要
1583年	大坂城の築城で「千塚之石」を用いる。
1801年	『河内名所図会』に高安古墳群の図。
1872~1888年	ウイリアム=ゴーランド氏（イギリス人）による古墳踏査し、『日本のドルメン』を紹介。
1879年	エドワード=モース氏（アメリカ人）が高安古墳群を訪れ、『日本のドルメン』を世界に紹介。坪井正五郎氏も古墳を踏査する。
1881年	西の山古墳の後円部埋葬施設が掘り出される。
1897年	郡川東塚古墳の開鑿
1902年	郡川西塚古墳の開鑿で破壊される。
1908年	長者の著塚古墳の盗掘、戦後、破壊される。
1922・23年	岩本文氏（地元の人）が古墳踏査し、540基の古墳を『中河内郡誌』（1924）に紹介。
1926年	開整で「横山古墳」を発見。
1933年	中の谷（中谷山）古墳を発掘。
1934年	開発で「森田山古墳」を発見。
1959年	花岡山古墳、採土工事で消滅。
1960年	竹下による各古墳カード作成。
1955~1965年	「八尾の史跡」の編纂にあたって、沢井浩三氏を中心に主要な古墳の調査がなされた。その後、白石太一郎氏によって147基の古墳が確認され、詳細な考古学的分析が行われた。
1961年	沢井浩三氏、八尾高校地盤部による分布調査。
1966~1968年	大阪府教育委員会による分布調査。
1968年	八尾市教育委員会「神立おんじ山古墳調査概要」
1973~1974年	藤井克巳・吉岡哲尚氏、中田遺跡調査研究会学生有志の調査。『「高安古墳群分布調査概要報告」「陵」3・4合併号 1977』
1981年	大阪府教育委員会による高安古墳群の発掘。『「高安城跡範囲確認調査概要」 1981』
1983年	奈良県橿原市考古学研究所による高安山火葬墓群の発掘。八尾市教育委員会による郡川法藏寺境内の発掘。『「八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書」 1984』
1985年	八尾市教育委員会による「須内1~3号墳」の発掘。『「八尾市教育委員会昭和60年度発掘調査報告書」 1986』
1986~1990年	「高安城を探る会」による分布調査。古墳185基を確認。『「高安古墳群の分布調査」 1990』
1987年	八尾市教育委員会により「芝塚古墳」を発見。その後、（財）八尾市文化財調査研究会による発掘（今回の報告書）。
1990年	八尾市教育委員会により「大石古墳」を発見。その後、当調査研究会による発掘。
1991年	八尾市教育委員会による「日宝寺墓地予定地1~4号墳」の発掘。当調査研究会による「寺池1号墳」の発掘。

第3章 第1次調査

第1節 調査の方法と経過

八尾市道路課・市教育委員会・当調査研究会の三者と地元の土地所有者の立会いのもとで調査範囲を調整した。調査範囲については道路計画の路線範囲内で行うことになった。また残土処分については隣接している畠地を借り、一時的にブルーすることになった。調査地には墳頂部付近と考えられる部分に柿の大木が樹木し、周辺には雑草が生い茂っていた。まずは柿木の伐採と草刈りから着手することになった。また、同時に近接（神立の玉祖神社付近）にある固定水準点（No.20～No.22）より仮ベンチを選び、墳丘の中心付近に測量杭を設定した。その杭を基点に古墳を中心とした地形測量を行った。その後、横穴式石室と思われる上部に縱方向のトレンチを設定した。

第2節 調査前の現状

墳丘の北側及び西側は、後世により削平を受けており、墳丘の西側から墳頂部にかけて天井部及び西側の壁石の一部が露頭し、さらに、墳頂部に柿の大木があるほか、墳頂部を継続する里道が通っている。その墳頂部の里道には露頭している東側の壁石一部の石材がみられた。西側は円墳の形状を残す輪郭がある。里道の南と北は緩やかに下っている。

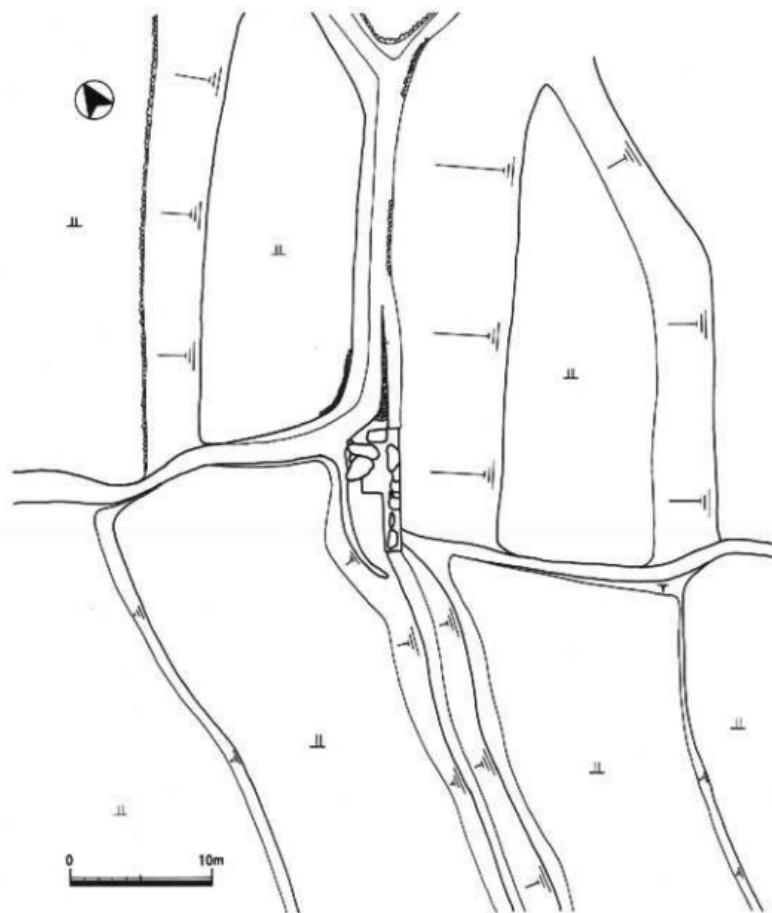
第3節 調査の成果

奥壁及び玄室と狭道の東壁を確認し、南北方向へ開口している石室であることがわかった。各部の検出数値（ただし上部）は、奥壁の幅1.8m、玄室の長さ4.9m、狭道の長さ2.6mであった。西側壁については、明確にし得なかったが、現状では、西側に露頭している基底部の石材を除けば、大半が抜き取られているようである。天井石は、奥から2石が遺存していただけであるが、2石とも原位置から西側にずれている。また、玄室中央で基底部を確認するために掘削したが、多量の瓦器塊が出土し、後世の再利用などが考えられたため、途中で掘削を中止し、基底部の確認は断念した。

なお、遺物は墳丘上及びトレンチ内の上層で近世の陶磁器の破片が出土し、また、玄室の中位付近で平安時代末期から鎌倉時代前期に比定される瓦器輪・土師質小皿・羽釜などが多く出土した。古墳の築造時期に想定される古墳時代後期の遺物は、須恵器の小破片が数点出土しただけであった。

第1次調査の結果では、横穴式石室の奥壁及び玄室と狭道の東壁を確認した。石室の状況は、前述した通りである。これは、当古墳群の中では中規模の横穴式石室といえよう。ただ、天井

部は、現位置を保っているものではなく、西側壁の石室の一部は、近代になってから抜き取られたようである。なお、玄室付近で出土した中世の遺物は、床面よりかなり上層と考えられる位置で多量に検出しており、かなりの土砂が石室へ流入した後、再利用されていた可能性が高いといえよう。なお、地形測量図及びトレンチ調査では明確に確認できなかった。



第3図 現状地形図

第4章 第2次調査

第1節 調査の経過

予備調査（第1次調査）を踏まえて、本調査（第2次調査）の発掘調査について八尾市道路課と同市教育委員会・当調査研究会の三者で協議を行った。協議の結果、芝塚古墳の墳丘の調査と、石室の構造・石室内部の状況を調査し、調査終了後はその石室を現状のまま埋め戻し保存することになった。調査期間は、当初平成元年2月23日～3月31日までの予定で行うことになった。しかし、3月17日に行った発掘調査から3基の石棺を発見したため、再度三者協議を行った。その結果、調査期間を半月延長し、4月15日までとする。また、この古墳を公表することとなり、4月5日プレス発表、4月8日現地説明会を開催すると運びとなった。なお、発掘調査の経緯・状況などについては調査日誌で記載している。

第2節 古墳について

1. 古墳の立地

芝塚古墳は八尾市神立1081番地に所在し、神立の集落の東部にある玉祖神社の南側約300mに位置する。地理的には生駒山地から続く高安山の西麓に広がる扇状地で海拔100m前後を測る尾根の先端で、第1次調査で記述しているように一帯が段々畑であり、その一角にあたる。

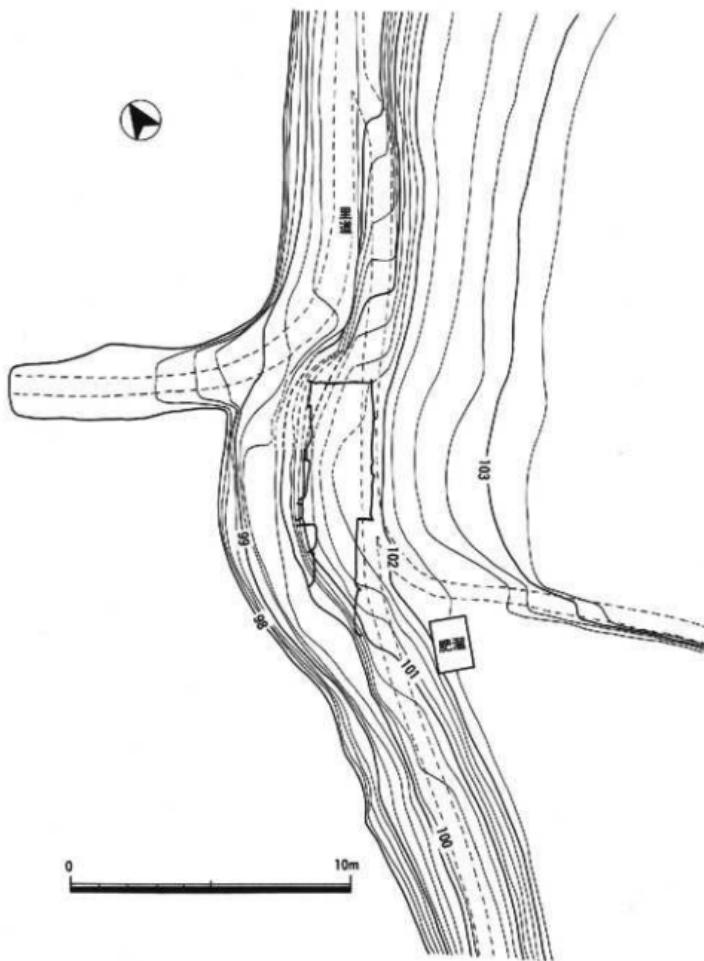
2. 墳丘の形と大きさ

芝塚古墳は、前章でも述べたように墳丘の盛土が後世に削平を受けており、墳形の全容は不明である。石室の西側では丸く円弧を描いた出畠の跡が残っており、それが円墳のなごりであったことが、その輪郭で確認される程度である。

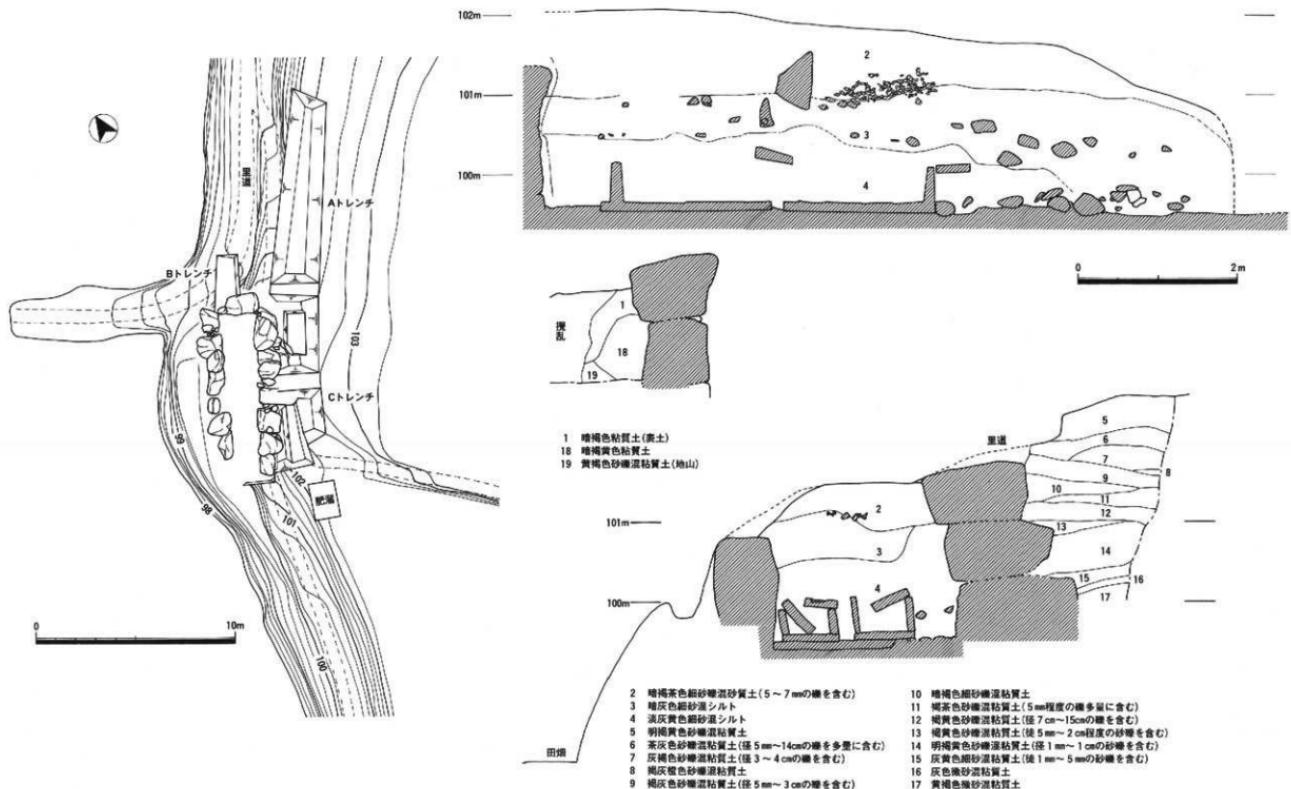
石室を中心とした墳丘部分に3ヶ所の（A～C）トレーナーを設定した（設定位置に関しては余儀なく道路計画地内に限定された範囲内での設定である）。Aトレーナーは石室の北東側の里道に沿った東斜面に南北方向のトレーナー、それに続くBトレーナーは石室の東側に、Cトレーナーは石室の奥壁側の墳丘部分にそれぞれ設定した。その状況については第5図で示した。以下、各トレーナーの調査結果について説明する。

Aトレーナー——長さ約10m×幅約2mを測る。西側は里道のため、攪乱しており不明である。東側のみ堆積状況を掴むことができた。上層は第1層～第3層までは中世～近代に盛られた土層である。第5層～第7層は扇状地の地肌（地山）面である。墳丘の封土は後世により削り去られており、築造時の封土がどこまであったのかは不明である。

Bトレーナー——長さ2m×幅1mを測る。西側は里道により削り取られている。東側で確認



第4図 塗丘及び周辺地形等高線図



第5図 埋丘トレンチ配置図及び石室横断面図

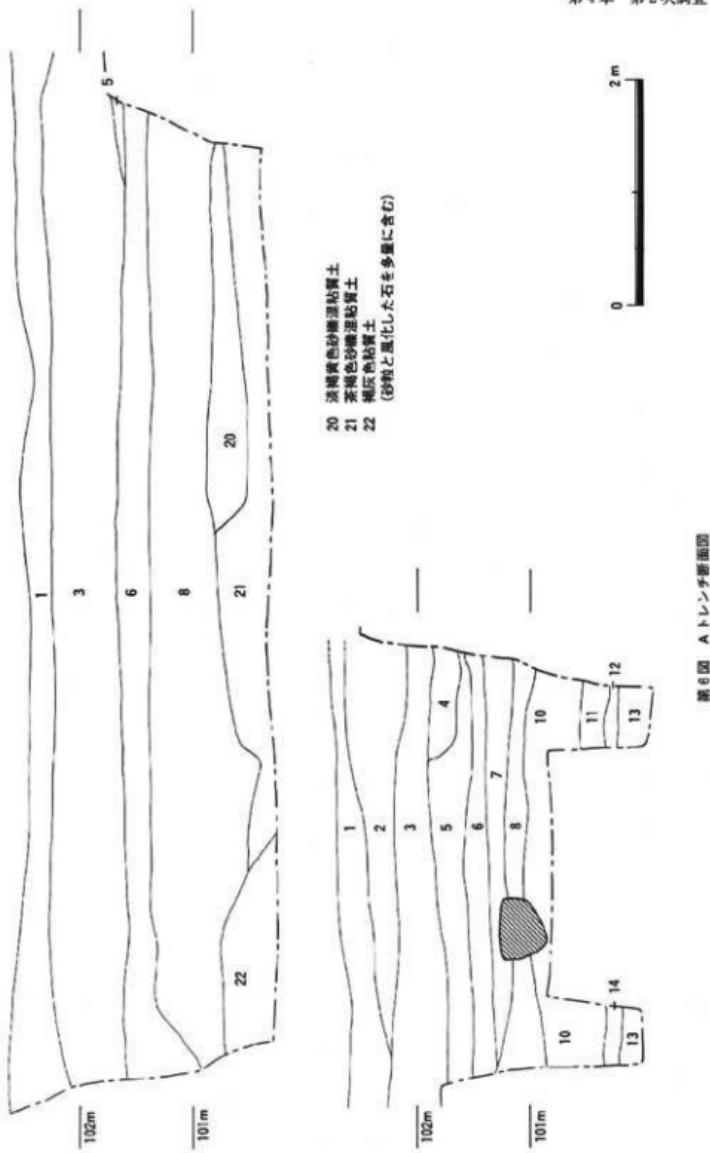


図6 図 A トレンチ断面図

した第1層は現在の表上で、第18層は墳丘の封土である。封土は東壁の石材を一段一段積めるように盛り重ねている。第19層は地山で石室を築造するときに削りだしている。

Cトレンチ——長さ5m×幅2mを測る。石室中央に東西のセクション1ヶ所を残した。そのセクションの堆積状況では第5層—第8層は近代の盛土であった。第9層—第16層は古墳の墳丘の封土と思われる。封土は何層にも重ねた盛り土している。東壁の石材を積み上げる際に一段ごとに区切りのある堆積が観察できる。また、第6層は地山(扇状地の地肌面)で、石室の築造時に削り取っていることが確認された。

以上、トレント調査では得られた古墳の状況である。調査の結果、墳丘の規模・盛り土状況などの全体像は明確に掴むことができなかった。が、推測できることは横穴式石室の大きさから想定して墳丘は直径15~20m、高さ5m前後の円墳であったことである。

3. 石室内部の状況

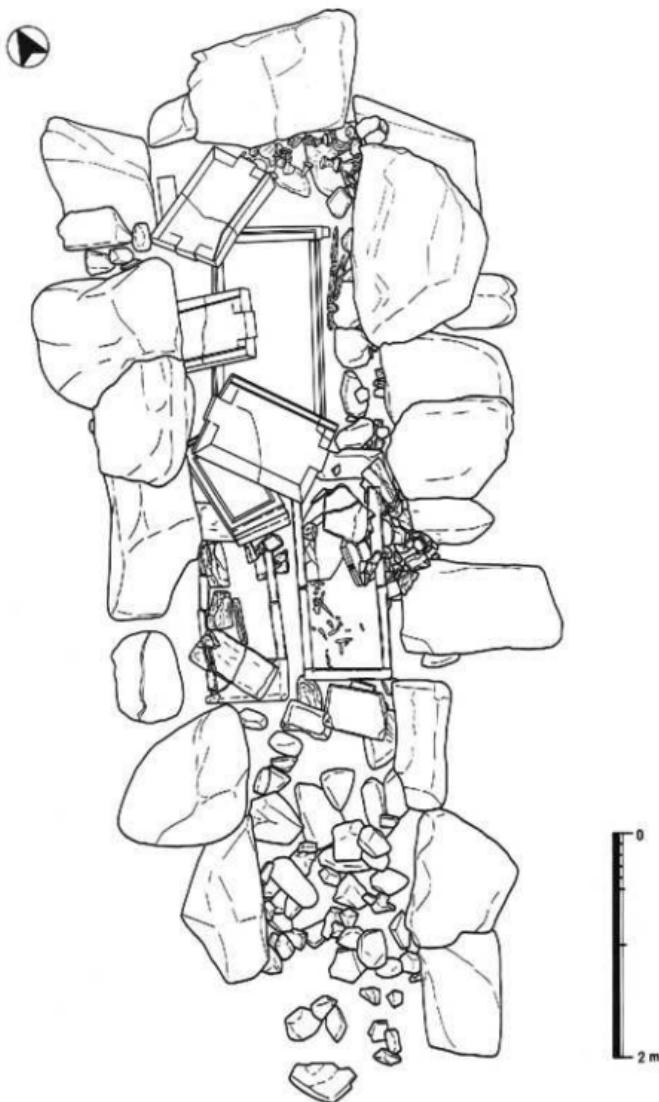
■ 石室内に堆積した土層

第5図に示したように大きく4層に分けられる。第1層は表土である。第2層は近代に堆積した土層で、拳大の石が集積した状態で確認した。また本来あった位置から外れた天井石及び奥壁の石を排除したその下からも多量の(拳大)石があった。時期はこの石とともに伊万里焼の茶碗などが出土した。この石については「明治~大正時代にかけて田畠の開墾で出てきた石をこの付近に捨てた」と言う地元の人の話である。第3層では平安時代末~鎌倉時代前期に埋まった土層と考えられる。この時期の土器類が多量に出土した。土器は主に土師器の小皿や瓦器の椀であった。また、猿の頭蓋骨も出土している。東側の玄門付近の羨道東にはこの時期に掘ったと考えられる径1m前後の土坑を検出しており、そこから玄室に進入し、土器類などを入れ倉庫がわりに使用していたのであろう。この時期はまだ天井石があり、石室の上部が空洞になっていたようである。

第4層は平安時代末以前に埋まった土層である。土層は石室の側壁が崩れて落ちた石材と枯の根以外、不純物があまり含まない土質であり、自然堆積したものと考えられる。この層に埋まった状態で玄室の奥に1棺(石棺I)、南側に2棺(西側一石棺II・東側一石棺III)の組合式家形石棺が埋まっていた。検出した石棺は蓋石が外れ、棺内はすでに盗掘された状態であった。

■ 石室の現状

石室は主軸を南西~北東方向(N-20°-E)にもつもので、南西側に開口がある。側壁の石材は西側壁の上部が抜取られ、半うじて1段分だけが遺存していた。天井石についても玄室奥から2つの巨石を残して他のものはすでに抜取られていた。付近にも見あたらなかった。1



第7図 石室内石棺及び副葬品検出状況平面図

側だけ残っていた天井石も西側に残れており、本来の位置を保っていなかった。東壁は三段分が残っていた。玄室奥の側壁の石材は抜き取られていない状態と考えられ、その上に天井石が載っていたものであろう。羨道部では農業用水路によって羨道付近が削られており、羨道部はもう少し南へ長かったものと考えられるが、現状ではどこまであったかは掴めない。その他の石材も不明である。

4. 石室の形状と規模

両袖式の横穴式石室である。石室の全長は現存部で9.1mを測る。そのうち、玄室は長さ5m、奥壁幅2.1m、玄門幅2.2m、奥壁付近の東壁高の現存部で2.4mを測る。玄室に続く羨道は現存部で、長さ4.1m、羨道幅1.4m、高さは玄門にある東袖石で1.6mを測る。この古墳の規模と高安古墳群に存在している古墳の中で明確に規模が測定された石室と比較してみると、中規模な石室の大きさに含まれるものである。全国的にみても同じことが言えるであろう。

■ 高安古墳の後期古墳

高安古墳群に存在する古墳時代後期～終末期に比定される古墳は、石室をもつ古墳である。現在までの調査で確認されている石室の形態には大きく3つに大別することができる。両袖式・片袖式・無袖式である。割合では無袖式がいちばん多く、続いて片袖式、両袖式である。両袖式は比較的規模の大きい石室である。「高安城を探る会」のグループが昭和62年度～平成2年度にかけて分布調査を実施し、横穴式石室をもつ古墳の位置・規模・石室形態などを調査している。その結果では、確認した古墳は185基で中田遺跡調査会学生有志が昭和49年に実施した分布調査の古墳と同数の結果が得られている。この成果をみると、墳丘径は20～30mのものが4基、15～20mのものが47基、25～30mのものが4基である。石室の形式では両袖式12基、片袖式108基、無袖式5基、不明60基である。片袖式の石室には右袖のものと左袖のものがあり、右袖式103基、左袖式5基である。玄室長は1.5～2.5mが17基、3.0～4.0mが106基、4.5～5.0mが62基である。これらを総合すると、高安古墳群の後期古墳は墳丘15～20mで、片袖式の石室に3.0～4.0mの玄室をもつものが主とする古墳である。芝塚古墳はこれらの石室規模の平均値より大きく、石室形式では数少ない両袖式の石室に入る。高安古墳群内では中規模以上の古墳に属することがわかる。

■ 石室の床面状況

石室の床面は石棺Iと石棺IIの床面以外、率大から人頭大の石材で敷き詰めている。石室奥の石棺Iが置かれていた周囲に人頭大の石材を一列に並べ、他の石棺と意識的に区別している。石棺I・石棺IIの床は底石を水平に据えるため石材を置かず、かわりに土を入れている。石棺IIIの床面には石材があり、当初、2棺を安置するように設計されていたが、その後の事情によ

第3表 既往調査で確認された高安古墳群の古墳数

岩本文一氏（大正11年（1920年））

	完全	破損	確認	計
樂音寺	2	—	—	2
大竹	2	—	—	2
神立	1	5	10	16
水越				0
千塚				0
大窪	5	10	10	25
山畑	30	50	70	150
服部川	60	100	100	260
郡川	30	50	50	130
教興寺				0
黒谷	10	5	10	25
垣内	10	10	10	30
恩智				0
神宮寺				0
計	150	230	260	640

府教委（昭和41年）

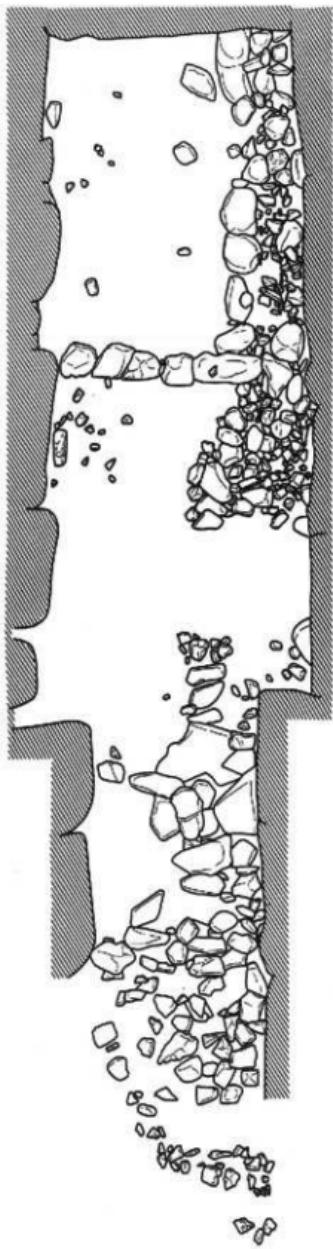
	完全	破壊	未確認	計
	3	3	—	6
	3	—	—	3
	3	7	—	10
	—	—	—	0
	—	—	—	0
	26	3	6	35
	1	1	—	2
	88	16	10	114
	19	12	2	33
	7	6	—	13
				0
				0
				0
				0
計	150	48	18	216

中田遺跡調査会（昭和49年）

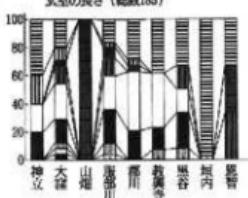
	完存	半壊	全壊	計
樂音寺	—	—	—	0
大竹	—	—	—	0
神立	14	4	6	24
水越	—	—	—	0
千塚	—	—	—	0
大窪	—	6	2	8
山畑	10	33	23	66
服部川	22	78	45	145
郡川	16	12	3	31
教興寺	—	—	—	0
黒谷	8	15	3	26
垣内	—	—	—	0
恩智	2	3	4	9
神宮寺	2	2	3	7
計	74	153	89	316

高安城を探る会（平成2年）

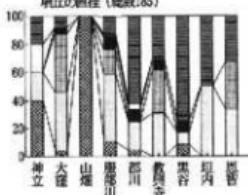
A	B	C	D	E	計
—	—	—	—	—	0
—	—	—	—	—	0
2	—	2	—	1	5
—	—	—	—	—	0
—	—	—	—	—	0
11	4	8	1	—	24
1	—	—	—	—	1
63	7	20	5	6	101
16	4	1	—	3	24
10	2	—	—	1	13
4	—	3	1	4	12
—	—	1	—	1	2
2	—	—	—	1	3
—	—	—	—	—	0
109	17	35	7	17	185



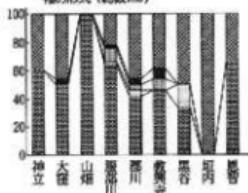
玄室の長さ(総数185)



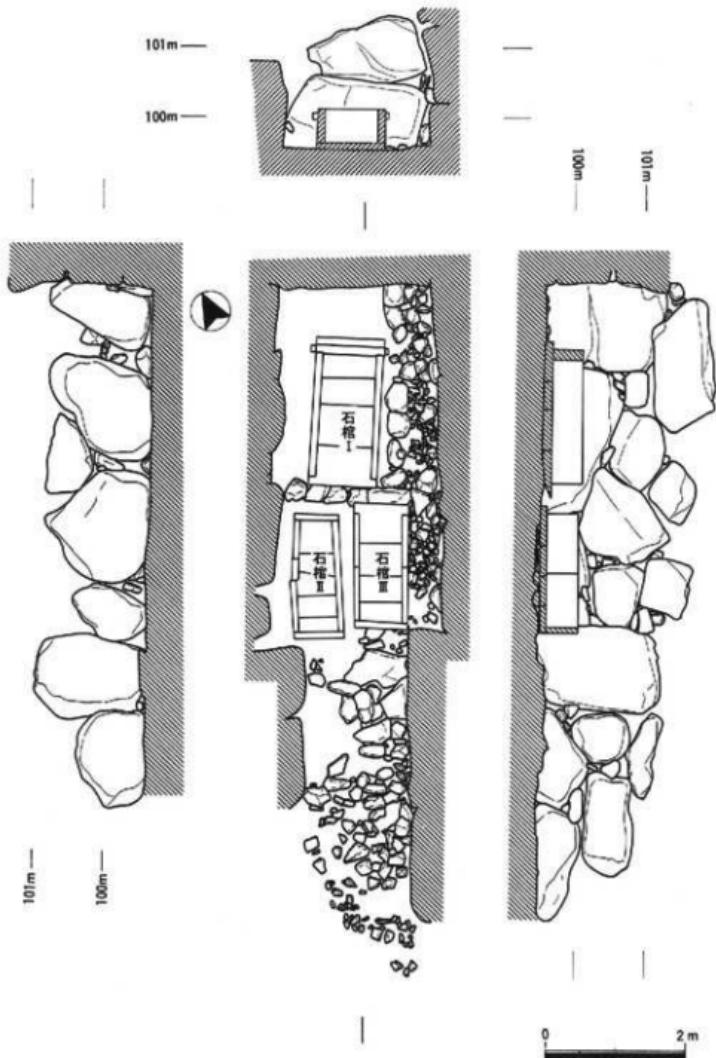
埴丘の直径(総数185)



地の形式(総数185)



第8図 石室床面平面図



第9図 石室展開図

り、3棺目を安置することになったものであろう。篠道の床面には人頭大よりややこぶりの石材が敷き詰められていた。篠門付近には後世に破壊されたものと考えられ、あまり石材はなかった。また、床面には排水溝はみられなかった。

■ 石室の石材と積み方

石室の石材は、すべて花崗岩を使用しており、当古墳の東方で産出されたものであることが分析の結果わかった（詳細な石材の分析結果については「第5章 石材について」に掲載している）。

石材の積み方は、玄室部と篠道部ともに横積みにされており、玄室及び袖石（玄門の両側にある石）には比較的大きい石材が使用されている。

■ 閉塞石の状況

篠道部内の床面には人頭の石材が散乱していた。これらの石材が閉塞石の残骸と考えられる。この閉塞石は篠道口を塞いでいたものと思われるが、塞ぐには量的に少ないとから盗掘ないしは開鑿により取り捨てられたと考えられる。残った閉塞石を取除くと、床面には人頭大よりややこぶりの石が散かれていた。

5. 石棺

■ 配置と検出状況

石棺は玄室に3基を安置していた。配置は第9図に示すように玄室の奥壁の西側付近で石棺I、玄門の西側付近で石棺II、さらに石棺IIの東側に並んで石棺IIIが安置しており、すべて石室に対し縦（同）方向に並べられている。3基の石棺の内部はとともに盗掘され、その際に石棺の蓋石を割ったり、ずらしたりしている。調査ではそのままの状況で遺存していた。調査時点では土砂や蓋石の一部が内部に落ち込んで石棺内全体が埋まっていた。一番ひどい状態で検出したのは石棺IIIの蓋石で、ほとんどが割られており、内側の蓋石は粉々に粉碎された状態であった。以下、各石棺について説明する。

■ 石棺I

検出状況

棺身はそのままの状態であったが、蓋石・封石・南小口が盗掘の際に移動している。北側の蓋石は東端面を大きく奥壁との間の床面にずらしている。西側の一部が辛うじて棺身に載っている。内側の蓋石は西側へずらしており、西端面が西壁と棺身の間の床面まで落ちている。南側の蓋石は東端面を約45度南側にずれていた。封石は2個とも東壁との間の床面に落ちていた。南側の小口は外されており、石棺IIの上に内側の面が上に向いた状態で載っていた。

石棺の形状と特徴

組合式家形石棺である。底石4枚・側石2枚・小口2枚・蓋石3枚で計11枚と封石2個を使用して組み立てている。組んだ際の大きさは長さ2m、幅1~1.1m、高さ0.75mを測る。蓋石は面取り及び繩掛突起がある。繩掛突起は他の家形石棺に比べ退化したものである。突起は南側の蓋石に3ヶ所、中央と北側の蓋石に2ヶ所ずつあり、計7ヶ所である。蓋石が合わさる2ヶ所の表側には蓋石を封印するようなものと考えられる封じる石を置く石（ここではこの石を便宜上「封石」と仮称する）を埋め込むための溝が平行に彫られている。裏側には棺身を埋め込む溝が彫られている。小口は北側と南側とはかたちが異なる。北側の小口には側の上位付近に方形の突起があるが、南側の小口はない。また、内側の面では側を埋め込む溝は両方にみられるが、南側の小口にはその内側が方形に窪ませている。側石は2枚で、中央部が膨らんでいるが、両面は丁寧に加工している。側の端面には蓋及び小口と噛み合せるための段が彫られている。両方の側石はほぼ同形態であるが、どちらに設置する側石かがわかるように東側の側石の南下の角に小さく三角形に彫っている。南端に置かれている底石の南東側の面にも三角形の部分があり、組み合せがわかるようにしたものであろう。底石は4枚で、小口・側石が底面より内側に立てるよう溝が彫られている。小口ではゆったりとした作りである。また底石同士を正確に合わせるために、合わせる面の上面に目印が施してある。北部の底石と2番目の底石が合わさった中央西にノミのような工具で「|」が縦方向に一条刻まれている。2番目の底石と3番目の底石が合わさった中央東に「×」が刻まれている。3番目の底石と南側の底石が合わさった中央部にも北側の底石と2番目の底石に刻んでいるものと同じ「|」が縦方向に一条刻まれている。底石の裏側は石材採取したのみの状態で、丁寧な加工は施していない。その他の石材は面を丁寧に加工している。また石棺塗布された朱は蓋石や石材が噛み合った面、全体にはんやりと若干残っており、底石の裏面以外は全体に塗られていたと考えられる。

■ 石棺II

検出状況

棺身と北の蓋石はそのままの状態であった。中央と南の蓋石4枚はずらされたり、割られたりしている。北側2枚は棺身内に、南1枚は南の蓋石の上に載っていた。

石棺の形状と特徴

組合式家形石棺である。底石6枚・側石6枚・小口2枚・蓋石5枚・封石2個で計21枚を使用して組み立てている。組んだ際の大きさは長さ1.8m、幅0.8m、高さ0.4mを測る。蓋石の表は面取りをしているだけで繩掛突起はない。蓋石の上には石棺Iと同様に載せたと思われる封石2個が見つかっているが、この封石を固定するように加工痕ないしは置いた痕跡はない。

蓋石の裏側は棺身が埋め込めるように縁が1段削っているのが両端側の蓋石だけで、内側ではなく平坦である。蓋石を並べて復元した結果、両端側が不揃いであった。小口は2枚で内側の側石が埋め込められるように一段窪ませている。上部端面の中央には蓋石を固定するための突起がある。側石は3枚づつの計6枚を使用している。真中の側石は外側の側石の長さの半分以下の大きさである。側石同志や側石と小口が合う端面はかみ合わるように彫っており、合わさる面の段が其位置になっている。底石は6枚で面の縁は側幅に合うように一段低く彫っている。朱は噛み合った面に若干残っており、底石の裏面以外は全体に塗られていたと考えられる。

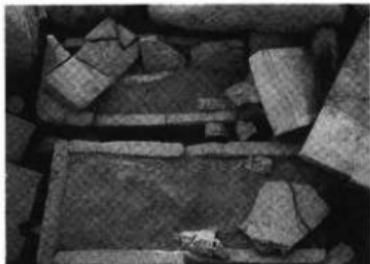
■ 石棺Ⅲ

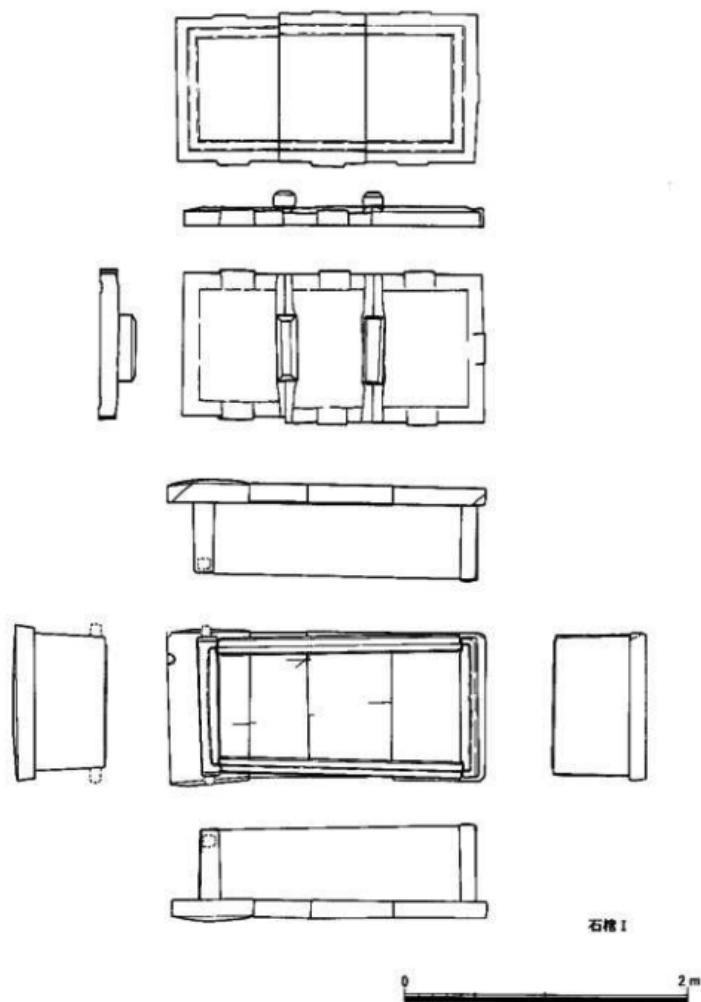
検出状況

棺身はそのままの状態であった。蓋石は北側2枚が棺身内に、南側2枚は南側の後退の床面に割られた状態で散乱していた。玄門北小口は北側へ倒され、割られていた。

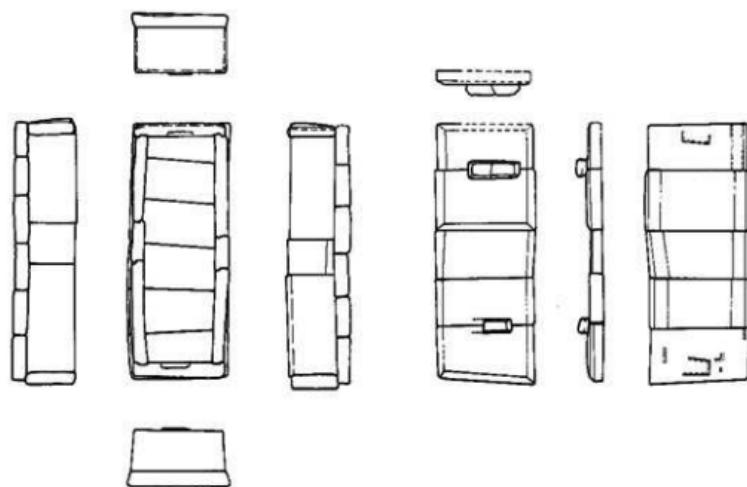
石棺の形状と特徴

組合式家形石棺である。底石4枚・側石4枚・小口2枚・蓋石4枚で計14個を使用して組み立てている。組んだ際の大きさは長さ1.8m、幅0.8m、高さ0.6mを測る。蓋石の表側は石棺Ⅱと同様、面取りしているが縦掛突起はない。内側に使用している蓋石一つには3面に面取りがあり、外側に置くものである。また蓋裏には縁が棺身に合わせて一段彫っているものと彫っていないものがあった。このことから石棺Ⅱの蓋石は別々に作られた石棺の蓋石をこの石棺に使ったようである。小口・側石は噛み合うように彫っている。底石は4枚の内面を平坦に加工し、その縁面には小口・側石の厚さ分を一段低く彫り、組立しやすいようにしている。裏側は雑な加工で、ノミなどの工具痕が残っている。また朱については石棺Ⅱのように噛み合った面にも依存しないことからこの石棺だけは朱が塗布されなかった可能性が考えられる。

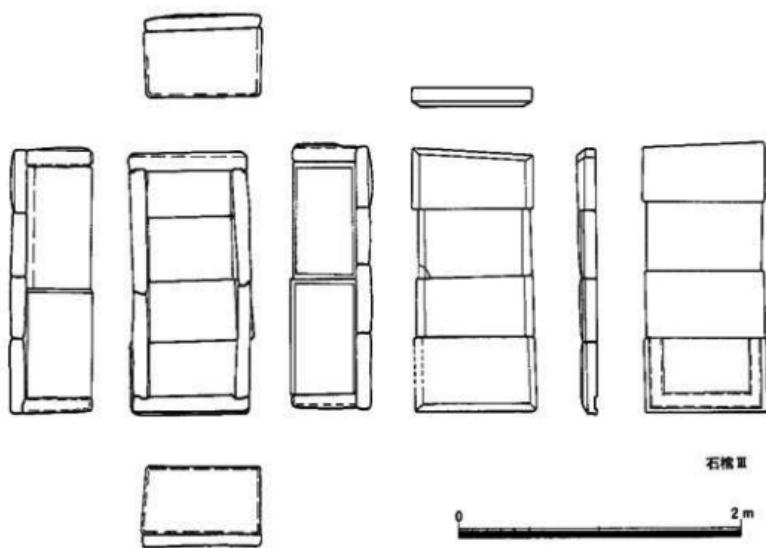




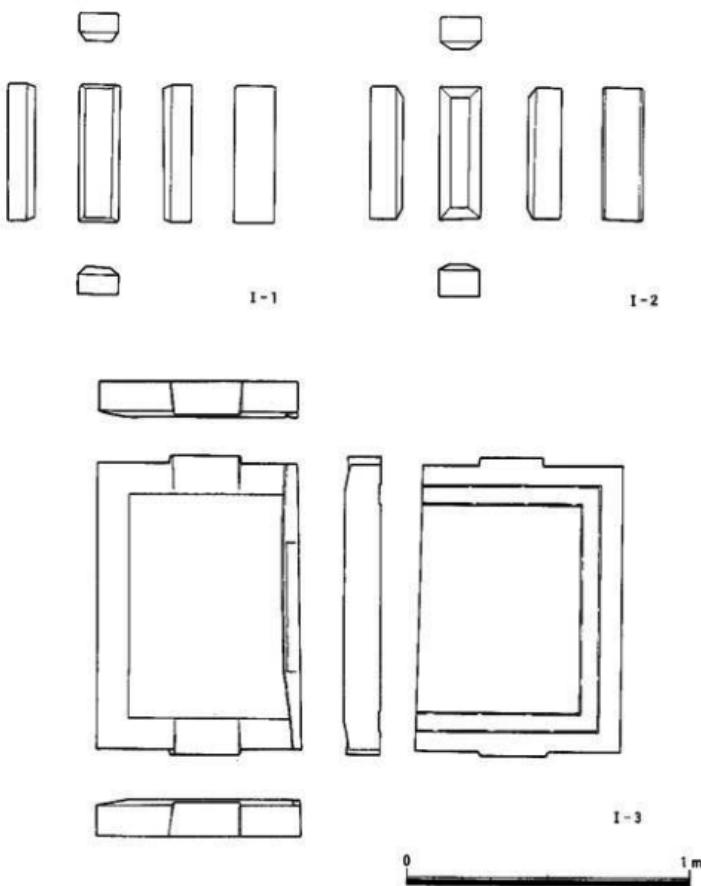
第10図 石格 I 復元断面図



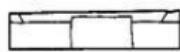
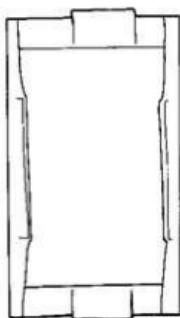
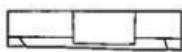
石棺 II



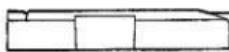
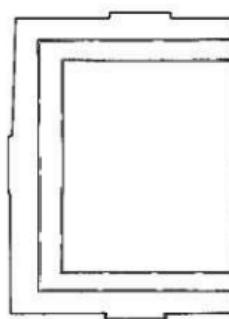
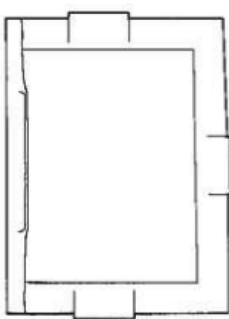
第11図 石棺II・石棺III復元展開図



第12図 石椎 I 石材展開実測図 1



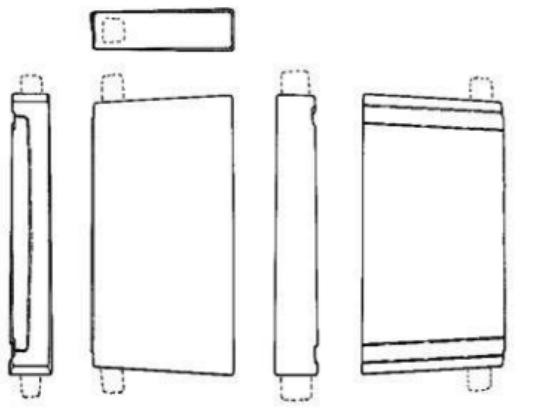
I-4



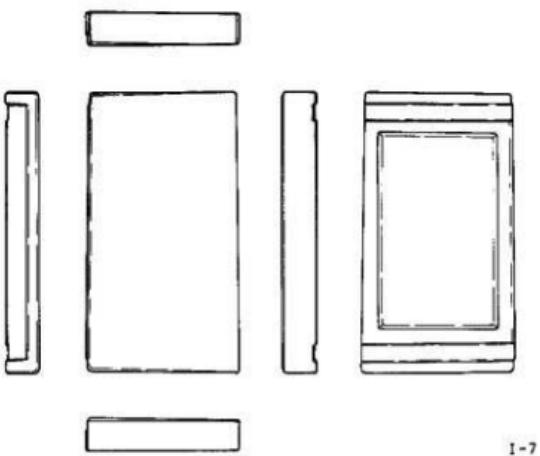
I-5



第13圖 石棺工石材展開實測圖 2



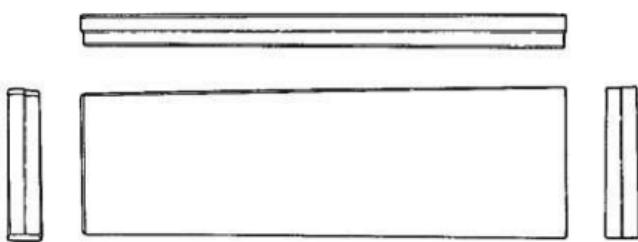
I-6



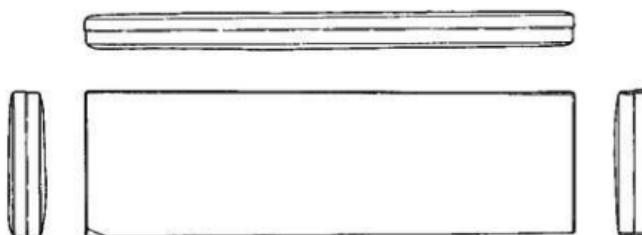
I-7



第14図 石棺I 石材展開実測図3

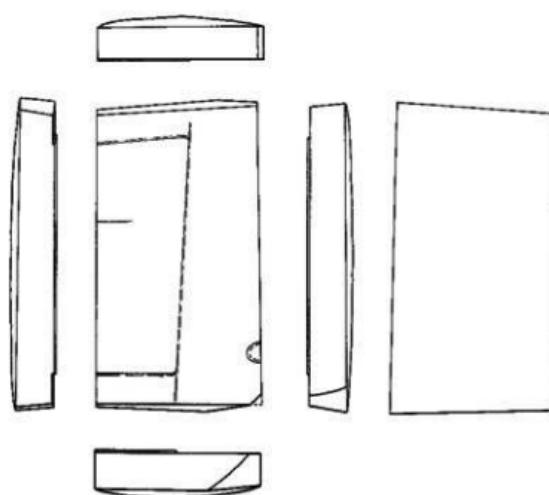


I-8

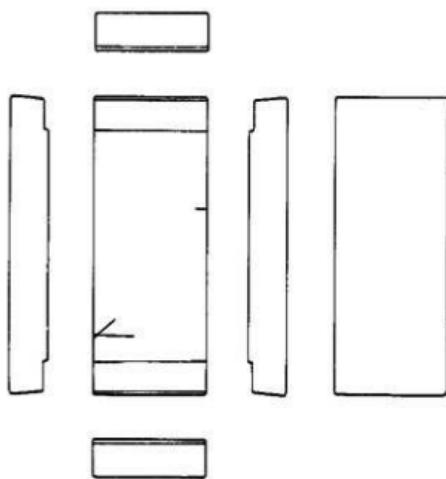


I-9
0 1 m

第15図 石棺工石材展開実測図4



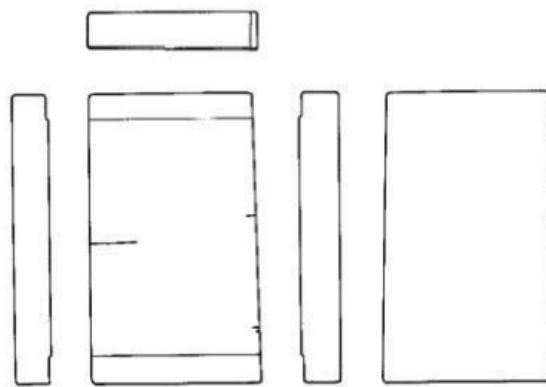
1-10



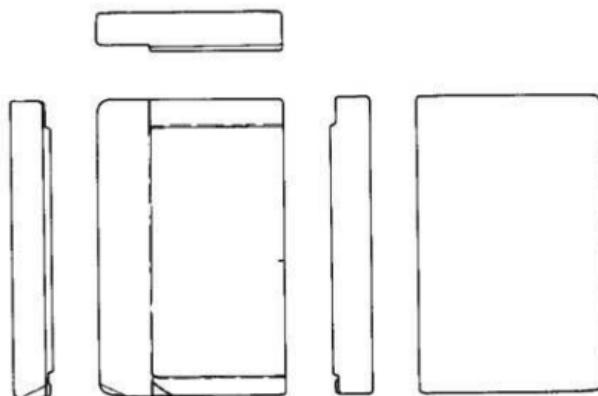
1-11



第16図 石棺Ⅰ石材展開実測図5



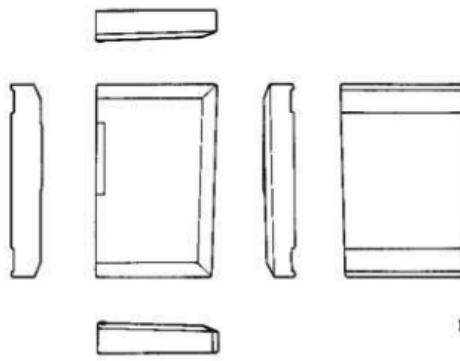
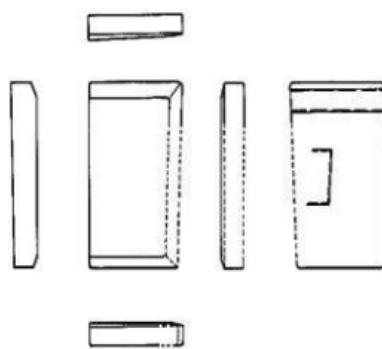
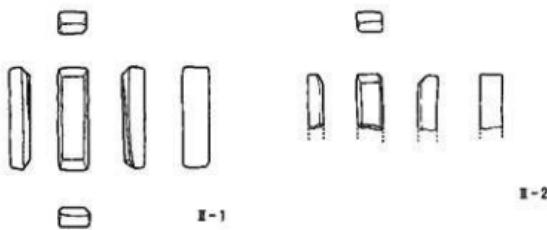
I-12



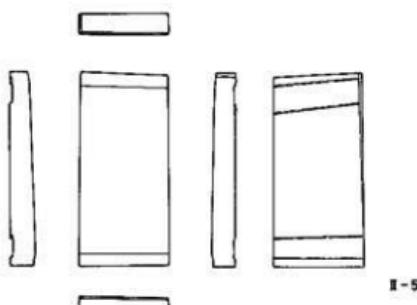
I-13



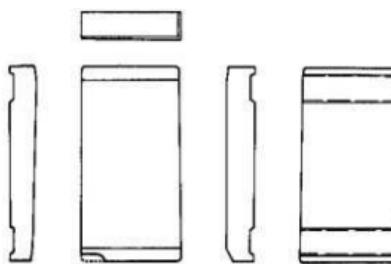
第17図 石棺 I 石材展開実測図 6



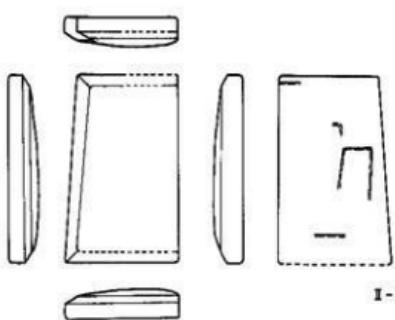
第18図 石棺II石材展開実測図1



II-5



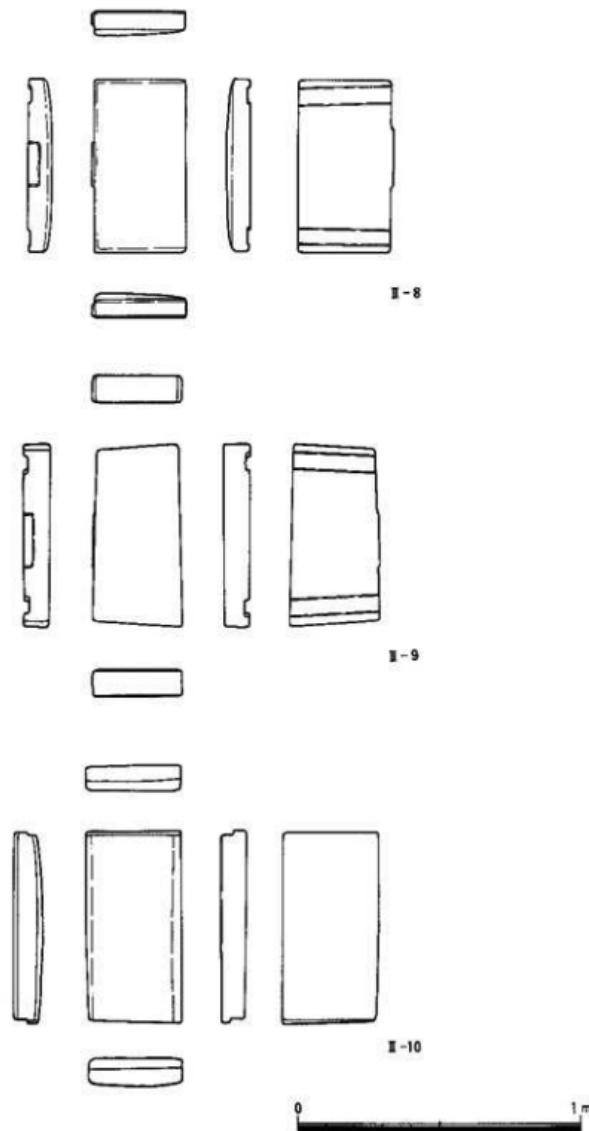
II-6



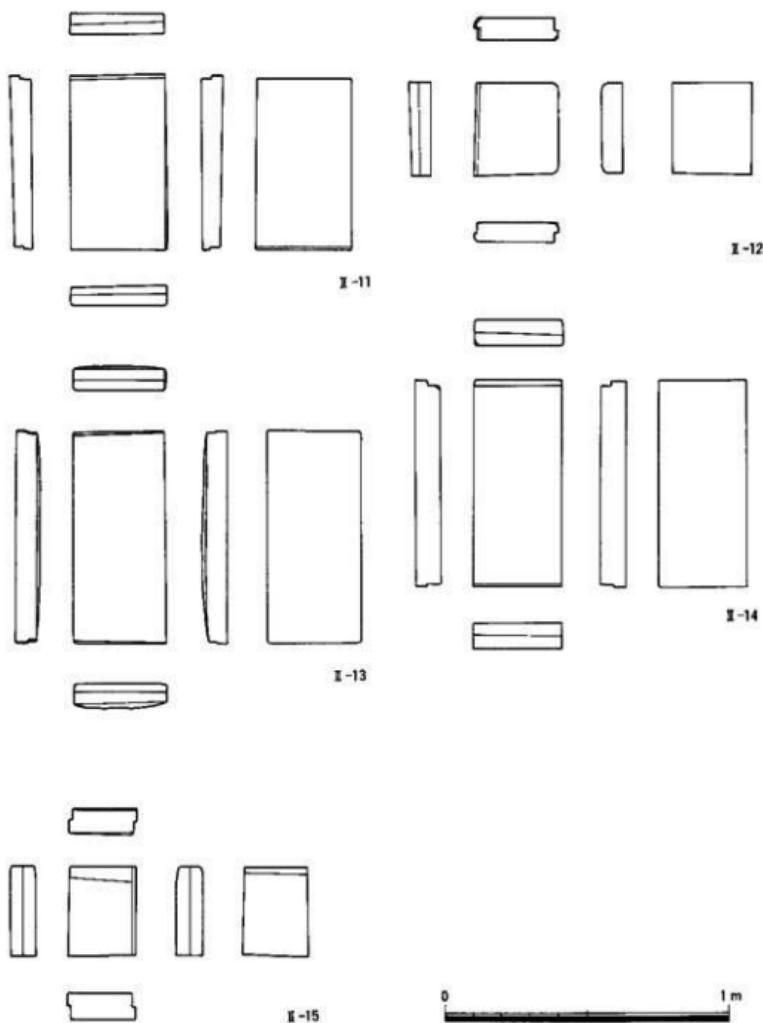
II-7



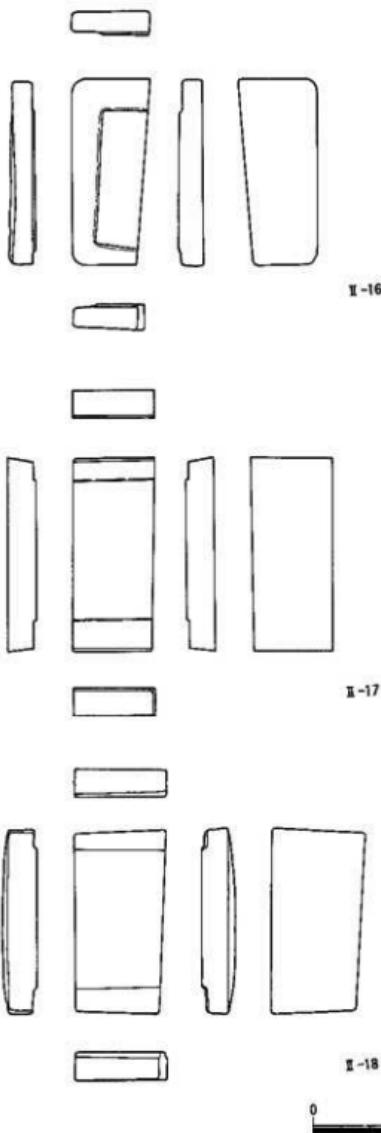
第19回 石櫓II石材展開実測図2



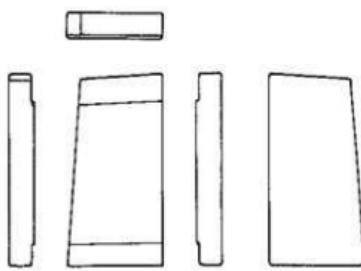
第20図 石棺Ⅱ石材展開実測図 3



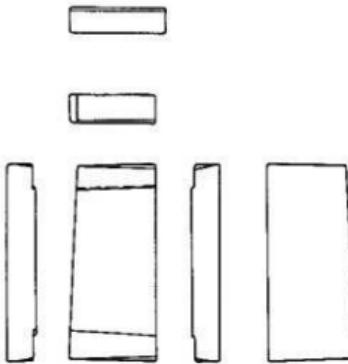
第21図 石材II石材展開実測図4



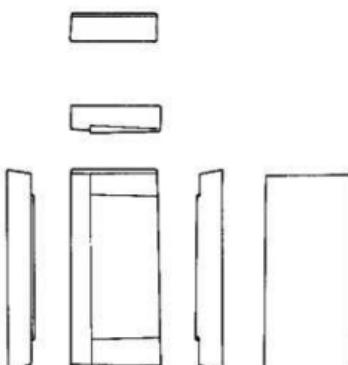
第22図 石棺Ⅱ石材展開実測図5



I-19



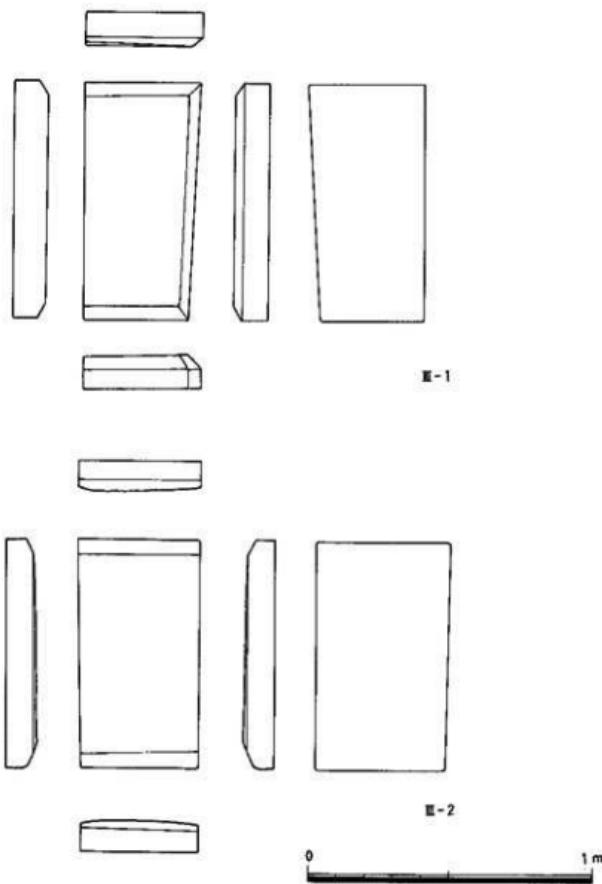
I-20



I-21



第23図 石棺II石材展開実測図 6



第24図 石棟Ⅱ石材展開実測図1

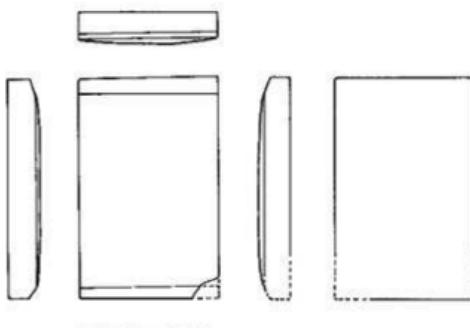


図-3

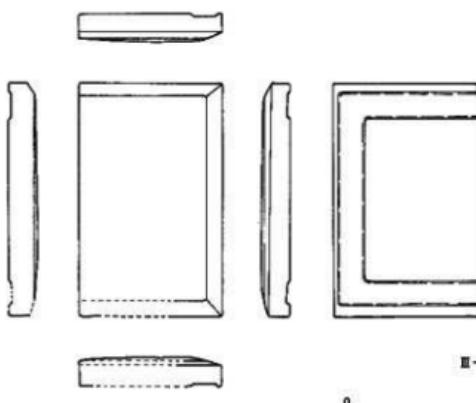
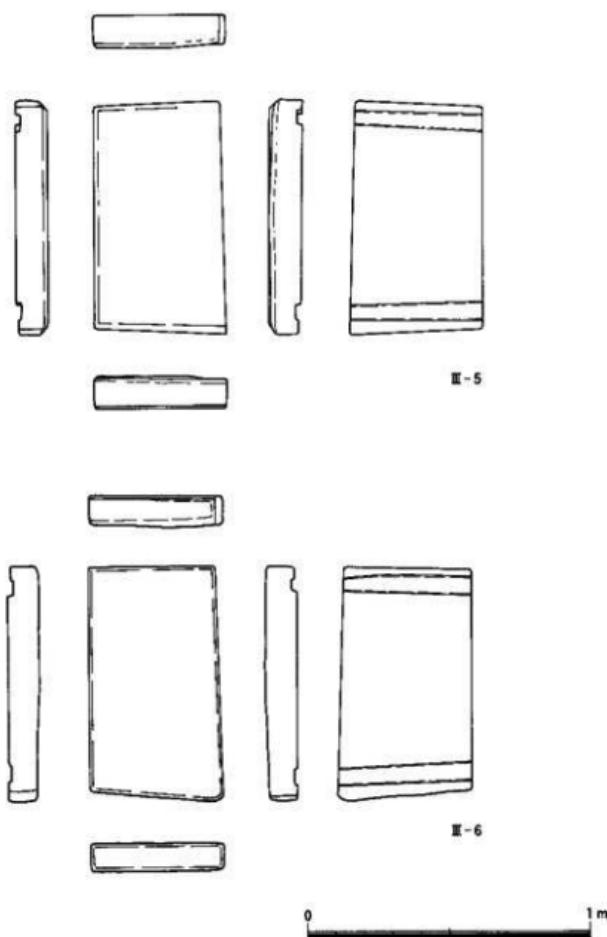


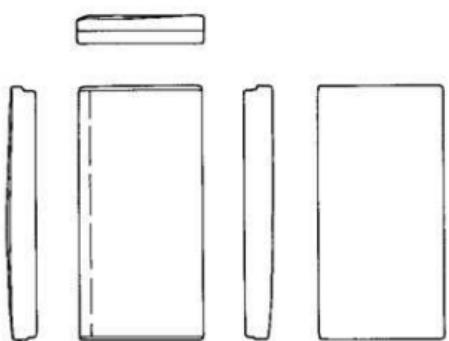
図-4



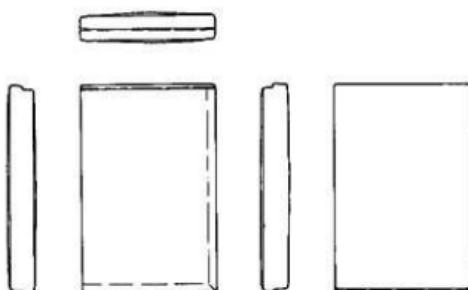
第25回 石棺Ⅲ 石材断面実測図 2



第26図 石垣用石材農開実測図 3



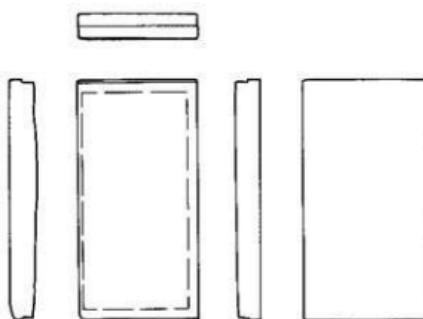
III-7



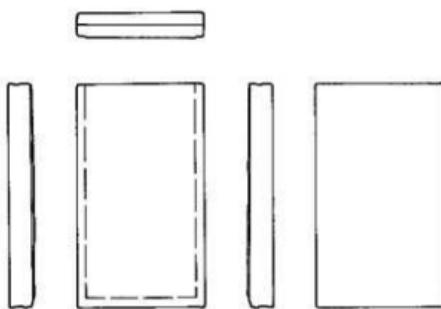
III-8



第27回 石棺Ⅲ石材展開実測図4



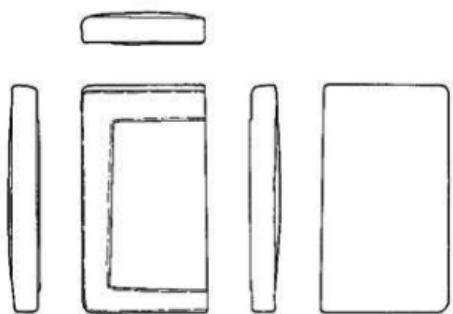
III-9



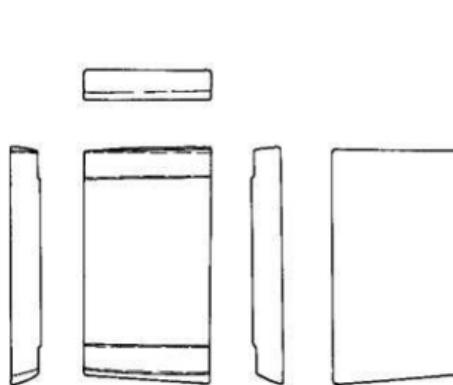
III-10



第28図 石棺Ⅲ石材展開実測図5



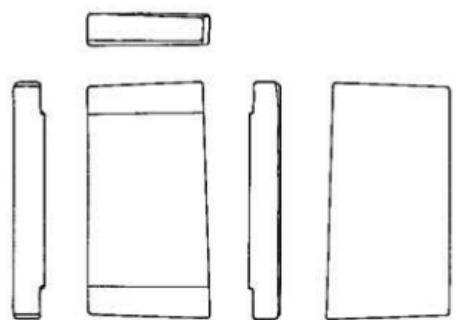
III-11



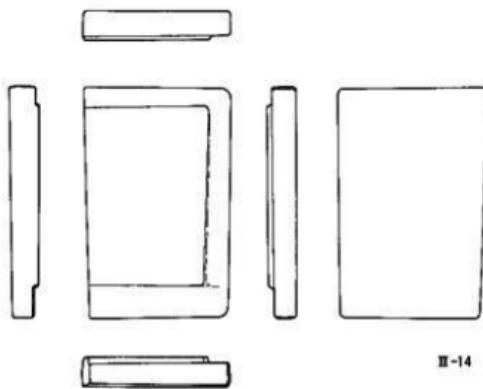
III-12



第29图 石棺及石材展商实测图 6



III-13



III-14



第30図 石棺目石材展開実測図7

第3節 出土遺物

遺物は、石棺内から遺体の一部ほか、石棺Ⅰでは鉄製品2点・小玉20点・玉1点、石棺Ⅲでは鉄製品（鉄釘など）2点、石棺Ⅱでは青銅製の銀環1点・須恵器の器台2片が出土した。各石棺の周辺の床面からは盃掘をまぬがれた副葬品が原位置に据えられたままに残っていた。副葬品が置かれていた場所は、石棺Ⅰと奥壁の間で土器17点（うち須恵器16点）と鉄製品17点で、うち馬具の金具（鉄具）2点、鉄釘9点、不明鉄製品1点である。石棺Ⅰの東側では、直刀（長短1刀ずつ）2点と須恵器の蓋1点である。石棺Ⅱの南側（玄門の東角）で須恵器の台付壺2点、土師器の高杯1点、石棺Ⅱの北側で用途不明の金銅製品片1点、石棺Ⅲと石棺Ⅳの間で須恵器の杯身1点・鉄製品1点が出土した。また、石棺内の上部では、平安時代末～鎌倉時代前期に比定される土師器の小皿・中皿・土釜、瓦器の椀・小皿、灰釉四耳壺などが多量に出土した。なお、古墳の副葬品とは違う出土遺物については、後章に掲載した。

1. 石棺内の遺物

■ 石棺Ⅰ

刀子1点・不明鉄製品2点・小玉23個・玉1点が底面付近から出土した。刀子（S 1）は刃先のみので、中央東の遺骸片の上から出土している。不明鉄製品（S 2・S 3）は断面長方形で、何かの破片の一部である。中央北からの出土である。小玉（1～22）は半透明な黄色のガラス製で、長さ及び径は2mm以内の非常に小さいものである。その中に径0.5mm前後の穿孔をしている。23は黒色で瓢箪形をした玉状のもで穿孔がある。

■ 石棺Ⅱ

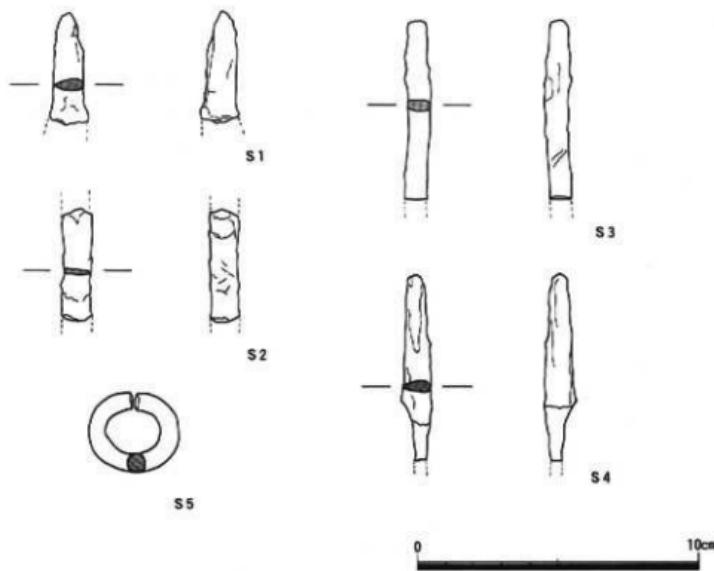
耳環1点・器台の部杯片である。耳環（S 5）は底面中央から出土した。鋼心でその外側に金ないしは銀を鍍金したと思われるが、その形跡は見られなかった。器台（21）は底面北側で出土した。また、淡道の床面からも出土している。接合したが杯部のみで、脚部は見つかなかった。

■ 石棺Ⅲ

刀子1点である。刀子（S 4）は刃の部分で、茎部は欠損している。

第5表 石棺内出土遺物法量表

遺物番号	石棺番号	器種	※単位はcm			
			全長	幅	厚み	孔径
S 1	石棺Ⅰ	刀子	4.1	1.1	0.4	—
S 2		不明	4	1	0.2	—
S 3		不明	6.3	0.9	0.4	—
S 4	石棺Ⅲ	刀子	6.6	0.7～1.1	0.1～0.4	—
S 5	石棺Ⅱ	耳環	2.8～3.2		0.6	—
1～22		小玉	0.1～0.3	0.1～0.3	—	0.05
23		玉	0.35	0.4	—	0.1 瓢箪形



○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
1	2	3	4	5	6	7	8

○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
9	10	11	12	13	14	15	16

●	○	○	○	●	○	○	●
○	○	○	○	●	○	○	○
17	18	19	20	21	22	23	

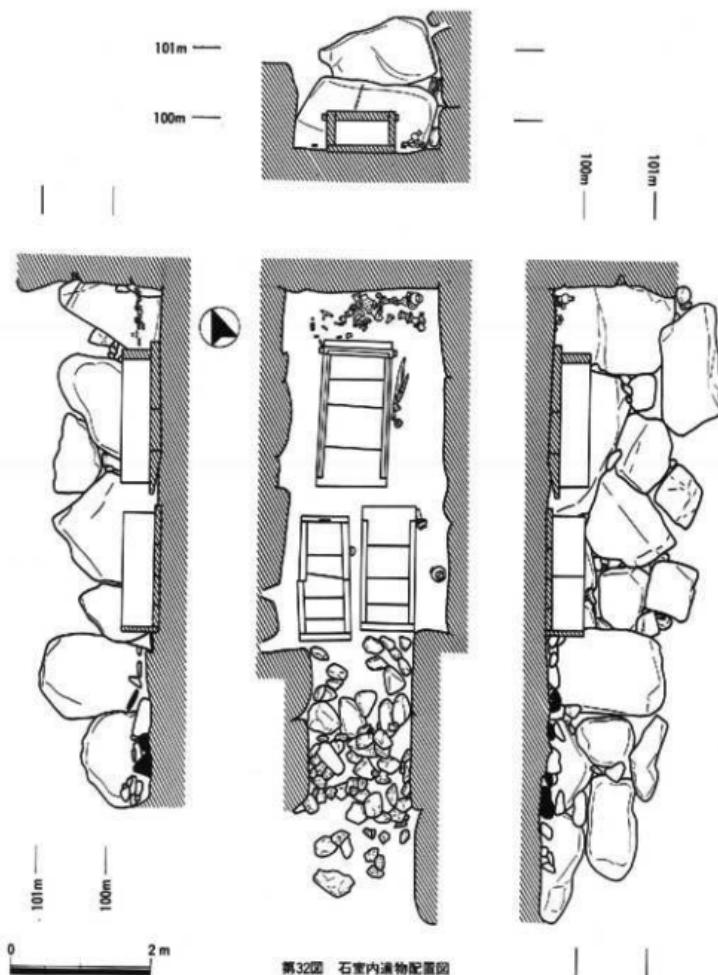


第31図 石棺内出土遺物実測図

2 石室内の遺物

第33図—第40図に図示している。遺物は土器（土師器・須恵器）・金属製品（銅製品・鉄製品）であった。これらの個々の遺物が出土した出土位置は下記のとおりである。

石棺Iと奥壁の間の床面では、土器（土師器・須恵器）17点（1・5・6・8・14～20・22



第32図 石室内遺物配置図

～27) と鉄製品 5 点で円頭柄頭 1 点 (S10) ・ 鞘尻 1 点 (S13) ・ 鐣 (S11) ・ 馬具の鉄具 2 点 (S14・S15) である。石棺 I の東側では、直刀 (長短 1 刀ずつ) 2 点 (S6・S7) と須恵器の蓋 1 点 (11) である。石棺 II の北西角では土師器壺 2 点が出土した。石棺 III の南側 (玄門の東角) では、土師器の高杯 1 点 (3)、須恵器の台付長頸壺 2 点 (南側 8・北側 9) である。石棺 II と石棺 III の間では、須恵器の杯身 1 点 (12) ・ 銅 1 点 (S12) である。

土師器

3 点が出土した。壺 (1・2) 2 点、脚台付鉢 1 点 (3) である。壺 2 点は体部がどっしりとした玉葱形で長頸の口縁をもつ、2 は外面の体部上位にハケナデ後ヘラミガキ、下位はヘラケズリ、口縁部は縱方向のヘラミガキを施している。

須恵器

長頸壺

4 ～9 の 5 点である。4 は土師器の長頸壺より一回り小さく、形態が似ている。5 ～9 は台付の長頸壺である。大きく 3 つに分ける。5 と 6 ～8、そして 9 である。5 は頭部がしまり、外上方へ若干外反しながら伸びる口縁部で体部より長い。体部は偏球形で、中央には沈線により構成され、そのなかに構造列点文が密に施している。脚部は長方形のスカシ 2 段が三方にあけられている。6 ～8 は 5 より体部が大きく、脚部の裾もどっしりとしている。長方形のスカシも一段である。口縁部は体部高より短く、全体にバランスがとれている。調整では体部下位は回転ヘラケズリであるが、体部上位では 6 がカキ目、7 が一条の沈線で、8 はない。

杯蓋

10・11 の 2 点である。10 は天井部が低く、綫の痕跡しかない。11 は全体に偏平しており、焼成時に変形したものと考える。天井部には偏平した「そろばん」形のつまみがつく、口縁部のかえりはあまり突出していない。調整は回転ナデで、天井部外面の一部に回転ヘラケズリがみられる。

杯身

12・13 の 2 点である。12 は杯底部が浅く、立ち上がりも短い。13 は立ち上がりのないものである。調整は回転ナデで、13 の底部外面の一部に回転ヘラケズリがみられる。

高杯

14～20 の 6 点で、すべて無蓋高杯である。14 は深い楕形の杯部に脚部がつく。15 は浅い半球形の杯部にスマートな脚部がつく。16 は 14 と 15 の中間的形態である。17～20 は綫をもつ杯蓋を杯部にしたような形態である。杯部は比較的深いもので全体に丸みをもつ、その杯部に長い脚部がつく。脚部には長方形のスカシ 2 段が三方にあけられ、裾部で大きく広がる。スカシとスカシの間には凹線が巡る。

器台

21の1点である。杯部は丸い杯底部から僅かに屈曲し、上方へ伸びる口縁部に至る。口縁部は外方へ屈曲し、端部は丸い。脚部が欠損しており、不明である。調整は回転ナデであるが、杯底部外面には格子タタキ、内面には円弧タタキ後静止ナデが行われている。杯部と脚部の接点は指ナデで、接合した跡がみられる。

瓶

22~26の5点である。偏球形の体部に大きく外反する口縁部がついている。口縁部の外面は沈線によって3区画に分けられ、上2段の間に文様が施されている。上段部分には範描直線文、下段部分には柳描直線文がそれぞれ施されている。また、口縁部付近には範描斜行直線文が見られる。体部中央では沈線により文様帯が構成され、そのなかに柳描斜行列点文を密に施している。

平瓶

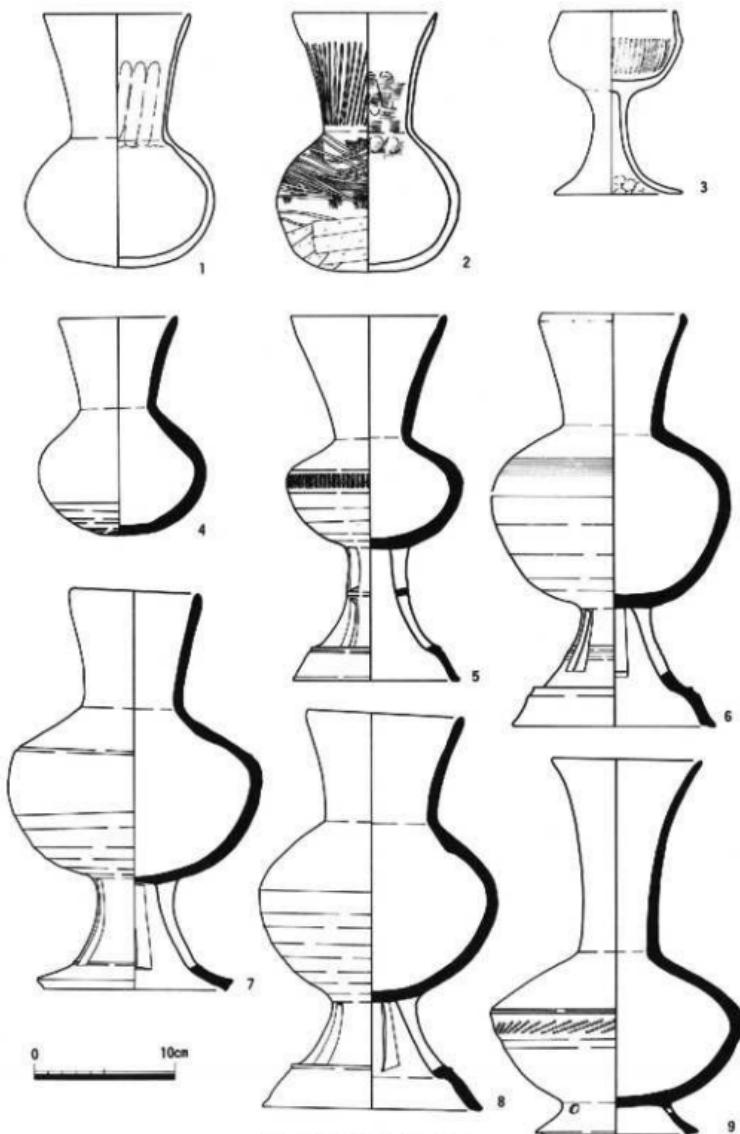
27の1点である。体部は輪を2つ合わせた偏平した球形で、口縁は斜め上につき、口縁部は外反気味に伸びる。口縁頸部付近には角形の取手が1対ついている。

以上、石室内で出土した土器である。このうち須恵器については田辺昭三氏や中村浩氏などによって編年されている。ここでは中村編年（註1）に基づき型式的な位置付けを行ってみた。

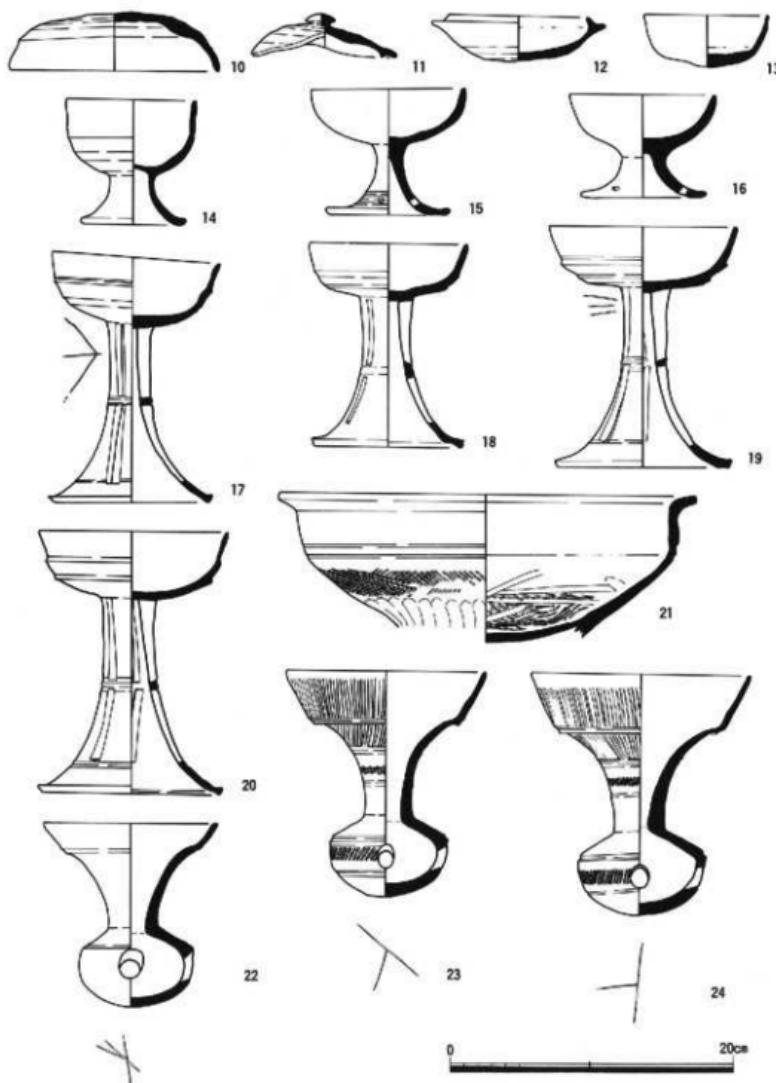
長頸壺では5がやや古く、9が新しい段階に位置づけられる。また、蓋杯では11・13がⅢ型式1~2段階に位置づけられる。その他の須恵器の大半はⅡ型式4~6段階にはいるものである。須恵器での年代としては6世紀後半から7世紀中葉ごろまでの幅広い時期のものである。このことは石棺3基が安置された時間幅を想定する最良の資料である。

註

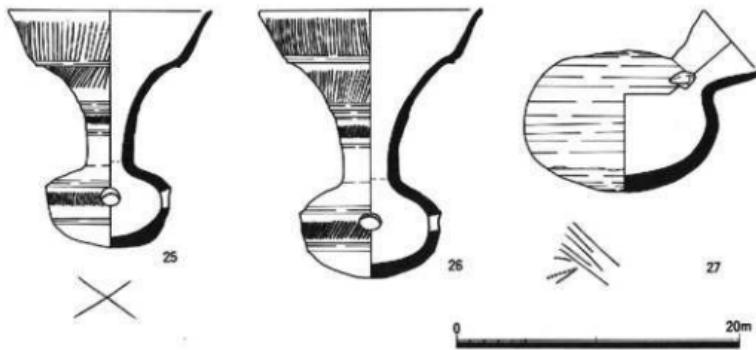
- 註1・中村 浩「和泉陶邑窯の研究」柏書房 1981
- ・大阪府教育委員会「陶色I」1976



第33図 石室内出土土器実測図1



第34図 石室内出土土器実測図 2



第35図 石室内出土土器実測図3

第6表 石室内出土土器観察表

遺物番号 図版番号	器種	法 量 (cm)	質	色 調	胎 土	成 形	備 考
1 長颈器 (上部)	口 径 16.4 器 高 18.0 脚 大径 13.5	外面 口縁部ヨコナデ、体部斜面のぬ不明 内面 口縁部横ナデ、ヨコナデ、頸部不平直	棕褐色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む。	良好		
2 同 上	口 径 16.2 器 高 18.4 脚 大径 13.0	外面 口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、体部ハケナダ後ヘラミ ガキ、底部ハケタゼリ 内面 口縁部ヨコナデ・昔ナダ後ハケナダ、体部ヘラナダ?	棕褐色	1.5mm以下 の砂粒を多量 に含む。	良		
3 高 扇 (上部)	口 径 8.0 器 高 13.0 脚 大径 9.0	外面 ナデ 内面 ヨコナデ、杯部吹付状痕文、削跡ナデ、指壓痕	淡褐色	0.5mm以下 の砂粒を少 量含む。	良好		
4 長柄器 (頭部)	口 径 8.4 器 高 15.5 脚 大径 12.1	外面 口縁部・脚部回転ナデ、回転ヘラケタゼリ 内面 回転ナデ	淡青灰色	3.5mm以下 の砂粒を少 量含む。	良好		
5 台付長柄器 (頭部)	口 径 16.8 器 高 26.2 脚 大径 10.9 脚大径 12.5	外面 口縁部・脚部回転ナデ、体部斜押文、回転ヘラケタゼリ 内面 回転ナデ	外 灰色 内 淡灰褐色 脚部 赤褐色	5mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好		
6 同 上	口 径 10.0 器 高 29.6 脚 大径 14.2 脚大径 15.0	外面 体部下位ヘラケタゼリ、他は回転ナデ 内面 回転ナデ	乳灰青色	2mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好	外側灰か ぶり	
7 同 上	口 径 8.8 器 高 28.4 脚 大径 12.9 脚大径 15.0	外面 体部下位回転ヘラケタゼリ他は回転ナデ 内面 回転ナデ	乳灰青色-灰 色	2.5mm以下 の砂粒を多量 に含む。	良好	脚部外側灰か ぶり	
8 同 上	口 径 10.1 器 高 29.3 脚 大径 15.5 脚大径 17.0	外面 体部下位回転ヘラケタゼリ他は回転ナデ 内面 口縁部回転ナデ、体部斜止ナデ	灰青色	3mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好	体部外側灰か ぶり	
9 同 上	口 径 10.6 器 高 28.8 脚 大径 11.4 脚大径 18.2	外面 体部きざみ目、施回転ナデ 内面 回転ナデ	外 乳灰青 色 内 乳灰色	3mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好	脚部に三方の 凹孔	
10 杯 壺 (底部)	口 径 14.6 器 高 4.1	外面 口縁部回転ナデ、尖井部ヘラケタゼリ 内面 尖井部	外 灰青色 内 青灰褐色	3mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好	左ロクロ	
11 壺 壺 (底部)	口 径 9.9 器 高 3.1 つまみ径 2.0	外面 天井部回転ヘラケタゼリ、他は回転ナデ 内面 回転ナデ	乳灰色	5mm以下の 砂粒を少量 に含む。	良好	左ロクロ	

遺物番号 図版番号	部位	法量 (cm)	質	色調	形状	焼成	備考
12 (脛思筋)	左 身 骨 高 受部径 たらあがり高 0.5	口 径 9.8 骨 高 3.3 受部径 12.4 たらあがり高 0.5	外面 回転ナデ、底端四軸ヘラケズリ 内面 口縁部回転ナデ、茎化ナデ	外 乳灰青 内 淡灰青 色	0.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	右クロ右方向 完形
13 (脛思筋)	右 身 骨 高 脛部径	口 径 8.6 骨 高 3.7	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	乳灰青色	0.5mm以下の砂粒を多量含む。	良好	右クロ
14 (脛思筋)	口 径 骨 高 脛部径	9.2 8.9 7.0	外面 回転ナデ、杯底等回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	淡灰色	3mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
15 同 上	口 径 骨 高 脛部径	10.8 9.1 8.1	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	淡灰色	0.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
16 同 上	口 径 骨 高 脛部径	10.0 7.4 8.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	乳灰青色	1mm以下の砂粒を少量含む。	良好	右クロ 二方孔
17 同 上	口 径 骨 高 脛部径	11.8 11.8 10.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	青灰色	3mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
18 同 上	口 径 骨 高 脛部径	11.1 14.5 10.3	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	外 淡灰 内 淡灰青色	1.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	右クロ 二方孔
19 (脛思筋)	口 径 骨 高 脛部径	13.0 17.2 12.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	外 乳灰青 内 灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	杯部外曲面筋部 にヘラ記号 左クロ
20 同 上	口 径 骨 高 脛部径	12.2 19.3 12.5	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	外 乳灰青 内 灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
21 (脛思筋)	口 径 骨 高 脛部径	29.4 13.1 8.2	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ後タキ	外 乳灰青 内 灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
22 (脛思筋)	口 径 骨 高 脛部径	12.2 13.1 8.2	外面 回転ナデ 内面 口縁部回転ナデ、体部静止ナデ	外 灰青色 内 淡灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	左クロ 体部にヘラ記号
23 同 上	口 径 骨 高 脛部径	14.0 16.1 9.4	外面 回転ナデ、帶横文 内面 回転ナデ	乳灰青色	3mm以下の砂粒を少量含む。	良好	右クロ 体部にヘラ記号
24 同 上	口 径 骨 高 脛部径	15.4 22.1 9.0	外面 回転ナデ、口縁部横筋文 内面 回転ナデ	淡墨色~灰 青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	右クロ 体部にヘラ記号
25 同 上	口 径 骨 高 脛部径	14.4 16.9 9.0	外面 回転ナデ、帶横文 内面 回転ナデ	灰青色~乳 灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	左クロ 体部にヘラ記号
26 同 上	口 径 骨 高 脛部径	15.6 19.6 9.6	外面 回転ナデ、帶横文 内面 回転ナデ	灰青色~乳 灰青色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
27 (脛思筋)	口 径 骨 高 脛部径	6.0 10.1 13.6	外面 体部回転ヘラケズリ・接合痕、株回転ナデ 内面 回転ナデ	灰青色~暗 灰青色	3.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	左クロ 体部にヘラ記号

鉄製品

直刀の大小1点・馬具の鉄具・鎌・刀子・不明品等である。直刀に付隨するものとして円頭柄頭・鎌・崩尻・鎧である。

直刀

S 6・S 7である。残存する大きさはS 6の長い方が全長90cm、S 7の短い方が全長38.6cmを測る。S 6の柄の部分には木片痕があり、2ヶ所に目釘穴がある。柄と刀身の間には鍔と鎌が残っており、その表面には象嵌文様が施してある。鎌には鳳凰文と渦文、鎧には渦文の文様がある。

円頭柄頭

S 9・S 10の2点で、どちらも象嵌を施している。S 9は断面U字形の柄頭で、端部付近に目釘穴一対がある。表面全体には亀甲花文、端部に渦文を型どっている。S 10はS 9よりやや小型の断面U字形の柄頭で、端部付近の目釘穴には目釘が残存する。表面には心葉形4個、端部に渦文を型どっている。

崩尻

S 13の1点である。断面U字形で、頭部に目釘穴があり、目釘が残存している。表面は象嵌文様はなく、無文である。

鎌

直刀に付いている以外にS 8がある。倒卵形で簡素な形であるが、表面には両面に心葉形、端面に渦文が施してある。

S 11・S 12の2点である。鎌を固定するためのバッキンの一つである。

鉄具

S 14・S 15の2点である。鉄具は鞍を馬に固定するための金具で、現在でいうバンドのバッカルに使われている金具と同様の用途である。

鎌

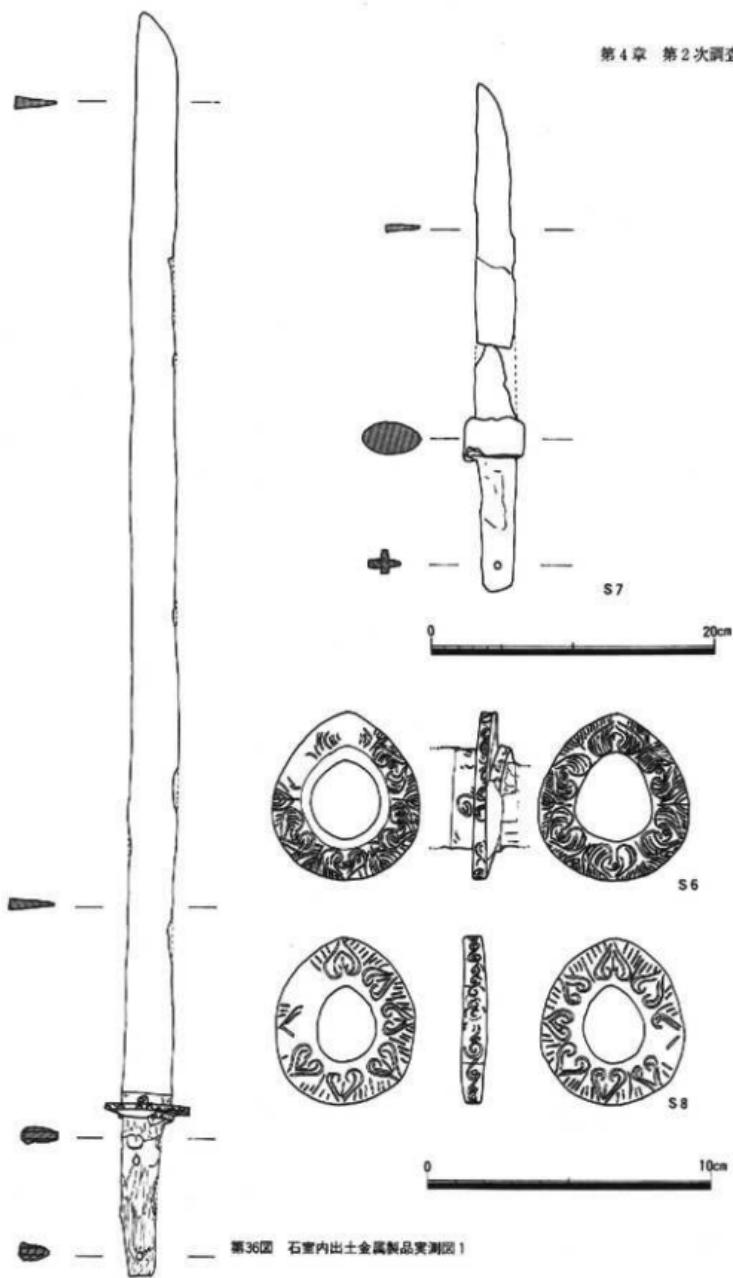
S 16～S 28の11点で、すべて細根式の鎌である。茎部が方形で刃部が細く尖る。S 16はほぼ完形で長さ16cmを測る。その他は破損し、欠如している。

刀子

S 29の2点である。小刀やナイフのようなものである。柄部分には木質が若干残っている。

不明鉄製品

S 30～S 42の8点である。S 40は薄い板状のものである。S 30～S 32・S 36・S 39は断面方形の棒状のもの、S 33・S 36は断面三角形のものである。これらは飾り金具の一部分であろう。



第36図 石室内出土金属製品実測図



S 9



S 10



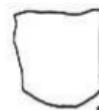
S 11



S 12

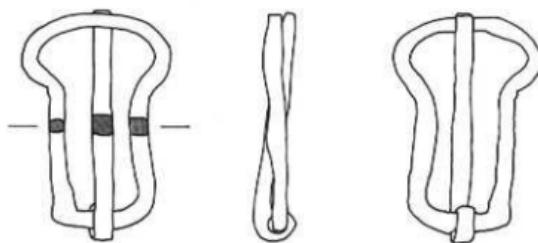


0

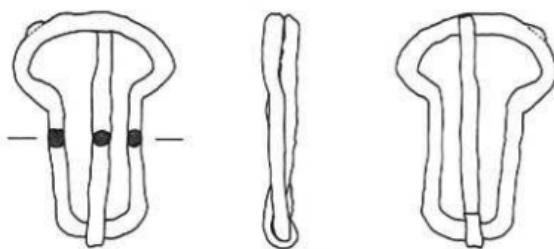


10cm

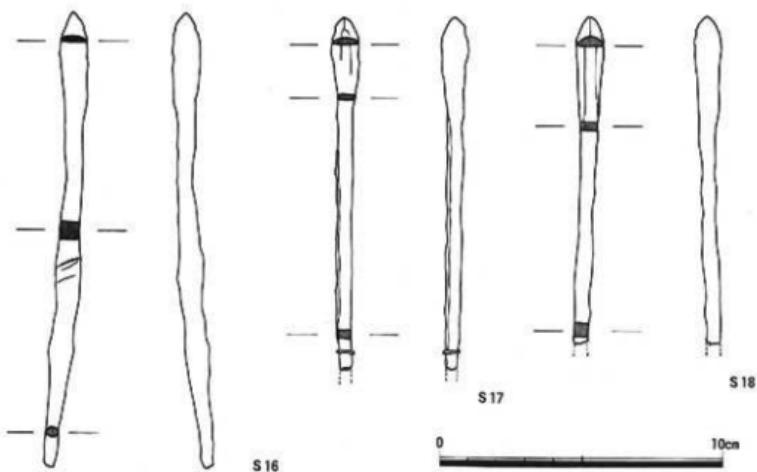
第37図 石室内出土金属製品実測図 2



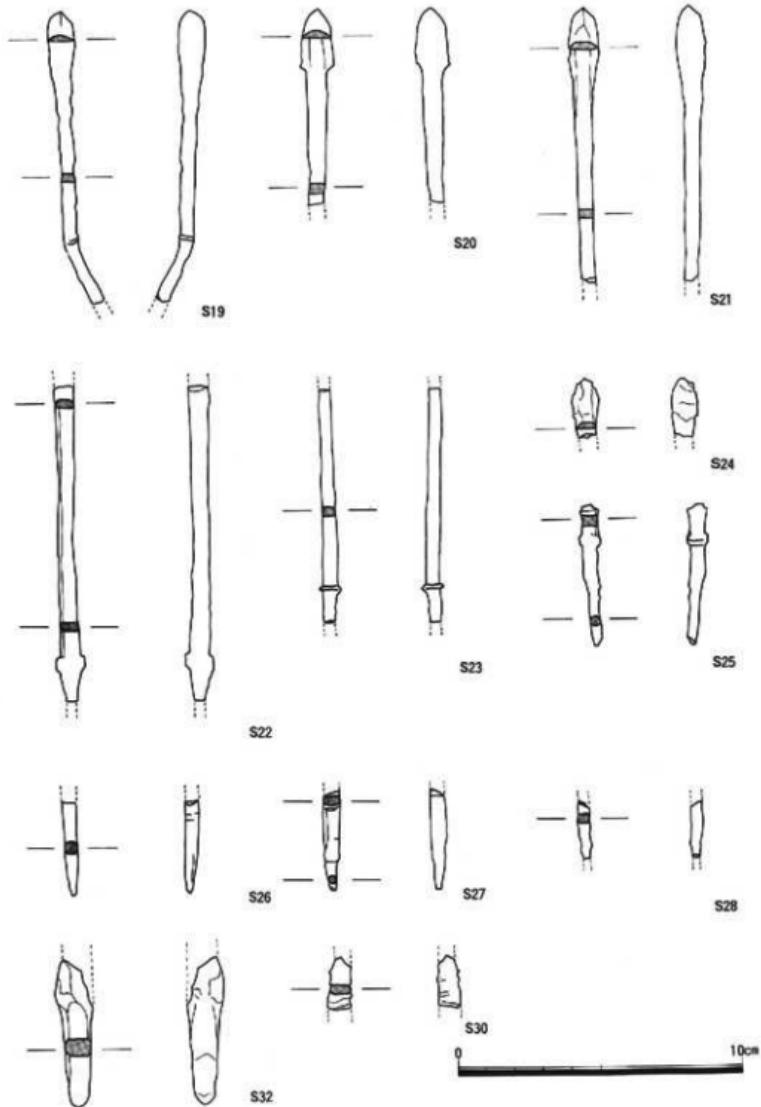
S14



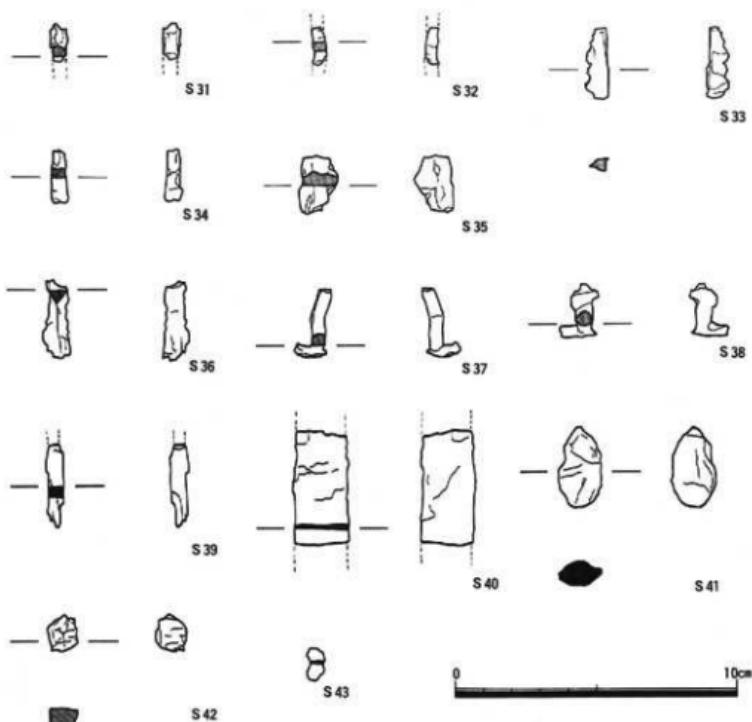
S15



第38図 石室内出土金属製品実測図 3



第39図 石室内出土金属製品実測図4



第40図 石室内出土金銀製品実測図5

銅製品

S 5・S 43の2点である。S 5は耳環である。表面には金ないしは銀のメッキを施したと考えられるが著しく腐食しており、観察不能であった。S 43は銅板に片方に金ともう片方に銀のメッキが施されていたが、小破片でありそのものの形状は不明である。考えられることは飾り具の一部であろう。

第7表 石室内出土金属製品観察表

番号	器種(材質)	出土地点	法量(cm)
S 6	大刀(鉄)	石棺I外北東角	全長90(柄長)1.5・幅1.9・厚み0.5、刀身長86.5・幅3.1・厚み0.9
S 6	鎌(鉄及び銀)	同上	外径5.2~6.0・内径3.2~3.7、厚み0.4~0.5
S 7	小刀(鉄)	石棺II・石棺IIIの間	全長36.8(柄長)9.4・幅2.5・厚み0.5、刀身長23.8・幅2.8・厚み0.6
S 8	鎌(鉄)	石棺II・石棺IIIの間	外径4.9~6.0・内径2.1~2.7・厚み0.7
S 9	円頭柄頭(鉄及び銀)	石棺I外北東角	幅5.7・径6.1・厚み0.4
S 10	同上	石棺II・石棺IIIの間	幅5.3・径2.8~3.4・厚み0.5~0.7
S 11	鎌(鉄及び銀)	同上	外径2.7~3.6・内径2.0~2.7・厚み0.3~0.4
S 12	同上	同上	全長3.7・厚み0.4~0.5
S 13	物尻(銀)	同上	幅3.4・径2.0・厚み0.2~0.4、心長2.8・厚み0.1~0.3
S 14	投具(鉄)	玄室奥壁	全長8.2・横幅3.1~5.3・厚み0.5~0.7
S 15	同上	同上	全長8.3・横幅3.2~5.6・厚み0.5~0.6
S 16	鎌(鉄)	同上	全長15.2・刃先幅3.6・厚み0.2、茎径0.6~0.7
S 17	同上	同上	全長12.6・刃先幅3.0・厚み0.2、茎径0.3~0.6
S 18	同上	同上	全長11.7・刃先幅3.5・厚み0.2、茎径0.5~0.6
S 19	同上	同上	全長11.4・刃先幅2.5・厚み0.2、茎径0.3~0.6
S 20	同上	同上	全長6.9・刃先幅2.0・厚み0.2、茎径0.35~0.7
S 21	同上	同上	全長9.8・刃先幅3.0、茎径0.3~0.5
S 22	同上	同上	全長11.2・径0.3~0.6
S 23	同上	同上	全長8.3・径0.3~0.5
S 24	同上	同上	全長2.2・刃先幅1.0・厚み0.25
S 25	同上	同上	全長5.1・茎径0.3~0.5
S 26	同上	同上	全長3.3・茎径0.4~0.5
S 27	同上	同上	全長3.5・茎径0.2~0.6
S 28	同上	同上	全長2.0・茎径0.3~0.4
S 29	刀子(鉄)	同上	全長5.2・刃幅1.2・茎径0.6~0.9
S 30	不明(鉄)	同上	全長1.1・幅0.7・厚み0.3
S 31	同上	同上	全長1.4・幅0.5・厚み0.4
S 32	同上	同上	全長1.4・幅0.4・厚み0.3
S 33	同上	同上	全長2.6・幅0.8・厚み0.4
S 34	同上	同上	全長1.9・幅0.6・厚み0.3
S 35	同上	同上	全長2.1・幅1.2・厚み0.3
S 36	同上	同上	全長2.9・幅0.9・厚み0.5
S 37	同上	同上	全長2.5・径0.4~0.5
S 38	同上	同上	全長1.9・径0.3
S 39	同上	同上	全長2.9・幅0.6・厚み0.3
S 40	同上	同上	全長4.1・幅1.8・厚み0.1~0.2
S 41	同上	同上	全長2.9・幅1.6・厚み0.8
S 42	同上	同上	幅1.3・厚み0.6
S 43	同上(金銅)	同上	幅0.7~1.2・厚み0.1

第5章 芝塚古墳の象嵌遺物について

第1節 はじめに

象嵌遺物の研究は明治時代以降からで、古くは熊本県江田船山古墳銀象嵌銘太刀・奈良県石上神宮七支刀の象嵌銘文のある刀剣を論議の対象され、近年では埼玉県稻荷山古墳辛亥銘鉄劍・島根県岡田山1号墳額田部臣銘太刀などが知られている。これらの象嵌銘文は古墳時代の数少ない金石文にあって、当時の政治・社会・思想や、そこで活躍した人々の名が記され、時代を語る貴重な資料として繰り返し論じられてきたことは周知の通りである。

一方、象嵌文様のある遺物は比較的多く知られているにも関わらず、その性格や意義について論じられることは少ない。それは、象嵌文様が多種多様にわたり系統的に把握し難いこと、肉眼で見ることが出来ない鋳下に文様があって、類例資料の増加がなかったことなどに起因するようである。

近年、考古学雑誌で奈良大学考古学科助教授の西山要一氏（以下、西山氏と略す）によって「古墳時代の象嵌」が論述されており、象嵌の研究史（第1表）・象嵌遺物の分布・象嵌の文様による編年案がなされている。

第2節 象嵌の技法と種類

象嵌の技法は、地金の表面に鑿で切り込みを付け、別の金属をはめ込む技法で、一般に洞爺鉄に金・銀・真鍮などを填める場合が多い。糸象嵌のように簡単なものから高肉象嵌のような複雑なものまで種々の手法がある。代表的なものをあげると以下のようない法がある。

- ① 糸象嵌——地金に断面V字形に溝を刻み、そこへ細く糸状に加工した針金（金・銀・銅など）を打ち込み、砥石で研磨して仕上げる技法で、糸象嵌とも言う。平象嵌に似ているが挿入する象嵌が糸のように細いところに特徴がある。象嵌の中では最も古いものである。
- ② 平象嵌——線ではなく。平面的にはめ込む技法。金属の面を文様の形に一段彫り込み、そこへ同じ形に切った他の金属を埋め込み、上を平に磨く。
- ③ 捩紋象嵌——象嵌した紋が地金の面より高くなっているもの。
- ④ 布目象嵌——きり鑿を用いて素地に縦・横に布目状の筋を切り、その上に鑿でたたき込んで張り付ける技法で、近世のものに見られ、南蛮渡来の技法と伝えられている。
- ⑤ 高肉象嵌——高肉彫りされたものを一部にはめ込む複雑な技法。

第8表 象嵌遺物の研究史一覧表

年 代	研 究 史
1940 (昭和15年)	神林淳雄氏は、鉄製刀装具を環頭・方頭・頭椎・円頭・圭頭等の柄頭、鍔・柄口・切羽・鉢・責・鞘尻に分類、これらの多くに象嵌のあることを指摘。
1978 (昭和53年)	福井山古墳から出土した鉄劍に115文字からなる金象嵌銘文がX線透過写真によって発見され、以後、X線透過写真の利用が全国的に増加する。
1981 (昭和56年)	橋本博文氏は、亀甲繫鳳凰文円頭柄頭(10例)を取り上げ、出土遺跡と共に遺物の検討を行い、文様の祖形として勅告飾覆塚の金銅製飾履と武寧王陵の単鳳環太刀の亀甲繫文様を位置付け、文様の簡素化の度合を検討し、編年を試みた。
1984 (昭和59年)	町田章氏は、象嵌技術の始源が中国戦国時代に求め、6世紀後半以降の文様の退化は新羅勢力の台頭による百濟系技術者の供給途絶によるものであろうとした。
1985 (昭和60年)	九州地方出土の象嵌刀装具(7例)を取り上げ、文様の時間的・地域的变化を検討して編年を試みた。
1985 (昭和60年)	西山要一氏は、初期の象嵌遺物は朝鮮製で、以降はすべて畿内で制作され、一括管理のもとで全国に配布されたらしいこと。象嵌遺物には3つの画期があり、5世紀代は畿内と北九州に限られる。6世紀前半代は全国の比較的大きな規模の古墳に埋納される。6世紀後半~7世紀前半代は全国の小規模古墳まで埋納され、特に関東に広く分布する。

第3節 象嵌刀装具の種類と分布

西山氏は「象嵌文様がある刀装具には、環頭・円頭・頭椎・方頭の柄頭、柄元、柄縁、鍔、鉢、柄口、責、鞘尻等の金具がある。これに象嵌文様のある刀身を加えると、現在(1986年)までに125遺跡から159例の出土が知られている。出土遺跡が明らかになっている遺物は福島県沖ノ島の例を除いてはすべて古墳からの発見である。」と分析している。

また、西山氏が行った象嵌刀装具の地点を日本地図上に落とした分布図をみると、南は宮崎県から北は山形県までの広い範囲で出土していることがわかる。その中でも特に群馬県を中心とした関東地方と奈良県を中心とした近畿地方で多く発見されていることが検証される。分布図ではさらに刀装具の金具部分を6種類に分けており、より詳細な象嵌刀装具の種類及び文様を分析している。それらの象嵌刀装具についても実測図及び出土した遺跡の概要(所在地・遺跡

名・共文献物等)を一覧表にしている。象嵌の文様については、編年表を作成し、掲載している。編年では「159例の象嵌刀装具中、埋納年代の明確なものは極めて少ない。単次埋葬の古墳からの発見ならば年代把握も容易であるが、横穴式石室墓や横穴墓のような数次にわたって埋葬の行われた遺跡からの発見では第何次の埋葬にかかる副葬品であるかを見極めるのは用意ではなく、そのために該当する年代幅を広くとることとなる。」と前提し、象嵌刀装具の種別ごとに文様と形態の変遷を把握して形態上の発展過程を検証し、編年案を作成している。その編年案では5世紀中頃に出現し、6世紀後半から7世紀初めまでとしている。

第4節 芝塚古墳の象嵌遺物

象嵌遺物は鉄製の直刀2振りの刀装具に施されていた。長い方の直刀に付いていた器具である円頭柄頭・鐔・鍔・柄縁、短い方の直刀に付いていたと考えられる円頭柄頭・鐔にあった。象嵌文様は、長い方の直刀に付く円頭柄頭に亀甲繁花文・渦文、鐔に鳳凰文・渦文、鍔に渦文である。短い方の直刀に付く円頭柄頭に火焰状文、鐔に心葉形文・渦文、鍔に渦文である。芝塚古墳で出土した象嵌遺物について西山氏の編年案に照らし合わせてみる。

編年された象嵌文様と類似する資料は第9表に掲載した遺跡で発見されている。まず、長い方の直刀に付く亀甲繁花文のある円頭柄頭(S9)は福井県小山市飯塚2号墳・埼玉県児玉郡秋平村秋山(古墳名不明)出土の円頭柄頭に施された文様と類似する。短い方の直刀に付く鐔(S8)は福島県いわき市八幡横穴4号墳・伝・群馬県(古墳名不明)出土の鐔の心葉形文に類似する。直刀に付く鍔は6世紀代のものに多くみられる。その他の象嵌文様については類似資料はないが、西山氏の文様の編年から構想すると6世紀後半から7世紀前半に位置づけられるものであり、芝塚古墳の築造の年代とほぼ一致するものである。

最後に、象嵌技術の伝承とその起源について「象嵌の技術や文様は朝鮮半島の百濟から象嵌工人とともに渡米したものと考え、その後、工人の子孫や弟子が文様の意味がわからなくなり、文様が簡素化したのであろう。」と西山氏が論説している。例えば、鳳凰文を型どっていたものがその後、ハート形した心葉形に変化したことである。また、西山氏は「象嵌の起源は中国の春秋戦国時代の器物を飾る技法として行われ、漢の時代に入って大いに発達するとともに百济に伝えられた。このことは最近、韓国では昌寧校洞11号墳から発掘された太刀に金象嵌の七文字からなる銘文が発見されており、刀の柄頭を象嵌文様で飾った象嵌太刀が三振り発見されている。」ということである。古代史では「5世紀初頭から中葉にかけての時代に朝鮮半島と盛んに交流があり、渡来人及び多くの技術が日本に入ってきたと言われている。大きな変革としては窯を用いて高温で焼く須恵器の生産、煮沸用の土器の変革などがあげている。」が、これらの渡来人もしくはそれに関わりの深い人々が首長層クラスの死者を葬る際に副葬品

として入れた墓で多く発見されている。その副葬品の中でも貴重な太刀を削除しているのである。この太刀には象嵌技法により文字や文様を型どったものがあり、その文様によってその時代の背景を構え見ることが出来るであろう。

西山氏による象嵌遺物から以下のように仮説された。

「象嵌遺物の所持者は、国造（くにのみやつこ）や都の長が所持していた痕跡と、もうひとつは特殊な技術者が持っていたことが考えられる。象嵌の技術は5世紀に朝鮮半島からもたらされたもので、5世紀から7世紀にかけて文様の系統がたどることができ、国家によって一元的に供給されていた可能性がある。したがって象嵌太刀は、大和朝廷とのつながりで賜布されたものと推定することができる。芝塚古墳の場合は、刀や文様の形から6世紀後半のものであり、そこが機内に位置することから伴部や品部を統率した技術者集団の長であったことが考えられる。」という芝塚古墳の被葬者を推測される。

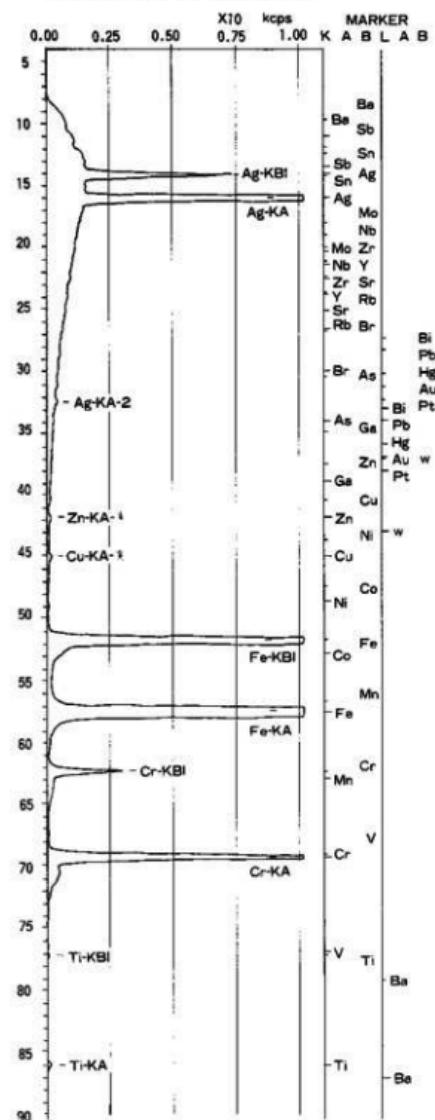
第9表 芝塚古墳出土象嵌遺物と同一文様の出土一覧表

番 号	遺跡名 (所在地)	遺物・遺像		象嵌遺物			流行遺物	所蔵者	文献
		器種・遺像	年代	刀頭部	文様の種類	材質			
1	丘塚2号墳 (大阪府大阪市守口市)	円筒埴輪約30cm 横穴式石室 全長9.8m	6世紀末～ 7世紀初頭	円筒柄頭 花文		銅	小刀身長さ3.4cm 子持丸・胡麻・ 枝葉・西月など	大阪府立 土質研究所	1
2	鶴塚5号墳 (奈良県小山田町鶴塚)	横穴式石室	6世紀後半	円筒柄頭 魚甲形花文		銅	圓・圓にも象嵌あ り	桃刀・狹腰・ 胡麻耳 曲り・勾玉・束玉・ 丸玉など	小山田教育 委員会
3	鶴塚2号墳 (奈良県小山田町鶴塚)	横穴式石室		漆・骨・ 胡麻・輪 瓦	1 條(無記)・心葉形 縫・心葉形 縫線・平洋形 2 菊院・平洋形 3 菊院は桃形・U字	銅		刀子など	小山田教育 委員会
4	伊東新井2号墳(伊勢原市新井)			円筒柄頭 魚甲形花文		銅	圓・圓にも象嵌あり	狭腰	2
5	鶴塚5号墳 (三重県鈴鹿市大山町)	円筒埴輪2m 横穴式石室 全長9.5m	6世紀末～ 7世紀初頭	円筒柄頭 兔小簞花文・風文		銅	北刀身長さ8.5cm 枝葉・束玉・ 胡麻(束中葉花)	狭腰・ 刀子・束玉など	三重県教育 委員会
6	八幡塚4号墳 (岐阜県いわき市八幡)			漆	1 條 口玉形 2 舟・心葉形 3 條 楊枝紋・勾玉	銅			いわき市教育 委員会
7	(注・解説)			漆・縫	條(無記)・心葉形 縫・心葉形	銅			6
8	芝塚古墳 (大阪府八尾市)	円筒埴輪約20cm 横穴式石室 全長9.1m	6世紀後半 ～7世紀中 葉	円筒柄頭 舟・縫	円筒柄頭・魚甲形花文 圓筒柄頭・心葉形 1 舟・丸風文 2 條 心葉文 3 縫・縫文	銅	大刀身全長40cm 小刀身36.8cm	狭腰・刀子・束玉・ 刀具・小刀・胡麻等 ・土師器など	(財)八尾市 文化財保護 研究会

文 献

- 1985年12月 奈良大学文化財科学研究所による「大阪府教育委員会山塙古墳群」 1985
- 2 秋山陣雄「市内出土土偶遺品の科学的分析—X線照射による色彩の見分け」『小山市研究』第7号 1985
- 3 坂正祐「唐工系」 第1卷 1951
- 4 鳥根西八幡立つ風土記の片資料館「銘記入大刀の世界」 1985 二重県教育委員会「二重県埋蔵文化財調査手帳」15 1985
- 5 西根繁一氏が開拓した文化財研究会による調査による。
- 6 東京国立博物館『東京国立博物館蔵目録 古墳遺物篇(関東Ⅱ)』 1983

T# JOB CODE SAMPLE NAME B# EL.
1 STP ALL2 ZOUGAN-YAO 35 Hv00



EL.	2-Theta(deg)	Intensity(Kcps)	Spectra
Hv00	14 . 15	5.453	Ag-KB1
	16 . 01	26.176	Ag-KA
	32 . 46	0.108	Ag-KA-2ND
	41 . 81	0.076	2n-KA-X
	45 . 07	0.131	Cu-KA-X
	51 . 76	38.715	Fe-KB1
	57 . 51	166.213	Fe-KA
	62 . 37	2.721	Cr-KB1
	69 . 36	12.728	Cr-KA
	77 . 24	0.062	Ti-KB1
	86 . 13	0.191	Ti-KA

Component	Definition	EL.	Spectrum	Int. kcps	Conc. wt%
Ti		HVO0	Ti-KA	0.191	0.036
Fe		HVO0	Fe-KA	166.21	91.
Ag		HVO0	Ag-KA	26.176	8.9

第41図 象嵌遺物の金属理分析図

第10表 魔怪憑物編年表（西山氏が提唱した編年表）

年代	魔 怪 の 因	内 宮 新 鏡	御靈御鏡、方鏡御鏡	蝶などその他の刀装具	刀 身
450	<伏魔・御山>			<正座・富山>	
	<伏魔・人面9号>			<伏魔・江田越山>	
	<奈良・丹波山八3号>				
500					
	<山形・大蛇地>	<奈良・鬼屋9号>	<伏魔・通海芋境(御山)1号>	<奈良・水森1号><伏魔・谷>	<吉三・玉森山><御山・下原トカラ>
	<大原・一乘院12号>		<奈良・水森1号><御山・山2号>	<奈良・水森1号><御山・谷>	
			<鳥居・岡田山1号>	<奈良・岡田山1号>	
550	<野馬・台所山><人兔><狼野18号>	<伏木・鬼屋5号>	<奈良・水森1号><御山・山2号>	<奈良・水森1号><御山・谷>	<奈良・玉森山><御山・下原トカラ>
			<鳥居・岡田山1号>	<奈良・水森1号><御山・谷>	
				<奈良・水森1号><御山・谷>	
600	<三重・山川(御山)><大蛇・芝根>	<伏木・鬼屋5号>	<大蛇御寺神>	<奈良・芝根2号><御山・八幡4号>	<奈良・新伊千本22号>
	<御山・鬼志鬼><天草・稻崎><御山・芝根>	<伏木・鬼屋5号>	<伏木・鬼屋5号>	<奈良・分岐><御山・稻崎也>	
	<御山・鬼志鬼><天草・稻崎><御山・芝根>				
	<南王・秋山1号><7葉・野々原>				
	<北条・久々坂5号>				
650	<伏木・トコチ山>			<御山・鬼山17号><奈良・東本2号>	<大坂・鬼山>
				<御山・鬼山17号><奈良・東本2号>	

(* 千字文總記22卷 1.9 「古事記の象形、刀装具についてー」西山史一より)

第6章 石材について

八尾市立曖川小学校教諭 奥田 尚

第1節 はじめに

古墳に使用されている石材を裸眼で観察した。観察した石材は石室材・閉塞石材・石棺材である。石種とその採集地、石組みについて述べる。

第2節 石室材・閉塞石材

石室は閉塞石の下部が残存している。石材は主として閃緑岩が使用され、僅かに片麻上黒雲母花崗岩・アブライト質黒雲母花崗岩が使用されている。閉塞石は主として閃緑岩・アブライト質黒雲母花崗岩が使用され、ごく僅かに片麻上黒雲母花崗岩が使用されている。

各石種の特徴について述べる。

アブライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色である。礫形が角・亜角である。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1mm～3mm、量がごく僅かである。長石は白色、粒径が8mm～20mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm～2mm、量がごく僅かである。

閃緑岩：色は灰色、礫形が角・亜角である。変輝緑岩質部がレンズ状に見られる。造岩鉱物は黒雲母・長石・角閃石である。黒雲母は黒色、粒状で、C軸方向に発達している。粒径は2mm～7mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2mm～7mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2mm～8mm、量が多い。

片麻状黒雲母花崗岩：色は灰色である。顯著な片麻状を示し、黒雲母が片麻状の方向に並ぶ。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1mm～2mm、量がごく僅かである。長石は灰白色、粒径が1mm～4mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm～2mm、量が僅かである。

当古墳が立地する場所は高位段丘であり、水田や畠がなくなる付近から傾斜が急になり、山地となる。山地となる付近から岩石が所々に露出するようである。この付近の岩石分布をみれば、おと越峰付近から一元の宮北方ジョーサンの森付近までの間には閃緑岩が分布し、おと越峰付近より北では黒雲母花崗岩・アブライト質黒雲母花崗岩が分布し、一元の宮より南には片麻状黒雲母花崗岩が分布する。このような岩石の分布を反映して、谷にも同様の岩石が分布する。採石地を近距離で求めてみれば、アブライト質黒雲母花崗岩は現在の正祖神社付近から少し南方の谷から、閃緑岩は東南方の谷から、片麻状黒雲母花崗岩は高安山レーダーのある北側付

近の谷から運んだと推定される。閉塞石にアブライト質黒雲母花崗岩が多く使用されているのは近距離で求めることができたためであろう。また、アブライト質黒雲母花崗岩よりも遠地にある閃綠岩を多量に石室材として運んでいるのは、適した大きさの石材が近地で得られなかつたためであろう。

第3節 石棺材

玄室に安置された石棺は奥に1基と前方に2基である。3基とも組合式家形石棺で、蓋石は破片で残存し、身石は完形で残存する。

a 石棺I（奥棺）

石材の石種は流紋岩質凝灰岩質砂岩A・流紋岩質凝灰岩質砂岩B・流紋岩質火山礫凝灰岩Aである。流紋岩質凝灰岩質砂岩Aには棺蓋3石と左右の側石、入口部小口石に、流紋岩質凝灰岩質砂岩Bは奥の小口石、入口からの底石3石に、流紋岩質火山礫凝灰岩は奥の底石に使用されている。

流紋岩質凝灰岩質砂岩A：色は灰白色である。構成砂礫種は松脂岩・流紋岩・チャートである。松脂岩は黒色、粒形が亜角、粒径が最大4mm、量がごく僅かである。流紋岩は灰色、粒形が角・亜角、粒径が最大4mm、量が多い。チャートは灰色、粒形が亜円、粒径が最大4mm、量が僅かである。基質は灰白色、緻密である。

流紋岩質凝灰岩質砂岩B：色は灰白色である。軽石がくだけた球状の粒が少し見られる。球径は最大3mmである。基質は灰白色、緻密である。

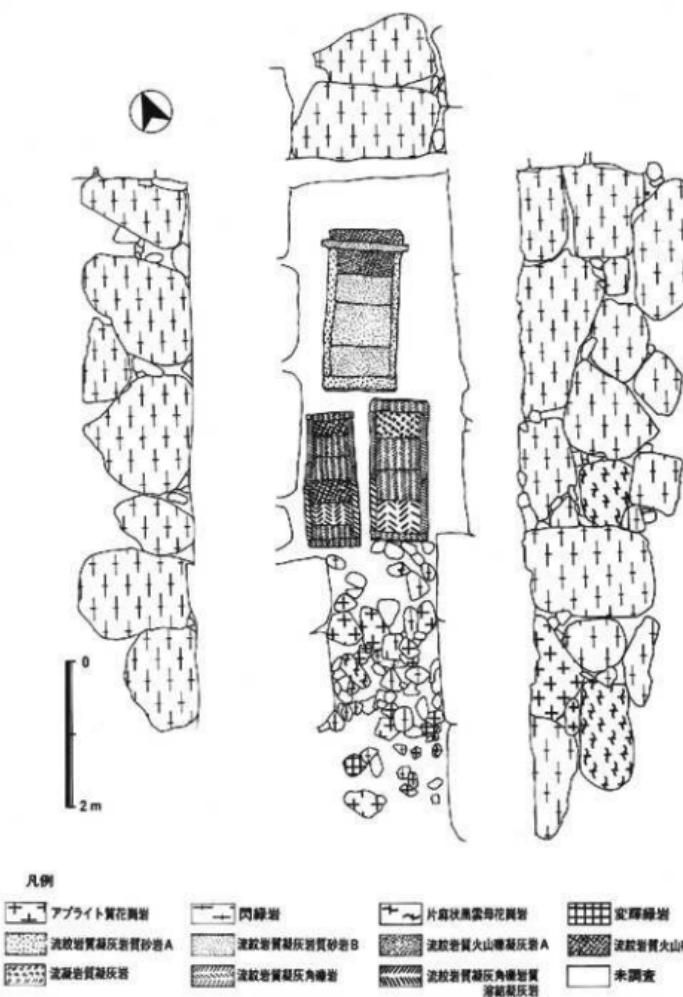
流紋岩質火山礫凝灰岩A：色は灰色である。軽石礫が多く散在する。軽石は白色、粒形が亜角・亜円、粒径が最大12mmである。

底石の入口部から3枚目の流紋岩質凝灰岩質砂岩Bの一部は流紋岩質火山礫凝灰岩Aとなっていることから、砂岩Bと火山礫凝灰岩Aとは同じ場所での岩相の差であると推定される。また、流紋岩質凝灰岩質砂岩Aには層理面があり、層理面の方向に小さく割れていることが多い。層理面に垂直な方向に級化層理がみられる。石材の板材の方向と層理面とは平行しており、層理面を使用して石材を探石したと推定される。砂岩や泥岩を板材の石材として使用されている場合、層理面を使用して板石を得ている場合が多い。

この石棺に使用されている石材の岩相は異なるものがあるが、同一地点で採石された可能性が高い。石材の採石地としては加古川から三田市にかけてのいずこかであろう。

b 石棺II（前の西棺）

石材の石種は流紋岩質火山礫凝灰岩B・流紋岩質凝灰角礫岩・流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩である。流紋岩質火山礫凝灰岩Bは底石の入口から3枚目、6枚目に、流紋岩質凝灰角礫



第42図 芝塚古墳の石材種別図

岩質溶結地凝灰岩は前述以外の石材に使用されている。

流紋岩質火山礫凝灰岩B：色は灰白色である。構成礫種は流紋岩・松脂岩である。流紋岩は灰白色・灰色で、粒形が角・亜角、粒径が最大8mm、量が多い。松脂岩は黒色、粒形が角、粒径が最大4mm、量がごくごく僅かである。基質は灰白色で、やや緻密である。石英粒・長石粒がある。粒径は1mm～1.5mm、量がごくごく僅かである。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰白色である。構成礫種は松脂岩・軽石である。松脂岩は黒色・褐色で、量が中くらいである。軽石は白色、粒形が亜円・円で、粒径が最大5mm、量が僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩：色は灰白色である。弱い溶結を示す。構成礫種は流紋岩・松脂岩・軽石である。流紋岩は灰色、粒形が角、粒径が最大12mm、量が僅かである。松脂岩は黒色・褐色、粒形が亜角・亜円・粒径が最大45mmで、量が多い。軽石は白色、粒形が亜円、粒径が最大50mm、量が僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

流紋岩質凝灰角礫岩は松脂岩・軽石礫を含むことから、二上層群下部ドンズルボーリー層の流紋岩質凝灰角礫岩の岩相の一部に類似する。採取地としては南河内郡太子町牡丹洞付近が推定される。流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩は松脂岩・軽石・流紋岩礫を含み、溶結していることから下部ドンズルボーリー層の流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩の一部に類似する。場所としては太子町鹿谷寺跡付近が採石地であると推定される。

c 石棺Ⅲ（前の東棺）

石材の石種は流紋岩質凝灰岩・流紋岩質凝灰角礫岩・流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩である。流紋岩質凝灰岩は奥の底石に、流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩は前の底石と南西の側石に使用されている。流紋岩質凝灰角礫岩は前述以外の石材である。

流紋岩質凝灰岩：色は灰白色である。構成礫種は流紋岩・松脂岩である。流紋岩は灰色、粒形は角、粒径が最大2mmで、量が非常に多い。松脂岩は黒色、粒形が角、粒径が最大4mm、量がごくごく僅かである。基質は灰色、緻密である。

流紋岩質凝灰岩は灰色の流紋岩粒を多量に含み、白色であることから、二上層群上部ドンズルボーリー層の流紋岩質凝灰岩の岩相の一部に類似する。場所としてはドンズルボーリー西方から田尻跡付近が採石地と推定される。

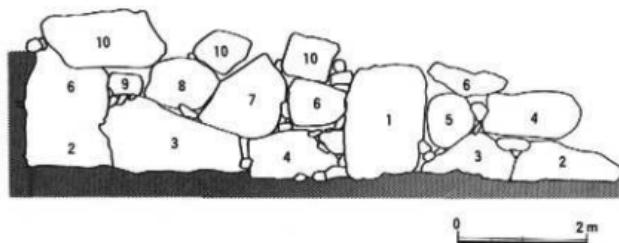
石棺Ⅰの石材は同一地点で採石されたと推定されるが、前2棺（石棺Ⅱ・石棺Ⅲ）は共に3地点以上で石材が採石されたと推定される。当古墳のように1つの石棺に採石材が異なる石材が使われている例は二上山系石材を使用した石棺に多いと言える。二上山系石材を加工する石工集団が1つであつた為、二上山付近の各地で切り出した石を石棺材として供給していたのであろう。

第4節 石組み

西側石室壁は下段のみしか残っていないが、東側石室壁は三段まで残存しているため、東壁の石組み順序を考えてみる。積み方は自然石を横に使用して積んでいくあのう積み（野づら積み）である。両袖式の石室であり、基点の置き方から観察した。基点となる石は玄室と羨道を境にする袖石である。

最初に袖石を置いて、次に羨道部を先に積んだか、玄室部を先に積んだかは判断できない。羨道部の積み方をみれば、袖石の次に羨道入口の石を置き、次にその間に介石を置いている。二段目も同様に、入口部の石を置き、袖石との間に介石を置いているが、上段の石を下段の2石に重さがかかるように石の大きさを考慮して積んである。積み方からみれば、羨道の長さを決めて石積みを考えていることがうかがえる。次に、玄室部の積み方としては、奥になる石を置き、その間に2石並べ、2段目からは袖石近くから下の石2石に上の石の重みがかかるように積んでいる。玄室においても、羨道同様に玄室の奥行きを決めてから石を積んでいると考えられる。下段の石は平面を広く取るために立てに詰まれているが、2段目からは石積みが崩れないよう必要所、要所にひかえがある長い石が使用されている。奥壁と側壁との関係をみれば、側壁が奥壁よりもくい込んでいることから、奥壁で玄室の寸法を調節したと考えられる。次に下段しか残存しないが、西壁と奥壁との関係をみれば直角になるよう合わせさせていることから、玄室の基準寸法は西壁で決めた可能性がある。羨道の寸法は西壁か東壁いずれで決めて積まれたかは判断できない。

石室の大きさは、石室の大きさをまかなうことができる大きさの天井石が必要であり、この大きさの石材を運搬できる人力も必要である。得られた石材の大きさと最大限の重量を動かせる労働力が石室の大きさを限定する1つの要因であると言えよう。



第43図 石室東壁築造構造想定図

註

- 註1 同名の石材でA、B等のアルファベットを付けたのは岩相が異なるため、便宜上、区分しなければならないために付けた。
- 註2 砂岩が使用されている石棺は各地にあるであろうが、層理を利用して板石を得ている一例として熊本県天草郡大矢野町、千鶴古墳群の石棺があげられる。また、岡県宇多郡不知火町、鷺籠古墳の石床石材があげられる。
- 註3 奥田尚「組合式家形石棺と石工集団」『古代学研究』101、古代学研究会 1983

第7章 家形石棺について

第1節 はじめに

古墳時代の墳墓には被葬者を埋葬する部屋があり、その中の部屋にはさらに被葬者を入れた棺が納められている。この棺は言うまでもないが死者を埋葬するために用いた容器である。この棺には色々な材質もの、形のものが現在までの調査で確認されており、既考古研究者により分類されている。材質では木製のもの、陶器のもの、石のものなどがある。形ではその材質や時期により異なる。形式では剖竹形・舟形・箱形・長持形・家形などに大きく分類される。木製は現在も盛んに使用されている棺であるが、ほとんどの木棺は腐敗し、その痕跡だけでその作りは不明なところが多い。近年（平成5年3月）松山市梅本町の造成で発見された古墳時代後期の横穴式石室から完全な形で木棺2個が検出されており、その調査成果により明らかにされるものと思われるが、保存方法や発掘調査の方法などを検討するため、現在（平成5年4月）は一端埋め戻されている。陶器のものは被葬者が納まるように粘土を材料にした焼物である。石は加工がしやすい凝灰岩などの石材を利用し、丁寧に加工して製作したものである。このうちもっとも一般的なものは木棺と石棺である。初期の古墳は木棺のみであったが前期後半ごろになって石棺が出現する。以降両者が並行して用いられるようになる。そのなかの家形石棺であるが、この石棺形式を用いるようになったのは後期から終末期にかけてである。この家形石棺が中期の長持形石棺にかわって近畿地方などで主流となっていたようである。しかし、九州地方では舟形石棺の影響をうけたもので、近畿地方と形態や性格を異にするといわれている。これは、6世紀以降、近畿地方と九州地方にそれぞれの文化圏が成立していったのではないかと思われる。また、第8表に掲載している古墳一覧表は「日本古墳大辞典」に掲載されている古墳で、そのなかから家形石棺が確認されている古墳を抜粋したものであるが、そのデータをみるとかぎりでは、近畿地方が約6割を占め、その中でも奈良県と大阪府がもっとも多い。これは、主要古墳が多いといえ、畿内政治勢力の中心であったことがいえるであろう。

第2節 家形石棺について

家形石棺は剖抜式と組合式の二種類である。「家形は蓋石の頂部にわずかの平坦面があり、四方に傾斜する形は四柱式の屋根の形を思わせるもので、この名がつけられた。古墳時代中期から後期にかけて発達したもので、新しい時期ものほど蓋石の頂部が平坦面で広い傾向がある」と分析されている。近年（平成4年）、考古学界で話題になった奈良県の見瀬丸山古墳の石室に安置されている2基の家形石棺がある。その石棺は剖抜式のもので蓋石にはそれぞれ縦掛突起があるが、蓋の厚さが違う。これまでの家形石棺の変遷では蓋石の形態の変化により時

期を設定している。それによると、「縄掛突起があり、厚みのあるものが古く、新しくなるに従い薄くなる傾向がある。」と指摘している。さらに「新しくなると縄掛突起がなくなり、より簡素化し、面取りしただけの蓋石になる。そして剖抜式の家形石棺がなくなり、組合式のものが主になる。」と総年されている。が、見瀬丸山古墳の家形石棺は奥石棺の蓋石が薄く、手前の石棺の蓋石が厚いのである。通常、埋葬されている石棺は奥が古く、手前の方が後から埋葬される石棺である。それが石棺の総年形態では奥の石棺が新しく、手前の石棺が古いということになり、論議になり話題になったのである。現在、見瀬丸山古墳は文化庁の管理下にあり、石室に埋葬された石棺の調査が無闇にできない為、その詳細については不明のままである。

さて、現在までの家形石棺研究では、家形石棺の蓋石は6個の「縄掛突起」をもつものがふつうであるが、省略されたものもある。身は剖抜式の箱形を呈するものが多いが、板状にした5枚前後の石を組みあわせて作ったものである。棺身には縄掛突起がない。身の辺の中央部が開口しているものを横口式石棺と呼んでいる。

全国的にみて、現在（「日本古墳大辞典」に掲載されている古墳）までに確認されている5世紀後半～7世紀前半の石室に埋葬された家形石棺は、石室内に残る小破片の石棺材からわかるものをいれて約74基の古墳で発見されている。そのうち型式が識別できたものは64基である。形式では剖抜式38基、組合式26基で剖抜式のほうが多い。近畿地方に存在する古墳でも同様のことが言える。しかし、大阪府の古墳は他の府県と逆である。芝塚古墳が存在する高安古墳群では石棺のある古墳が18基確認されており、うち家形石棺は9基である。形式での割合は剖抜式3基、組合式9基であり、組合式が半数以上を占めている。これは府下で発見された石棺にも言える。

第3節 芝塚古墳の家形石棺

芝塚古墳の石棺は、石棺Ⅰには縄掛突起がある石棺であるが、他の2基（石棺Ⅱ・石棺Ⅲ）はない。各石棺の形態については調査成果で前述しているとおりであるが、石棺Ⅰの石棺形態は今までに確認されている組合式石棺と同様なものは確認されていない。その形態特徴について例をあげて比較してみると、蓋石につく縄掛突起は横2対・縦1対の計6ヶ所と横2対の計4ヶ所にあるのが通常で、突起は対で偶数になっている。しかし、石棺Ⅰの蓋石の場合は横3対に縦1ヶ所の計7ヶ所で、奇数である。また、片（北）側の小口の端には1対の突起がついている。これは長持形石棺にみられるもので、そのなごりが根強く残ったものではないかと考えられ、家形石棺の系譜を研究する上で良好な資料といえるだろう。さらに蓋石と蓋石の合わせる上に長方形の石材がつくことが整理段階でわかった。この石材について著者が調べた限りでは現在（平成4年）までに報告されている文献資料や発掘調査などにはこの石棺形態に

類似する出土資料はなく、芝塚古墳だけのもので非常に興味深いものがある。著者が思うには埋葬者を封印し、外界のものと切り放すために置かれた石と解釈し、この石を「封石」と仮称した。また著者が考えるには、芝塚古墳の石棺I・石棺IIが家形石棺の中でも特殊なものといえ、埋葬された被葬者の氏族がどのような氏族であったかが浮かびあがってくるであろう。

第10表 家形石棺出十一覧表

No	都道府県	古墳名	市町村	時期	石棺形式	石棺の材質
1	宮城県	一塚古墳	仙台市太白区	6前半	刎抜式	
2	山形県	菱津古墳	鶴岡市		組合式	
3	群馬県	宝塔古墳	前橋市總社町	7末	刎抜式	凝灰岩
4	群馬県	経社愛宕山古墳	前橋市總社町	7前半	刎抜式	凝灰岩
5	東京都	狛江亀塚古墳	狛江市	6初頭	組合式	
6	石川県	散田金谷古墳	羽咋郡志賀町		組合式	
7	福井県	龍ヶ岡古墳	福井市		刎抜式	凝灰岩
8	山梨県	馬乗山古墳	東八代郡境川村	5後半	組合式	
9	静岡県	丸山古墳	静岡市		組合式	
10	三重県	おじょか古墳	志摩	5後半	組合式	
11	滋賀県	円山古墳	野洲郡野洲町		刎抜式	
12	滋賀県	勝堂古墳	愛知郡	6後半	組合式	竜山石
13	滋賀県	甲山古墳	野洲郡野洲町	6世紀代	刎抜式	凝灰岩
14	京都府	岩滝丸山古墳	与謝郡岩滝町		組合式	?
15	京都府	温江丸山古墳	与謝郡加悦町			
16	京都府	物集女車塚古墳	向日市	6後半	組合式	凝灰岩
17	京都府	順興寺古墳	竹野郡丹後町		組合式	
18	奈良県	兜塚古墳	桜井市	5後半	刎抜式	
19	大阪府	唐櫻山古墳	藤井寺市	5後半	刎抜式	阿蘇溶岩
20	大阪府	湯山古墳	堺市		組合式	凝灰岩
21	大阪府	南塚古墳	茨木市		組合式	凝灰岩
22	大阪府	古市古墳	古市	5~6世紀		
23	大阪府	長持山古墳	藤井寺市		刎抜式	阿蘇溶岩
24	大阪府	清瀬古墳	四条畷市	6中~後半	刎抜式	凝灰岩
25	大阪府	金山古墳	河南		刎抜式	凝灰岩
26	大阪府	御旅所北古墳	千里赤阪村	6末	組合式	凝灰岩
27	大阪府	お龜石古墳	富田林市	7初	刎抜式	凝灰岩
28	兵庫県	中山寺古墳			刎抜式	
29	奈良県	笛吹古墳	北葛城郡新庄町		刎抜式	凝灰岩
30	奈良県	与栗古墳	高市郡高取町	6後半	組合式	
31	奈良県	宮塚古墳	高市郡高取町	6前	刎抜式	
32	奈良県	水泥蓮華古墳	御所市	7前	刎抜式	
33	奈良県	見瀬丸山古墳	櫛原市	6後半	刎抜式	
34	奈良県	藤ノ木古墳	生駒郡斑鳩町	6後半	刎抜式	凝灰岩
35	奈良県	東糸佐古墳	天野市木之本町	6前半	刎抜式	凝灰岩
36	奈良県	牧野古墳	北葛城郡新庄町	6末	刎抜式	
37	奈良県	市尾幕山古墳	高市高取町	5~6世紀	刎抜式	
38	奈良県	野神古墳	奈良市南京終町	5後半	刎抜式	凝灰岩
39	奈良県	西宮古墳	生駒郡平群町	7後半	刎抜式	
40	奈良県	赤坂天王山	桜井市	6~7世紀	刎抜式	凝灰岩
41	奈良県	新宮山古墳	御所市	6世紀代	刎抜式	竜山石
42	奈良県	墓古墳	桜井市	7前半	刎抜式	意山石
43	奈良県	原狐塚古墳	桜井市	6~7世紀	組合式	凝灰岩
44	和歌山县	大谷山古墳	和歌山市	5後半~6	組合式	

No	都道府県	古墳名	市町村	時期	石棺形式	石棺の材質
45	島根県	飯梨岩舟古墳	安来市岩舟町		刳抜式	
46	島根県	妙蓮寺古墳	出雲市		横口式	
47	島根県	御崎山古墳	松江市大華町	6後半	組合式横口	
48	島根県	橋本古墳	島根市		刳抜式	凝灰岩
49	島根県	高広横穴古墳	安来市	6・7世紀	組合式	
50	島根県	大念寺古墳	出雲市	6中		
51	島根県	鶴ノ湯古墳	安来市	6後半	組合式	凝灰岩
52	島根県	刈山古墳	出雲市	6・7世紀	組合式	
53	島根県	岡田山1号墳	松江市	6後半	組合式	
54	島根県	上島古墳	平田市岡富町上島	6前半	刳抜式	凝灰岩
55	岡山県	築山古墳	邑久郡長船町		刳抜式	
56	岡山県	宮山西塚古墳	岡山市		刳抜式	凝灰岩
57	岡山県	金子石塔塚古墳	総社市	6後半～7 6中	刳抜式	凝灰岩
58	岡山県	八幡大塚古墳	岡山市		組合式	
59	岡山県	江崎古墳	総社市上林字江崎		刳抜式	貝殻石灰
60	広島県	御年代古墳	豊田郡本郷町	7前	刳抜式	
61	広島県	貞丸1号墳	豊田郡本郷町	6末	刳抜式	童山石
62	広島県	北塙古墳	福山市	7前半	組合式	
63	山口県	大口古墳	防府市		刳抜式	凝灰岩
64	香川県	渋野丸山古墳	観音寺市塙本町		刳抜式	
65	福岡県	浦山古墳	久留米市上津町	5後半	組合式	阿蘇溶岩
66	福岡県	綾塚古墳	京都郡勝山町中黒田	7前半	刳抜式	凝灰岩
67	佐賀県	西隅古墳	佐賀市金立町		刳抜式	
68	熊本県	梅崎古墳	宇土郡不知火町			
69	熊本県	塚坊主古墳	玉名郡菊水町	6前半	?	
70	熊本県	鴨籠古墳	宇土郡花園町	6世紀代	刳抜式	阿蘇溶岩
71	熊本県	江田船山古墳	玉名郡菊水町		横口組合式	阿蘇溶岩
72	大分県	龟甲山古墳	大分市分		組合式	
73	大分県	龟塚古墳	大分市坂ノ市	5世紀代	組合式	
74	鹿児島県	宮ノ上地下式古墳	肝付郡吾平町	6世紀代	組合式	珪石

第8章 その他の出土遺物

第1節 はじめに

芝塚古墳の横穴式石室内には古墳の副葬品とは全く関係のない遺物がある。出土している遺物は縄文時代～近代までの幅の広い時期のものが自然に運ばれたもの、人為的に運ばれたもの等なんらかの原因で混入したと考えられる。縄文時代のものは石鏃・石槍などの石器、平安時代末～鎌倉時代のものは土師質の小皿・中皿・すり鉢・羽釜等の土器、瓦器の小皿・椀、中国陶器の四耳壺、近代のものは茶碗等の瀬戸物である。特殊なものとしては平安時代末～鎌倉時代の遺物と共に出土した猿の頭蓋骨である。この猿を食したのかはわからない。今後の課題である。

以下、各時代の出土遺物について報告する。

第2節 縄文時代～弥生時代の遺物

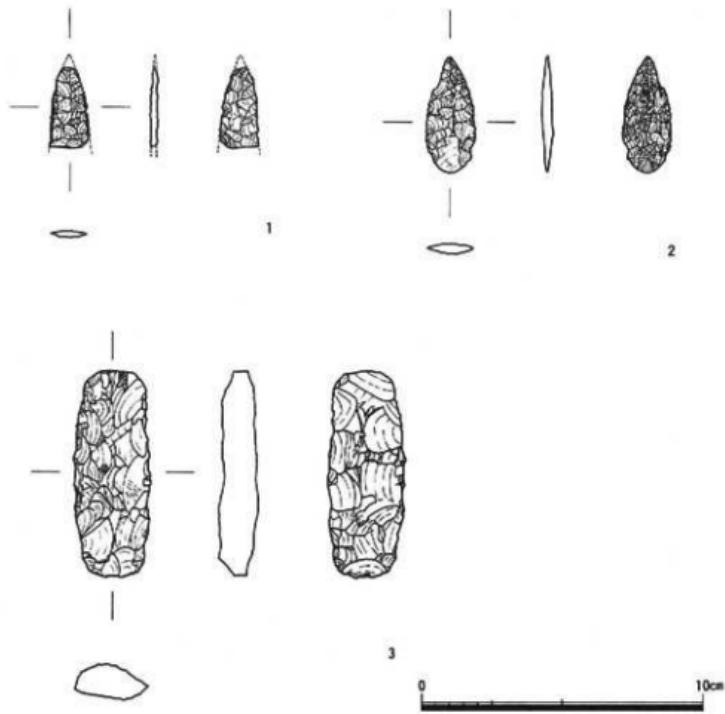
石室を埋まつた土層内より、3点の石器が出土した。第44図に図示しているが、非常に良好な状態のものである。1の石鏃は形状二等辺三角形を呈し、刃先が鋭く、脇抉部分は欠損している。断面形は偏平な菱形を呈している。形態分類では凸基有茎式といわれるものである。2の石鏃は形状葉形を呈し、刃の部分に細かく鋸歯状をなし、脇抉は丸い。断面形は非常に薄い凸レンズ状形を呈している。形態分類では円基無茎式といわれるものである。3の石槍は両端部が欠損している。断面形は厚い凸レンズ状形を呈し、剥離調整は粗い仕上げである。

第11表 石器法量表

遺物番号	縦(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
1	3.8	1.4	0.3	矢先欠損
2	4.0	1.8	0.4	
3	7.3	2.7	1.3	両端欠損

第3節 平安時代末～鎌倉時代前期の遺物

出土状況は前章でも記述しているように石室に堆積していた埋土の中位ぐらいで拳人の石集積の下部で多量に出土した。器種では土師質の小皿・中皿・羽釜、黒色土器、瓦器の小皿・椀、陶質土器の四耳壺、陶磁器等である。以下、これらの遺物については器種別に分け、さらに形



第44図 石器実測図

器種 製式		形態の特徴		
小皿	A型	平坦な底部から端部はつまみ上げるもの 曲し、外上方へ外反して伸びる口縁	3・4	
	B型	端部は外方へつまみ出すもの 部に至る	5	
C型	口縁部が内溝し、棱線がないもの		ア、底盤が平底	6
			イ、底盤が丸底	7・8
D型	棱縁をもち、口縁部が内溝する		D 1型 底盤があげ底のもの	9~13
			D 2型 端部がつまみ上げられているもの	14~25
			D 3型 端部が丸いもの	26~36
E型	棱縁をもたないもの		E 1型 口縁部が内溝し、端部は丸い ア、底盤は平底	37
			イ、底盤は丸底	39~44・47
			ウ、底盤は上げ底	38・46
			エ、底盤は欠損	45
			E 2型 口縁部が上外方へ直線的に伸びる ア、底盤は平底で、端部は丸い	49
			イ、底盤は丸底で、端部は丸い	58
			ウ、底盤は上げ底で、端部は丸い	48・50~57
			エ、底盤は欠損で、端部は外傾する凹面	59・60
			E 3型 口縁部が外反するもの ア、底盤は平底で、端部は丸い	61・63・65~71・74 ・75~77
			イ、底盤は丸底で、端部は丸い	64・73
			ウ、底盤は上げ底で、端部は丸い	62・72・76
F型	口縁部が内溝気味に伸びる			78
G型	口縁部が上外方へ直線的に伸びる			79
中皿	A型	棱縁をもち、口縁部が内溝しているもの	イ、底盤は丸底、端部は丸い オ、底盤は平底、端部は上につまむ	80・81 82~84
	B型	棱縁をもたない、口縁部が内溝している	ア、底盤は平底、端部は丸い オ、底盤は平底、端部は上につまむ カ、底盤は丸底、端部は内方へつまむ	85・89~91 85・88 87

器 様		形 種 の 特 徴	
型 式			
		B 3型 範が浅い、見込みが細かい斜格子状の窓研き ア、内面にハケナデあり、断面逆三角形の高台、端部は丸い イ、断面逆三角形の高台	135 136・137
		B 4型 範が浅い、見込みが粗い斜格子状の窓研き ア、断面逆三角形の高台、端部は丸い イ、高台欠損、端部は丸い ウ、外側の調整不明 エ、断面方形の高台、端部は丸い オ、断面逆三角形の高台、端部は丸い	138 139 140・142 141 143
C類	見込みが平行線状の窓研き	C 1型 見込みが粗い平行線状の窓研き ア、断面逆三角形の高台、端部は丸い イ、高台欠損、端部は丸い II外側に難磨きがあるもの ウ、断面逆三角形の高台、端部は内傾する凹面をもつ エ、断面方形の高台、端部は丸い II外側に指磨痕のあるもの ア、断面逆三角形の高台、端部は丸い イ、断面方形の高台、端部は内傾する凹面をもつ III外側に調整不明のもの ア、断面逆三角形の高台、端部は丸い イ、断面方形の高台、端部は丸い ウ、断面逆三角形の高台、端部は内方へ肥厚する エ、断面方形の高台、端部は丸い ①外側に難磨きがあるもの ア、断面方形の高台、端部は丸い イ、断面逆三角形の高台、端部は丸い	144・148・156 145 149 154 147・151 155 146 150 152 153 157 158～161
		C 2型 見込みが細かい平行線状の窓研き ②外側に調整不明のもの ③外側に調整不明のもの	162 163
大相型 A型	見込みが重なりあわない連結輪状の 窓研き	A 1型 見込みが太い連結輪状の窓研き ア、断面逆三角形の高台、端部は内傾する凹面をもつ イ、断面方形の高台、端部は内傾する凹面をもつ	164・165・167・168 166・168・171
		A 2型 見込みが細かい連結輪状の窓研き ア、外側に難研きなし、断面方形の高台、端部は内傾する凹面をもつ イ、断面逆三角形の高台、端部は丸い ウ、断面方形の高台、端部は内傾する凹面をもつ エ、断面逆三角形の高台、端部は内傾する凹面をもつ	172 173 174・175・178・181 ・182 176・177・179・180 ・183～190

器種型式		形態の特徴	
瓦器 椀	B型	見込みが重なりあう連結輪状の窓研ぎ ア. 断面連三角形の高台、端部は内傾する凹曲をもつ イ. 断面方形の高台、端部は内傾する凹面をもつ	191・193～202 192
和泉型	B型	粗い斜格子状のヘラミガキ	
		ア. 外面にヘラミガキがあるもの イ. 外面にヘラミガキがないもの	203 204・205
	C型	平行線状の窓研ぎ ア. 外面にヘラミガキがあるもの イ. 外面にヘラミガキがないもの	209・210 211
	D型	見込みがジグザグの窓研ぎ ア. 外面にヘラミガキがあるもの イ. 外面にヘラミガキがないもの	206・208 207
	E型	見込みが放射状のヘラミガキ ア. 外面にヘラミガキがあるもの イ. 外面にヘラミガキがないもの	212・213 214
	F型	内面が螺旋状のヘラミガキ ア. 内外面にヘラミガキがないもの イ. 外面にヘラミガキがないもの	215・217 216・218・219
すり鉢	A型	平らな底部から上外方へ直線的に伸びる。 ア. 口縁端部をつまみ上げ、凹面をもつもの イ. 口縁端部をつまみ上げ、面をもつもの	220・221 222
羽釜	A型	球形の体部で、上位に鶴が付く、口縁部は屈曲し上外方へ短く伸びる ア. 口縁端部は丸く終る イ. 口縁端部を内側に肥厚する	223～225 226～244

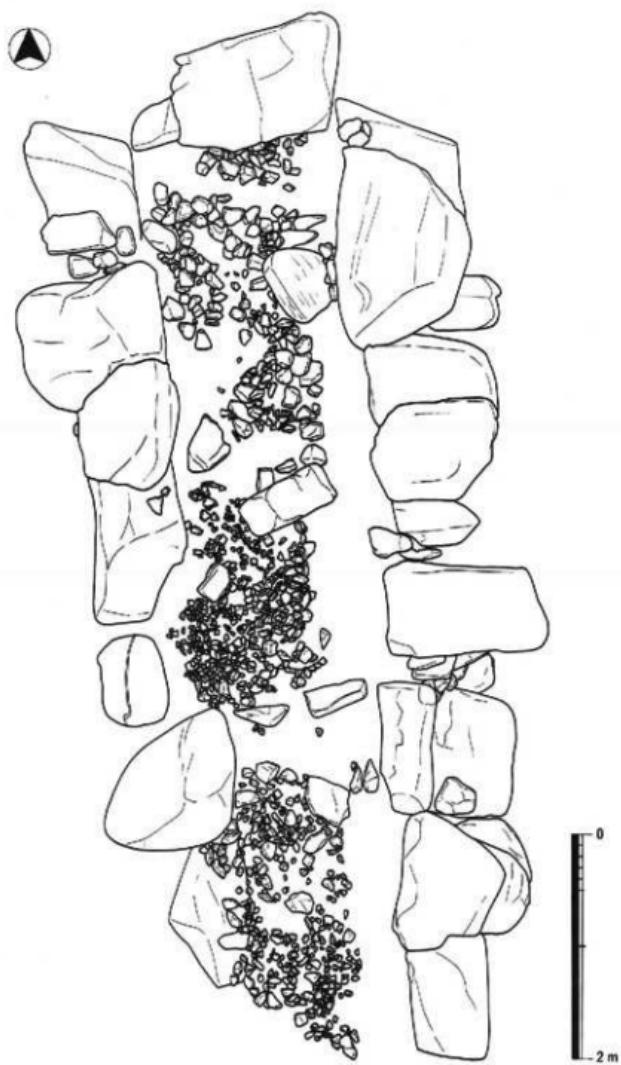
種分類した。中世の時期の土器類については当調査研究会の原田氏が編年試案（註1）を提唱しており、それに合わせるとⅡ期の範疇に入る資料である。特に瓦器の椀については大和型と和泉型と大きく分類でき、割合では和泉型6に対し、大和型4である。この瓦器の資料は中世の流通を研究する上で貴重な資料と思われる。が、この報告では諸事情により簡単な資料紹介だけにした。なお、個々の遺物については観察表として掲載している。

第4節 近世の遺物

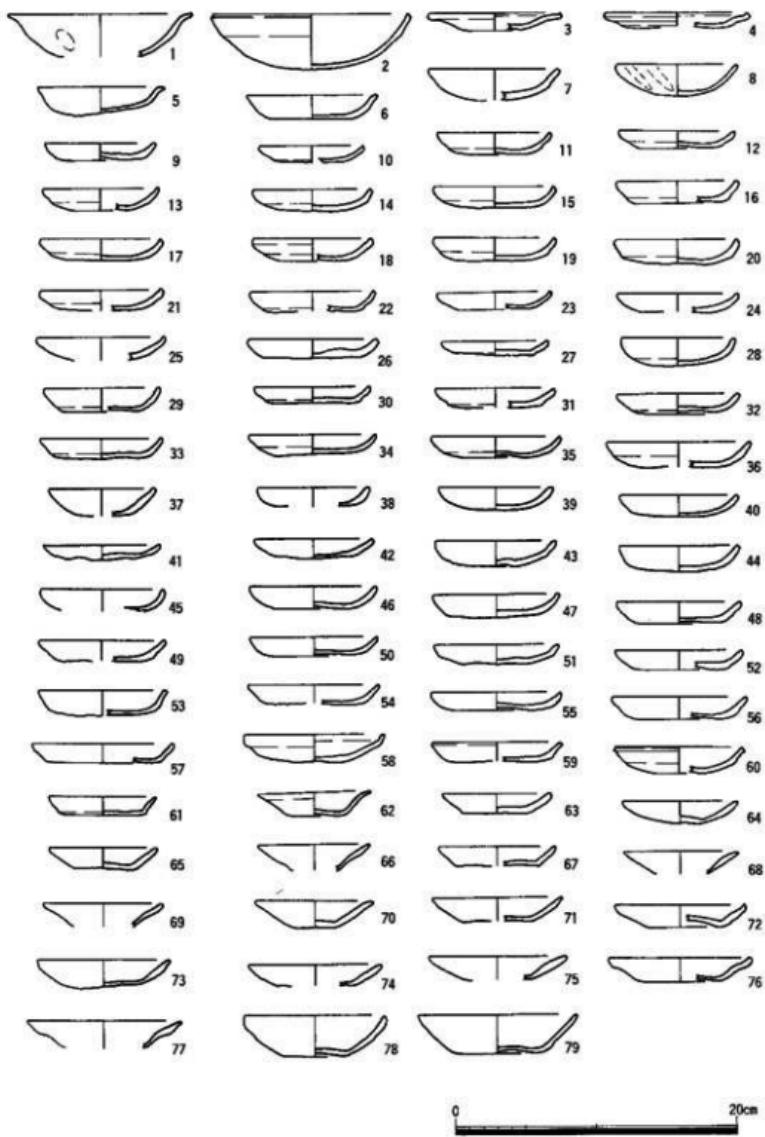
石室の第2層内から出土している。湯のみ茶碗・茶碗・椀の瀬戸物である。246は椀で外面に花文文様が描かれている。247は外面に花文文様が描かれている。248は外面に庭園、内側に岩と家屋の文様が描かれている。

註

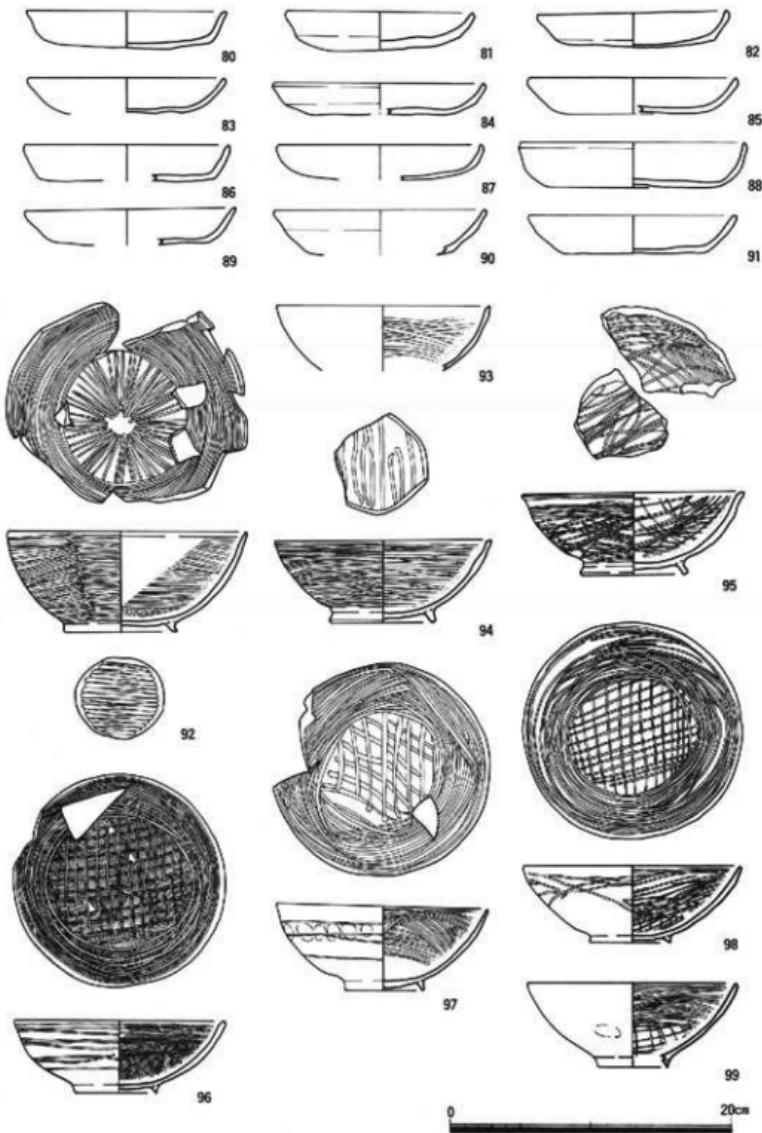
註1 (財)八尾市文化財調査研究会報告13「I立板A遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告 第5章 遺構・遺物の検討」(八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度)1987



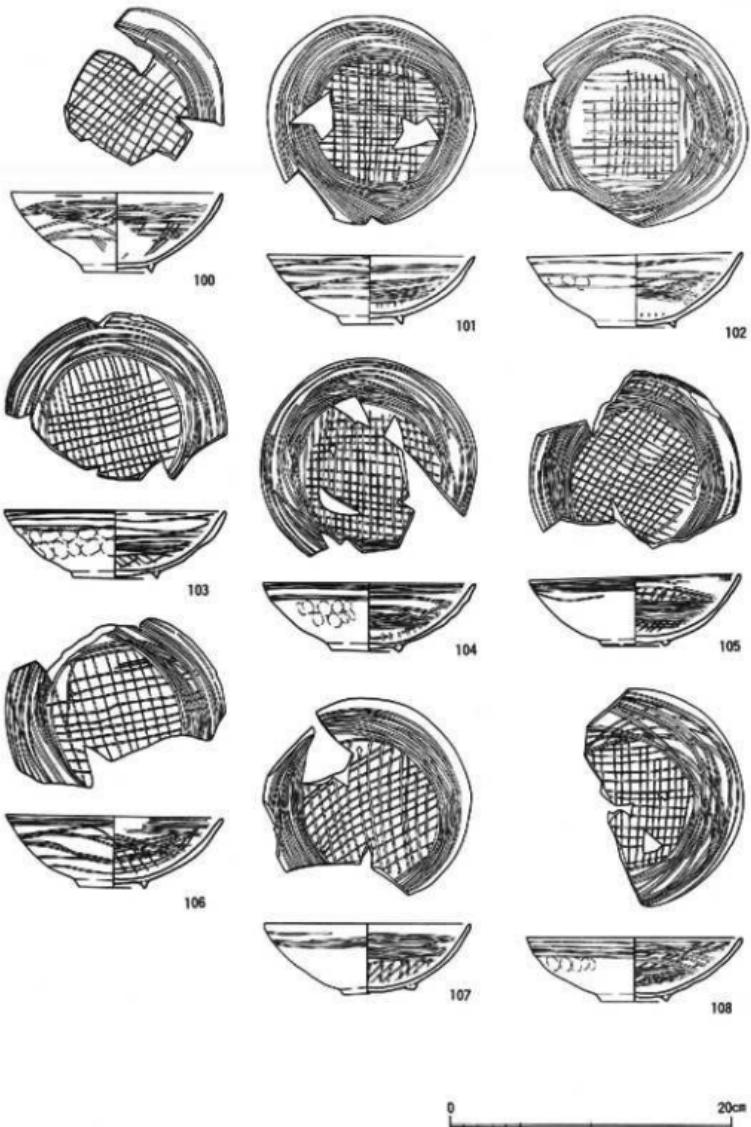
第45図 石室上面実測図



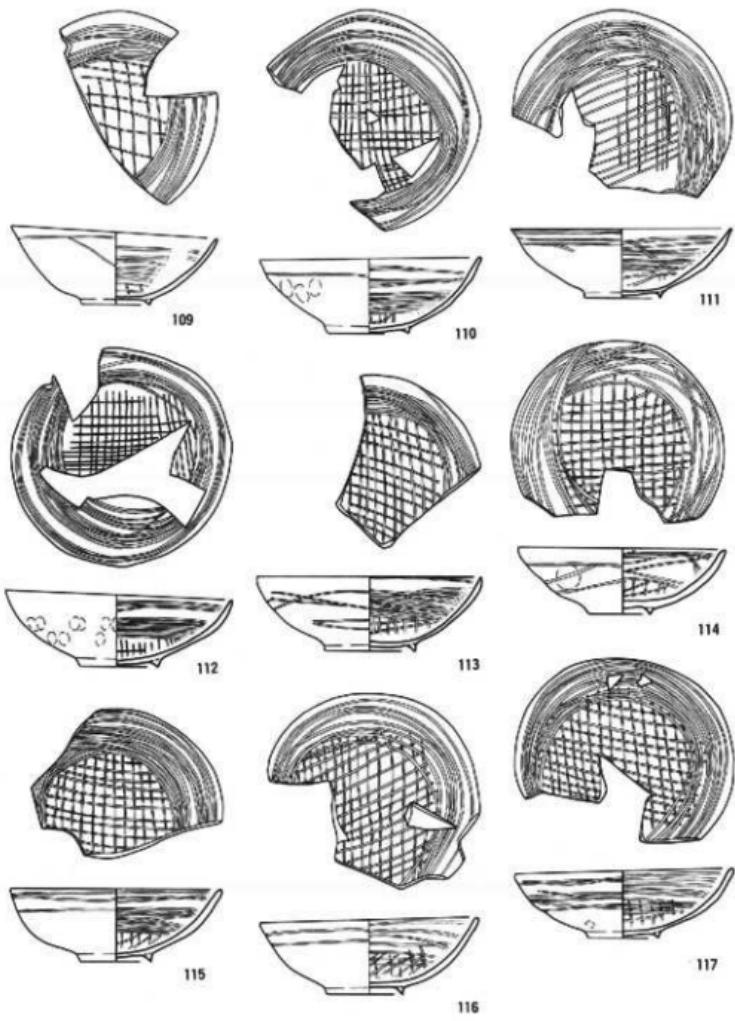
第46図 遺物実測図 1



第47図 遺物実測図 2

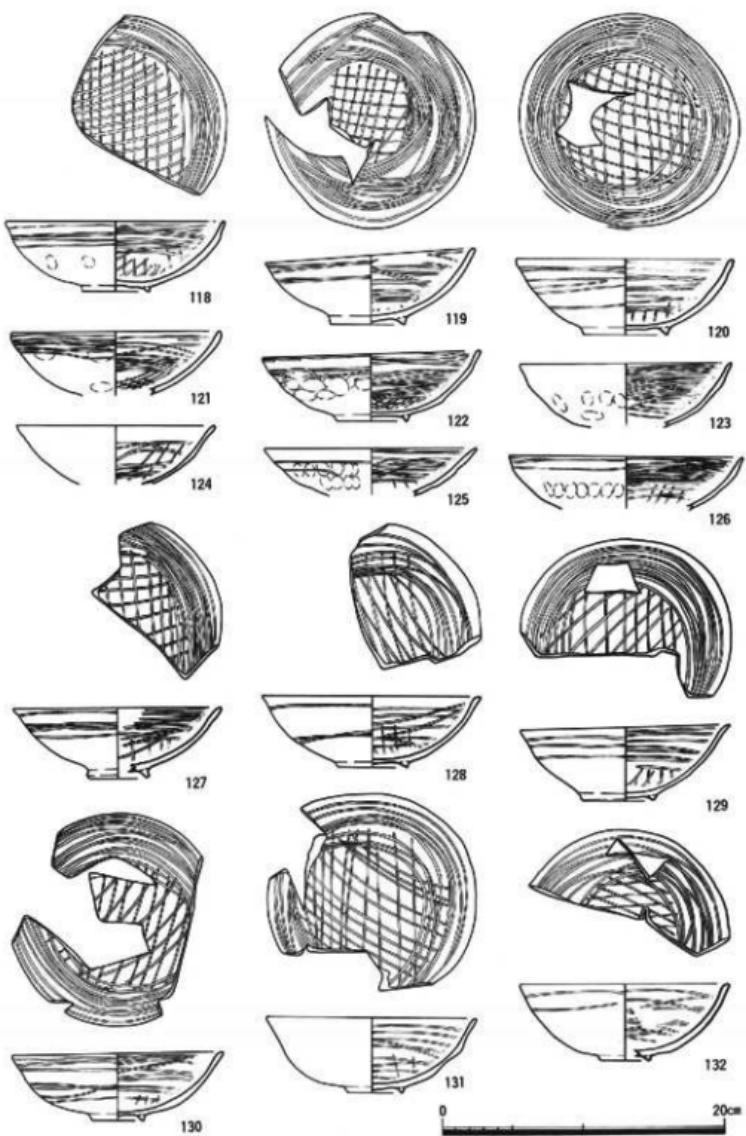


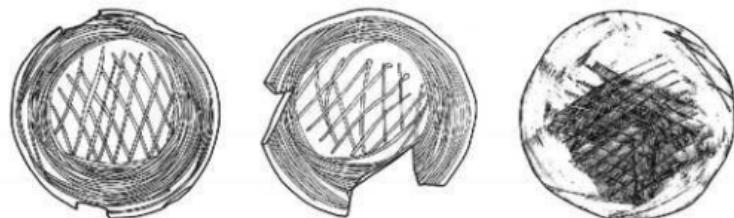
第48図 遺物実測図 3



0 20cm

第49図 通物実測図 4





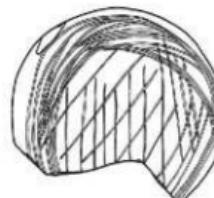
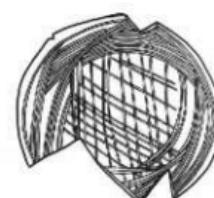
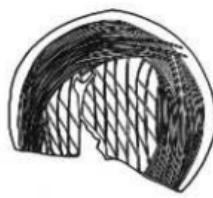
133



134



135



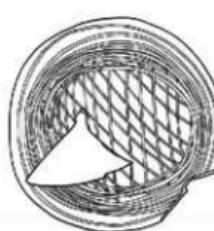
136



137



138



139



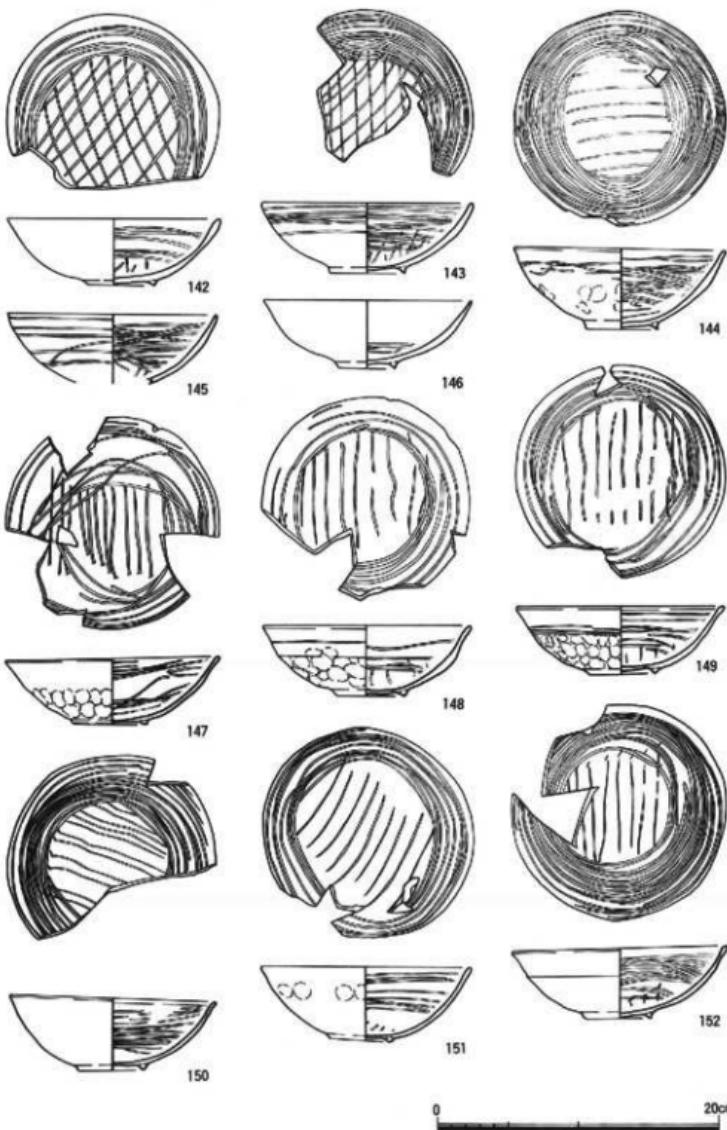
140



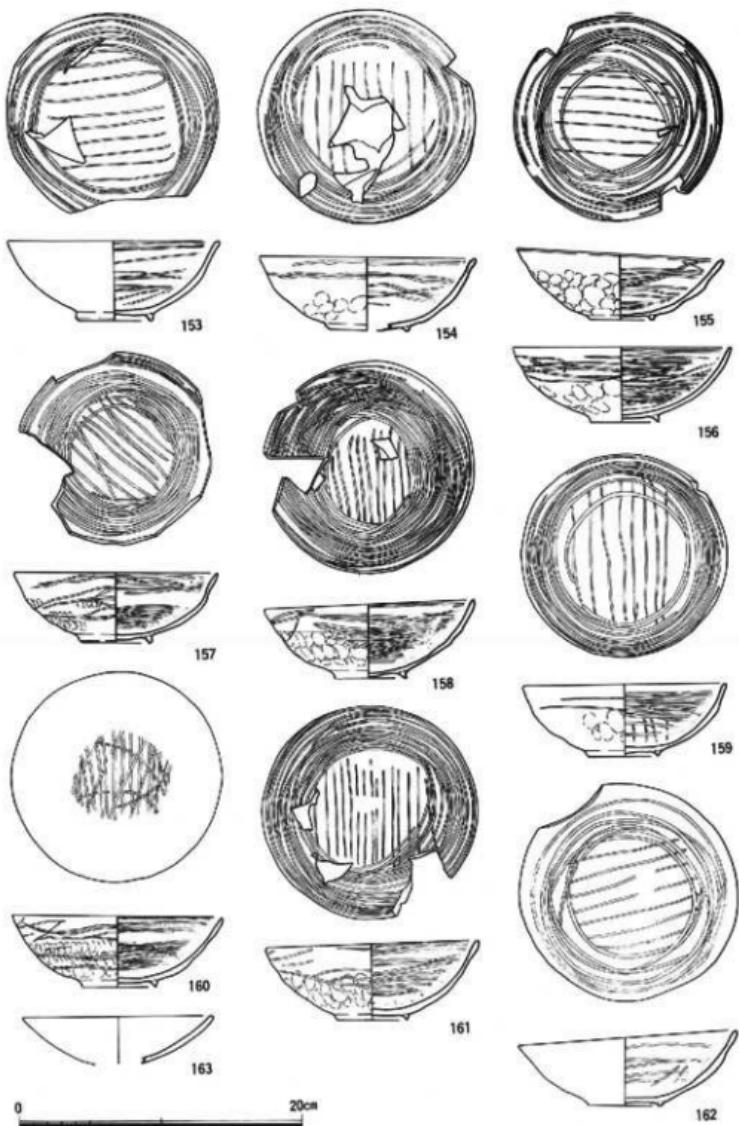
141



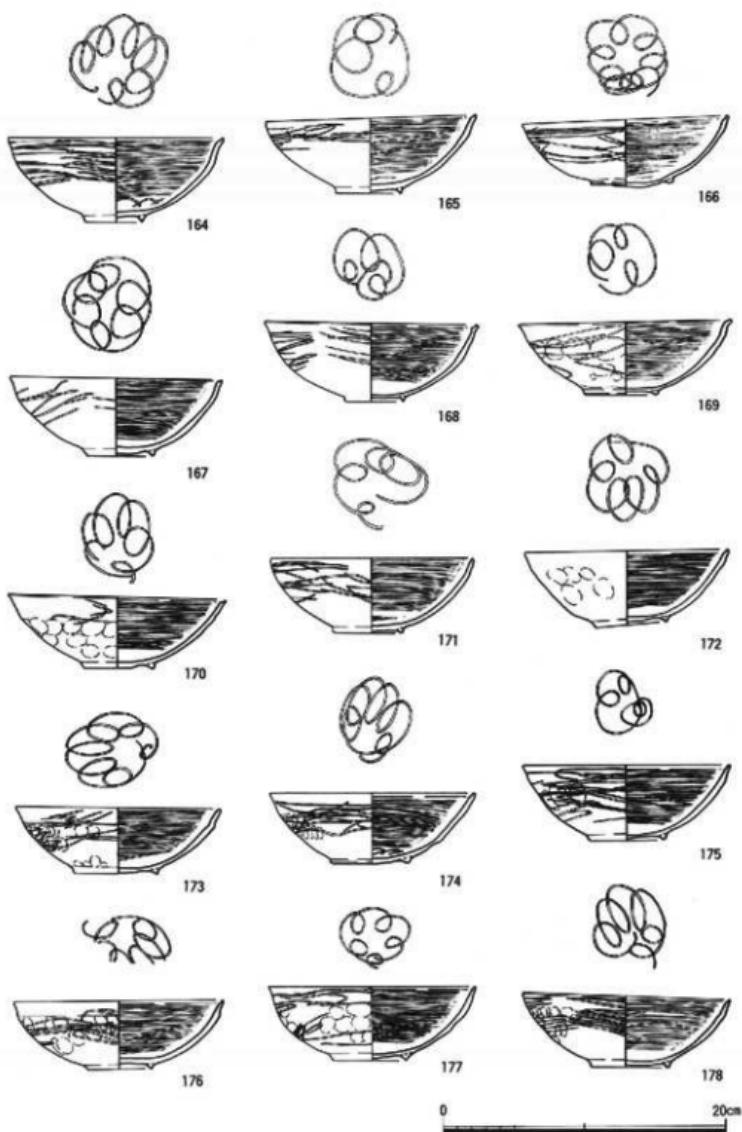
第51図 遺物実測図 6



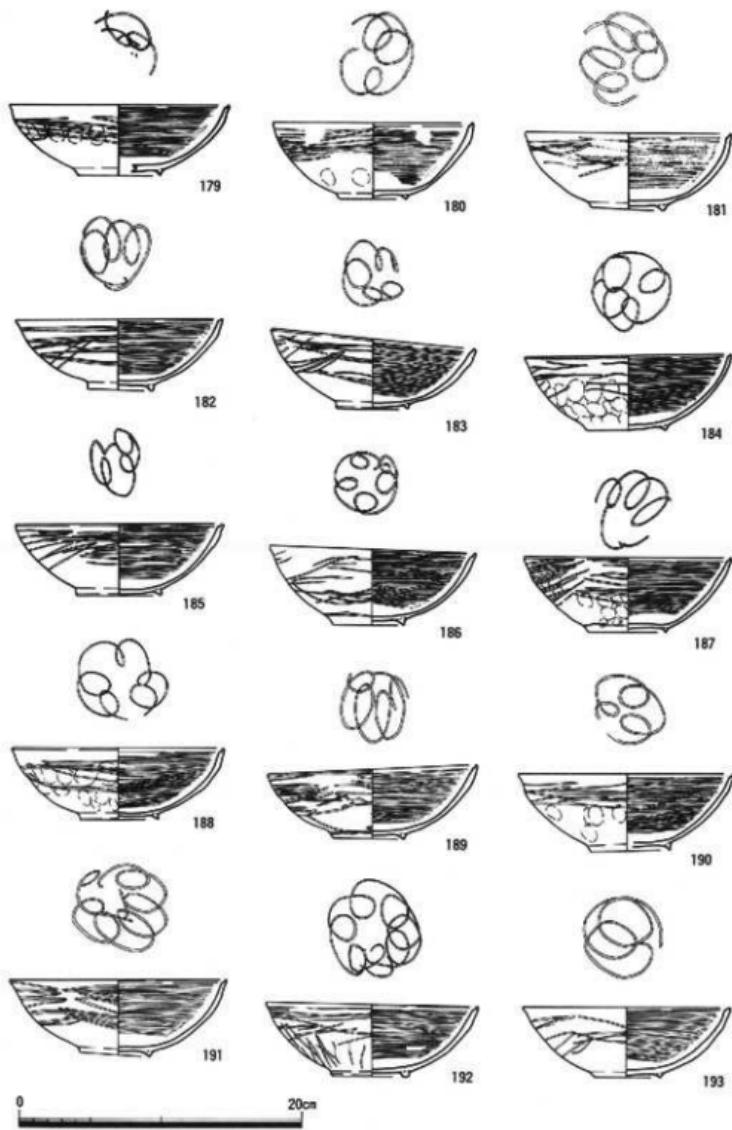
第52図 遺物実測図 7



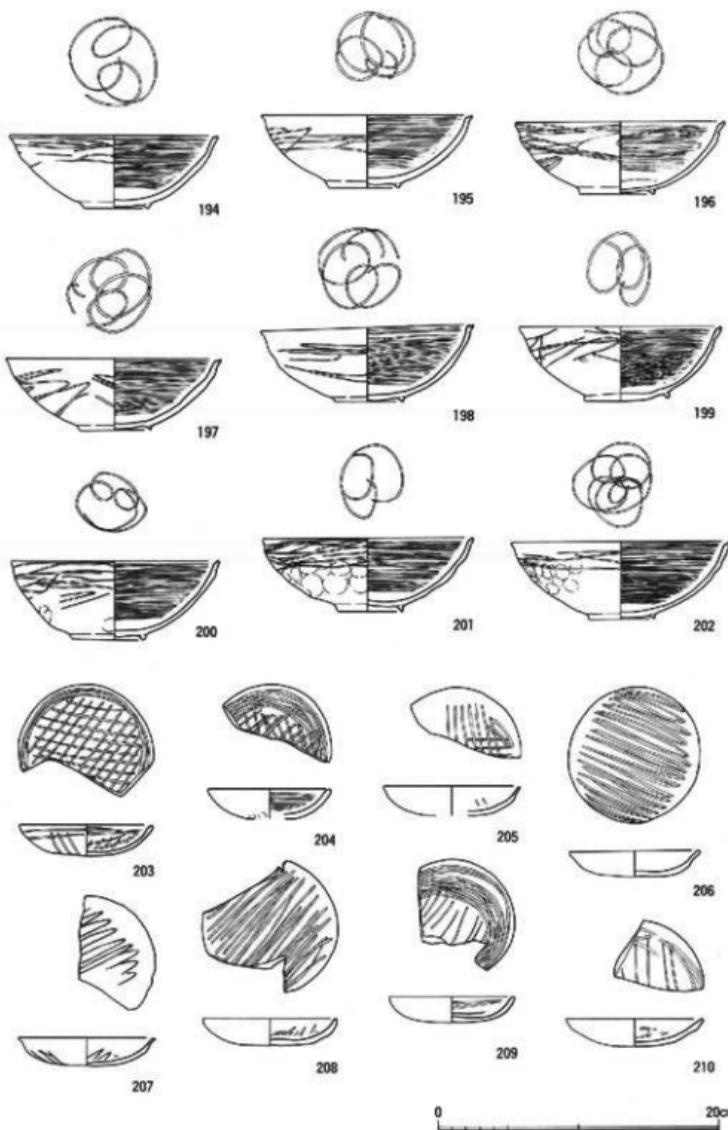
第53図 遺物実測図 8



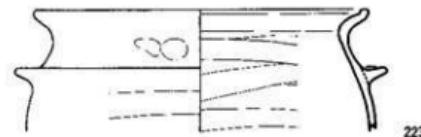
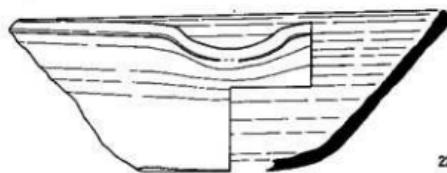
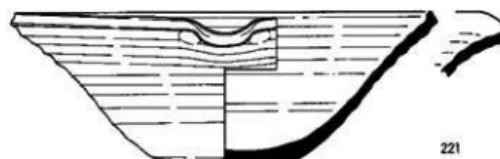
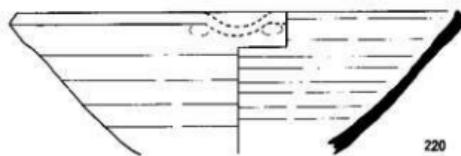
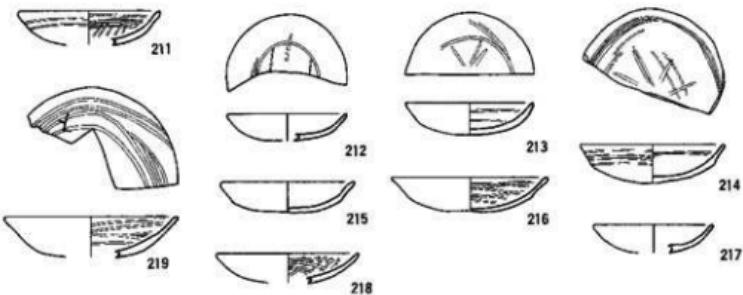
第54図 遺物実測図 9



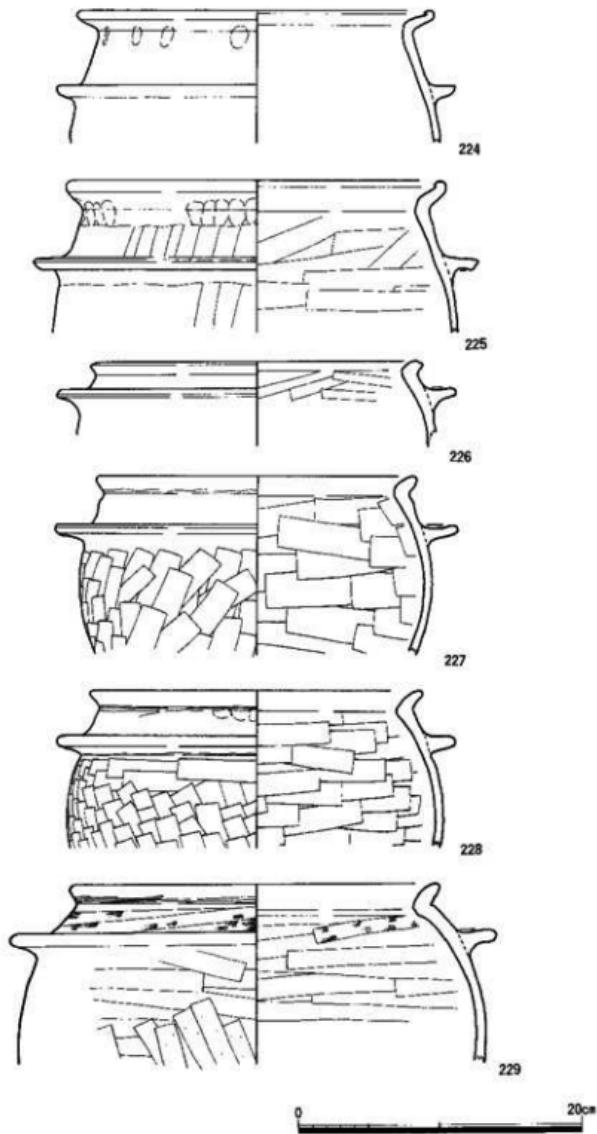
第55圖 遺物実測図10



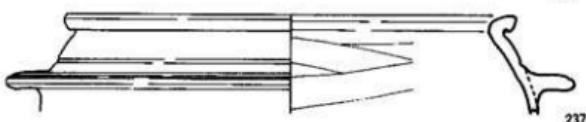
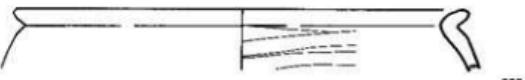
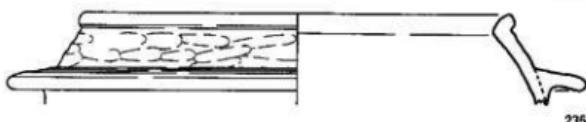
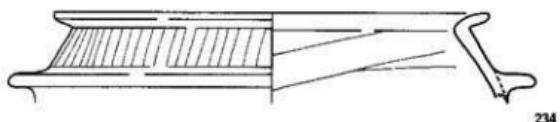
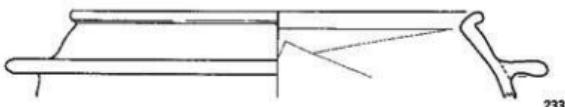
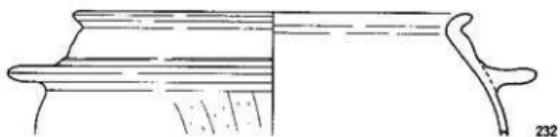
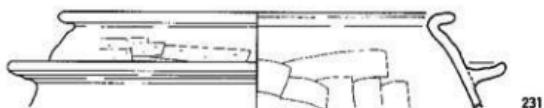
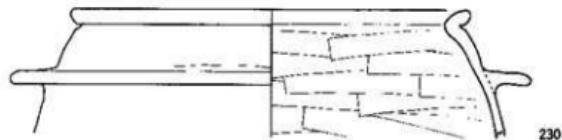
第56図 遺物実測図11



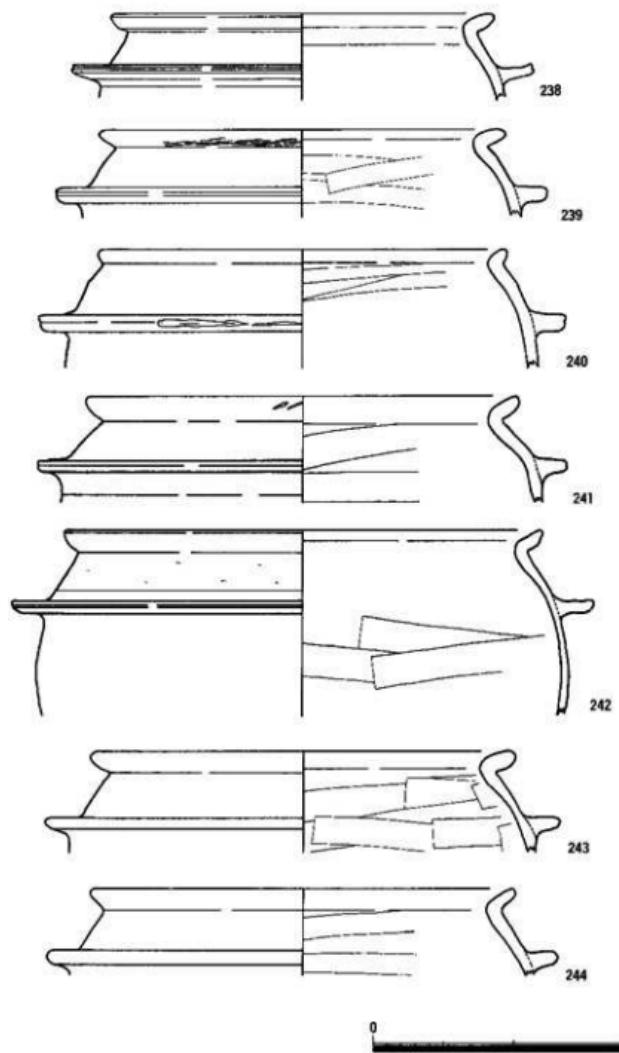
第57圖 遺物実測図12



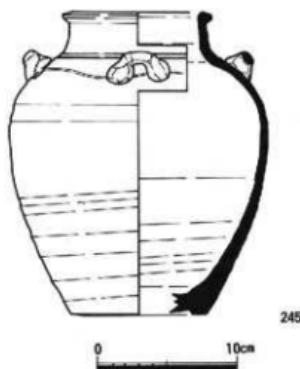
第58図 遺物実測図13



第59圖 遺物實測圖14

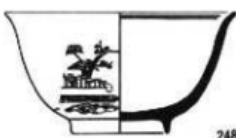


第60図 遺物実測図15



245

0 10cm



0 20cm

第61図 中近世遺物実測図

中世の出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法 量 (mm)	測 定 部	色 調	地 上	地 成	備 考
1	杯 (土加物)	-	口 径 13.0 高 4.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指標痕 内面 ナデ	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を含む	良好	
2	同 上	-	口 径 13.8 高 4.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	2.5mm以下の 砂粒を微量に含む	良好	
3	小皿 (土加物)	小皿A型	口 径 9.4 高 1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	乳白色	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好	
4	同 上	小皿A型	口 径 10.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	2mm以下の 砂粒を少量含む	良好	
5	同 上	小皿B型	口 径 9.0 高 2.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ヨコナデヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を少量含む	良好	
6	同 上	小皿C型	口 径 9.2 高 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳白色	精良	良好 底部は平底 端部は丸い =イ	
7	同 上	小皿C型	口 径 9.3 高 2.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量に含む	良好 底部は平底 端部は丸い =イ	
8	同 上	小皿D 1型	口 径 8.4 高 2.2	外面 指ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好 底部は平底 端部は丸い =イ	
9	同 上	小皿D 1型	口 径 8.0 高 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳白色	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好 端部は丸い	
10	同 上	小皿D 2型	口 径 7.4 高 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量含む	良好 端部は丸い	
11	同 上	小皿D 1型	口 径 8.0 高 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量に含む	良好 端部は丸い	
12	同 上	小皿D 1型	口 径 8.1 高 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量に含む	良好 端部は丸い	
13	同 上	小皿D 1型	口 径 8.2 高 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を微量含む	良好 端部は丸い	
14	同 上	小皿D 2型	口 径 8.3 高 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ヨコナデヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1.5mm以下の 砂粒を微量含む	良好	
15	同 上	小皿D 2型	口 径 8.6 高 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ヨコナデ	淡茶褐色	精良	良好	
16	同 上	小皿D 2型	口 径 8.5 高 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量含む	良好	
17	同 上	小皿D 2型	口 径 8.5 高 1.4	外面 ヨコナデヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	2.5mm以下の 砂粒を微量含む	良好	
18	同 上	小皿D 2型	口 径 8.5 高 1.6	外面 ヨコナデヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を微量含む	良好	
19	同 上	小皿D 2型	口 径 8.6 高 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡灰茶色	1mm以下の 砂粒を微量含む	良好	
20	同 上	小皿D 2型	口 径 8.6 高 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳白色	1mm以下の 砂粒を微量含む	良好	

植物書外 図版番号	品種	形態分類	法量 (ml)	調査板	色調	地土	焼成	備考
21	小黒 (土崎)	小黒D 2型	口 径 器 高 8.7 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡灰系色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
22	同 上	小黒D 2型	口 径 器 高 8.7 1.4	外面 ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
23	同 上	小黒D 2型	口 径 器 高 8.0 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	1.5mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	
24	同 上	小黒D 2型	口 径 器 高 8.8 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡系褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
25	同 上	小黒D 2型	口 径 器 高 9.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	乳系灰色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
26	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 9.0 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡灰系色	0.5mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
27	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 7.5 1.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳系灰色	2mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	
28	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 8.0 2.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	系褐色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	
29	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 8.2 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡灰系色	精良	良好	
30	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 8.2 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡系灰色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
31	桙 (土崎)	小黒D 3型	口 径 器 高 8.5 1.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡灰系色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	
32	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 8.6 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡系灰色	精良	良好	
33	小黒 (土崎)	小黒D 3型	口 径 器 高 8.6 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡系灰色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
34	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 9.0 1.6	外面 ナデ 内面 ナデ	系褐色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	
35	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 9.2 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡系灰色	1.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	
36	同 上	小黒D 3型	口 径 器 高 10.2 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡系灰色	精良	良好	
37	同 上	小黒E 1型	口 径 器 高 7.5 2.0	外面 ナデ 内面 ナデ	淡灰系色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好 底部は平底 一ア	
38	同 上	小黒E 1型	口 径 器 高 8.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	系褐色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好 底部上げ度 一ウ	
39	同 上	小黒E 1型	口 径 器 高 8.0 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	乳系灰色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好 底部は丸底 一イ	
41	同 上	小黒E 1型	口 径 器 高 8.3 1.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	明系色	1mm以下の 砂粒を少 量含む	良好 底部は丸底 一イ	
42	同 上	小黒E 1型	口 径 器 高 8.4 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ナデ	淡灰系色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好 底部は丸底 一イ	

遺物番号 同族番号	器種	形式分類	法 式 (cm)	調 整 部	色 調	地 上	級成	備考
43	小皿 (十脚)	小皿E 1型	口 径 高 器 高	8.0 1.8 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
44	円 上	小皿E 1型	口 径 高 器 高	8.4 1.8 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 体部ナデ、休部ナデ	外 内 淡茶灰褐色 ～乳茶灰褐色 淡茶灰褐色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
45	円 上	小皿E 1型	口 径 高 器 高	8.7 1.8 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	外 内 淡茶灰褐色 淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
46	円 上	小皿E 1型	口 径 高 器 高	8.8 1.6 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
47	円 上	小皿E 1型	口 径 高 器 高	8.8 1.6 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
48	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	8.8 1.6 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
49	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	8.9 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ ナデ	淡茶灰褐色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
50	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.0 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ ヨコナギ	乳茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
51	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.0 1.4 外周 内周 ナデ ナデ	淡茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
52	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.0 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
53	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.0 1.8 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	2.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
54	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.2 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1.5mm以下 の砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
55	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.2 1.2 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
56	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.6 1.6 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
57	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.9 1.4 外周 内周 ヨコナギ ヨコナギ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部は丸底 =イ
58	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	10.0 2.0 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 =イ
59	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	9.0 1.4 外周 内周 山縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	6mmの範 2mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	
60	円 上	小皿E 2型	口 径 高 器 高	10.0 1.8 外周 内周 山縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	灰褐色	2.5mm以下 の砂粒を少 量含む	良好	
61	円 上	小皿E 3型	口 径 高 器 高	7.6 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 山縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	底部は丸底 底盤は丸い =ア
62	円 上	小皿E 3型	口 径 高 器 高	7.6 1.6 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	0.5mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	底部はあげ 底盤は丸い =ウ
63	円 上	小皿E 3型	口 径 高 器 高	7.6 1.4 外周 内周 口縁部ヨコナギ、体部ナデ 口縁部ヨコナギ、体部ナデ	淡茶灰褐色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	

遺物番号 図版番号	形 種	形式分類	法 量 (cm)	測 定	色 調	基 土	焼成	備 考
65 1-286	小皿 E型	小皿E 3型	口 径 身 高 7.0 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部は丸い 端部は丸い =イ
65 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 7.6 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
66 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 7.9 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
67 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 8.7 1.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ヨコナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
68 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 8.2 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ヨコナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
69 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 8.3 1.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
70 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 8.3 2.0	外面 ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
71 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 9.1 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
72 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 9.1 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ウ	
73 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 9.3 2.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指鉗痕 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	イ	
74 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 9.4 1.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
75 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 9.7 1.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	A	
76 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 10.0 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ウ	
77 同 上	小皿E 3型	口 径 身 高 10.9 1.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指鉗痕 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好		
78 同 上	小皿F型	口 径 身 高 10.0 1.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好		
79 同 上	小皿G型	口 径 身 高 12.2 3.0	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指鉗痕 内面 ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好		
80 中皿 (1-290)	中皿A型	口 径 身 高 14.0 2.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部は丸底 端部は丸い =イ	
81 同 上	中皿A型	口 径 身 高 13.2 3.0	外面 ナデ 内面 ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	イ	
82 同 上	中皿A型	口 径 身 高 13.4 2.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部は丸底 端部は上に つまむ=オ	
83 同 上	中皿A型	口 径 身 高 13.8 2.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	オ	
84 同 上	中皿A型	口 径 身 高 14.8 2.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	オ	

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法 異 (cm)	調 査 表	色 調	地 土	既成	備 考
85 (85)	鉢B型	口 極 器 高 基 高	径 14.6 高 2.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	オ
86	円 上	鉢B型	口 径 14.4 器 高 2.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	5mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部は平底 湯船は丸い ア
87	円 上	鉢B型	口 径 14.4 器 高 2.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶灰色	2mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部は丸い 湯船は内方へ傾む カ
88	円 上	鉢B型	口 径 15.3 器 高 3.2	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	オ
89	円 上	鉢B型	口 径 14.7 器 高 2.4	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	ア
90	円 上	鉢B型	口 径 15.0 器 高	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	乳茶褐色	0.5mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	ア
91 (土加厚)	中盤 (土加厚)	鉢B型	口 径 14.6 器 高 2.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 ロ縁部ヨコナデ、体部ナデ	乳茶灰色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ア
92 (褐色土器)	-	-	口 径 16.9 器 高 7.2 底 径 8.0	外面 球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	黒灰色	0.1mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	断面方形の 高台脚部は 内傾する面 をもつ
93	円 上	-	口 径 15.6	外面 球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ	外 浅赤褐色 内 緩赤褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	断面方形の 高台脚部は 内傾する面 をもつ
94	円 上	-	口 径 15.6 器 高 6.0 底 径 7.0	外面 球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	黒灰色	著	良好	断面方形の 高台脚部は 内傾する面 をもつ
95	円 上	-	口 径 17.0 器 高 6.0 底 径 7.0	外面 球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ	黒灰色	2mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	断面方形の 高台脚部は 内傾する面 をもつ
96 (A器)	和泉A 1型	口 径 器 高 底 径	14.8 5.2 6.0	外面 球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みはハケナデのら平行縦状のヘ ラミガキ	外 乳灰色 内 浅灰色	0.5mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面逆三角形 の高台、 底部は丸い ア
97	円 上	和泉A 2型	口 径 15.0 器 高 5.6 底 径 5.6	外面 斜削頭、球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡茶灰色	粗良	良好	断面逆三角形 の高台、 底部は丸い ア
98	円 上	和泉A 2型	口 径 15.4 器 高 5.4 底 径 5.6	外面 斜方向のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	暗灰色	著	良好	断面逆三角形 の高台、 底部は丸い ア
99	円 上	和泉A 2型	口 径 15.8 器 高 6.0 底 径 5.0	外面 凹頭部 内面 球状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	浅灰褐色	0.5mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面逆三角形 の高台、 底部は丸い ア
100	円 上	和泉A 3型	口 径 15.0 器 高 5.6 底 径 4.8	外面 斜方向のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは組かい格子状のヘラミガキ	暗褐色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	断面逆三角形 の高台
101	円 上	和泉A 3型	口 径 14.8 器 高 5.0 底 径 2.4	外面 斜削頭、球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰黑色	粗良	良好	ア
102	円 上	和泉A 3型	口 径 15.3 器 高 5.2 底 径 5.6	外面 斜削頭、球状のヘラミガキ 内面 球状のヘラミガキ 見込みは斜立状のヘラミガキ	淡灰色	粗良	良好	ア

遺物番号	形 様	形式分類	法 量 (cm)	調 整	色 調	地 上	成 因	備 考
103	掩 灰	和泉A 3型	口 径 15.8 器 高 度 4.8 底 度 5.6	外表面 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	黒色	青	良好	ア
104	同 上	和泉A 3型	口 径 15.0 器 高 度 4.8 底 度 4.8	外表面 指揮面、螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	黒灰色	5mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ア
105	同 上	和泉A 3型	口 径 15.4 器 高 度 5.0 底 度 4.6	外表面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	ア
106	同 上	和泉A 3型	口 径 15.1 器 高 度 5.0 底 度 4.2	外表面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	黑色	青	良好	断面方形の 蓋台、端部 は丸い。
107	同 上	和泉A 3型	口 径 14.6 器 高 度 5.0 底 度 5.0	外表面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	イ
108	同 上	和泉A 3型	口 径 15.4 器 高 度 4.6 底 度 4.6	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ、指揮 面 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	ア
109	同 上	和泉A 4型	口 径 14.5 器 高 度 5.6 底 度 4.8	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面近三角 形の高台、 端部は丸い。 ア
110	同 上	和泉A 4型	口 径 15.8 器 高 度 5.4 底 度 5.6	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ、指揮 面 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	ア
111	同 上	和泉A 4型	口 径 15.4 器 高 度 5.4 底 度 5.4	外表面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	乳白色	3mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面近三角 形の高台、 端部はやや 尖る。イ
112	同 上	和泉A 4型	L1 径 16.0 器 高 度 5.6 底 度 5.6	外表面 指揮面、ほか堅重の為測定不明 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	ア
113	同 上	和泉A 4型	口 径 15.9 器 高 度 5.4 底 度 6.4	外表面 指揮面の丸丸丸のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	ア
114	同 上	和泉A 4型	口 径 14.6 器 高 度 4.8 底 度 4.4	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰色	褐色	良好	断面近三角 形の高台、 端部は内傾 する面をも
115	同 上	和泉A 4型	口 径 14.8 器 高 度 5.0 底 度 5.0	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	乳灰色~深灰 褐色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	ア
116	同 上	和泉A 4型	口 径 15.4 器 高 度 5.6 底 度 5.4	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰褐色~乳 白色	褐色	良好	ア
117	同 上	和泉A 4型	L1 径 15.4 器 高 度 4.8 底 度 5.0	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ、指揮 面 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	乳白色	0.5mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	ア
118	同 上	和泉A 4型	L1 径 15.4 器 高 度 5.0 底 度 4.8	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは螺旋状のヘラミガキ	乳灰茶色~墨 灰色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ア
119	同 上	和泉A 4型	口 径 14.7 器 高 度 5.0 底 度 5.2	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰褐色	褐色	良好	ア
120	同 上	和泉A 4型	L1 径 15.2 器 高 度 5.4 底 度 5.8	外表面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 内面 見込みは格子状のヘラミガキ	深灰褐色	褐色	良好	ア

遺物番号 回収番号	器種	形式分類	法 長 (cm)	調 査 記 述	色 調	精 良	燒 成	備 考
121 瓦	和泉A 4型	口 径 14.6 器 高 5.0 底 径 5.0	外側 内面	微須痕のち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	墨灰色～黒灰色	精良 (5mm の壁 1つ)	良好	高台は欠損 端部は丸い =エ
122 同 上	和泉A 4型	口 径 15.7 器 高 5.0 底 径 5.0	外側 内面	微須痕のち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	灰黑色	良	良好	ア
123 同 上	和泉A 4型	口 径 15.0	外側 内面	微須痕 螺旋状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	淡灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	高台は欠損 =エ
124 同 上	和泉A 4型	口 径 14.0	外側 内面	半脱胎の 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	1mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	高台は欠損 =エ
125 同 上	和泉A 4型	口 径 15.0	外側 内面	海綿痕のち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキと思わ れる	淡黑色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	高台は欠損 =エ
126 同 上	和泉A 4型	口 径 16.2	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ。指痕 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡灰色	精良	良好	高台は欠損 =エ
127 同 上	和泉B 1型	口 径 14.6 器 高 5.0 底 径 4.0	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ。指痕 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	0.5mm以下 の砂粒を微量 に含む	良好	断面力形の 高台、端部 は丸い=ア
128 同 上	和泉B 1型	口 径 15.4 器 高 5.0 底 径 5.0	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	1mm以下の 砂粒を少量 に含む	良好	断面二角形の 高台、端部 は丸い=イ
129 同 上	和泉B 1型	口 径 14.8 器 高 5.2 底 径 5.0	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	精良	良好	イ
130 同 上	和泉B 1型	口 径 14.8 器 高 4.8 底 径 3.6	外側 内面	螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	暗灰色	精良	良好	断面逆二角形の 高台、 端部は丸い =ウ
131 枕 瓦	和泉B 1型	口 径 14.8 器 高 5.4 底 径 3.6	外側 内面	ナデ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	精良	良好	ウ
132 同 上	和泉B 1型	口 径 14.6 器 高 5.1 底 径 3.4	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	精良	良好	ウ
133 同 上	和泉B 2型	口 径 14.6 器 高 5.2 底 径 3.2	外側 内面	螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	暗灰色	精良	良好	断面逆二角形の 高台、 端部は丸い =ア
134 同 上	和泉B 2型	口 径 15.1 器 高 5.6 底 径 4.8	外側 内面	螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	乳白色～黒灰色	精良	良好	断面逆二角形の 高台、 端部は外方 へ若干肥厚し、 丸い=イ
135 同 上	和泉B 3型	口 径 14.8 器 高 5.0 底 径 5.0	外側 内面	ナデのち螺旋状のヘラミガキ ハケナデのち螺旋状のヘラミガキ 見込みはハケナデのち斜格子状のヘ ラミガキ	淡灰色	精良	良好	内面にハケ ナデ有り、 断面逆二角形の 高台、 端部は丸い =ア
136 同 上	和泉B 3型	口 径 14.6 器 高 5.4 底 径 4.6	外側 内面	指痕痕のち螺旋状のヘラミガキ 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰褐色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面逆二角形の 高台、 端部は丸い =イ

遺物番号 通版番号	器種	形式分類	法 量 (cm)	調 査	色 調	新 上	成 成	備 考
137	瓶 (瓦瓶)	和泉B3型	口 径 14.5 器 高 4.8 底 径 4.6	外面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰色	3mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	イ
138	円 上	和泉B4型	口 径 15.0 器 高 5.2 底 径 5.2	外面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰色	3mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	断面三角 形の高台、 端部は丸い =ア
139	円 上	和泉B4型	口 径 16.0 器 高 5.2	外面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	墨灰色	0.5mm以下 の砂粒を微量 に含む	良好	高台は欠損 端部は丸い =イ
140	円 上	和泉B4型	口 径 14.8 器 高 5.6 底 径 5.4	外 面 摩耗の為調整不明 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは格子状のヘラミガキ	外 黒褐色 内 淡灰色	稍良	良好	断面三角 形の高台、 端部は丸い =ウ
141	円 上	和泉B4型	口 径 15.0 器 高 5.4 底 径 5.4	外面 螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰色	稍良	良好	断面方形の 高台、端部 は丸い=エ
142	円 上	和泉B4型	口 径 14.8 器 高 4.7 底 径 4.7	外面 摩耗の為調整不明 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	淡灰色	稍良	良好	ウ
143	円 上	和泉B4型	口 径 14.8 器 高 5.0 底 径 5.4	外面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは斜格子状のヘラミガキ	外 淡灰色 内 乳白色	0.5mm以下 の砂粒を微量 に含む	良好	断面三角 形の高台、 端部は丸い =オ
144	円 上	和泉C1型	口 径 15.2 器 高 6.0 底 径 5.0	外面 指頭痕のち螺旋状のヘラミガキ 内面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	断面三角 形の高台、 端部は丸い =ア
145	円 上	和泉C1型	口 径 14.6 —	外 面 指頭痕のち螺旋状のヘラミガキ 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキと見 われる	乳白色	稍良	良好	高台欠損、 端部は丸い =イ
146	円 上	和泉C1型	口 径 14.6 器 高 5.0 底 径 4.0	外 面 摩耗の為調整不明 内 面 ナデのち螺旋状のヘラミガキ	乳白色	稍良	良好	断面三角 形の高台、 端部は丸い =田ア
147	円 上	和泉C1型	口 径 15.2 器 高 5.0 底 径 4.6	外 面 斜傾痕 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	灰黑色 外側底部 黄色	密	良好	断面方形の 高台、端部 は丸い=乙
148	円 上	和泉C1型	口 径 14.8 器 高 5.0 底 径 4.8	外 面 斜傾痕のち螺旋状のヘラミガキ 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	乙ア
149	円 上	和泉C1型	口 径 14.5 器 高 5.0 底 径 4.6	外 面 斜傾痕のち螺旋状のヘラミガキ 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	外 増殖色 内 灰色 底 黄褐色	密	良好	断面三角 形の高台、 端部は内側 する面をもつ=田ウ
150	円 上	和泉C1型	口 径 14.7 器 高 5.4 底 径 4.6	外 面 摩耗の為調整不明 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	断面三角 形の高台、 端部は内方 へ肥厚する =田カ
151	瓶 (瓦瓶)	和泉C1型	口 径 14.8 器 高 5.2 底 径 4.4	外 面 指頭痕 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	淡灰色	稍良	良好	乙ア
152	円 上	和泉C1型	口 径 15.4 器 高 5.0 底 径 4.4	外 面 摩耗の為調整不明 内 面 螺旋状のヘラミガキ 見込みは平行縦状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	断面三角 形の高台、 端部は内方 へ肥厚する =田ウ

遺物番号 国故番号	器種	形式分類	法 規 (cm)	調 査	色 調	胎 土	機械	備 考
153 (瓦 24)	輪	和泉 C 1 型	口 径 14.8 器 高 6.0 底 径 6.0	外側 摩耗の為調整不明 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	外 乳白色～ 内面 陶色 底部 黒褐色	精良	良好	断面方形の 高台、端部 は丸い＝II 工
154	同 上	和泉 C 1 型	口 径 15.4 器 高 5.2 底 径 5.4	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	暗灰色 底 黄褐色	青	良好	断面方形の 高台、端部 は丸い＝I 工
155	同 上	和泉 C 1 型	口 径 14.8 器 高 5.6 底 径 4.2	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	灰褐色	青	良好	断面方形の 高台、端部 は内傾する 凹面をもつ ＝IIイ
156	同 上	和泉 C 1 型	口 径 15.6 器 高 5.4 底 径 4.8	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	黑灰色	青	良好	Iア
157	同 上	和泉 C 2 型	口 径 14.4 器 高 5.0 底 径 4.8	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	灰黄色～灰黑色	青	良好	断面方形の 高台、端部 は丸い＝I ア
158	同 上	和泉 C 2 型	口 径 15.0 器 高 5.4	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	黑灰色	青	良好	断面近三角 形の高台、 端部は丸い ＝IIイ
159	同 上	和泉 C 2 型	口 径 15.4 器 高 5.0 底 径 4.8	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	Iイ
160	同 上	和泉 C 2 型	口 径 15.0 器 高 5.2 底 径 5.0	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	Iイ
161	同 上	和泉 C 2 型	口 径 15.2 器 高 5.4 底 径 5.0	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	灰黑色 底 黄褐色	青	良好	Iイ
162	同 上	和泉 C 2 型	口 径 15.4 器 高 5.4 底 径 5.0	外側 指痕の為調整不明 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ	乳白色～淡 黄褐色	0.5mm以下 の砂粒を量 に含む	良好	断面近正形 の高台、端 部は丸い
163	同 上	和泉 C 2 型	口 径 13.0	外側 ナデ 内面 ナデ	乳灰色	3mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	高台丸欠、 端部は丸い
164	同 上	大和 A 1 型	L1 径 15.1 器 高 6.0 底 径 4.0	外側 横旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	淡黒褐色	精良	良好	断面近正形 の高台、端 部は内傾す る凹面をも つ＝I
165	同 上	大和 A 1 型	口 径 15.0 器 高 5.6 底 径 4.6	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	暗灰色	青	良好	ア
166	同 上	大和 A 1 型	L1 径 14.7 器 高 5.2 底 径 5.4	外側 横旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	黑灰色	青	良好	断面近正形 の高台、端 部は内傾す る凹面をも つ＝I
167	同 上	大和 A 1 型	口 径 15.0 器 高 5.8 底 径 4.6	外側 亂方向のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	ア
168	同 上	大和 A 1 型	口 径 15.8 器 高 5.8 底 径 4.2	外側 亂方向のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	ア
169	同 上	大和 A 1 型	口 径 15.2 器 高 5.2 底 径 4.6	外側 指痕のち縦旋状のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	イ
170	同 上	大和 A 1 型	口 径 15.4 器 高 5.0 底 径 4.6	外側 指痕のち乱方向のヘラミガキ 内面 横旋状のヘラミガキ 見込みは連続輪状のヘラミガキ	灰黑色	青	良好	イ

遺物番号 団体名	器種	形式分類	法量 (cm)	調査	色調	胎土	焼成	備考
171 (五 鋼)	網		口 径 14.3 器 高 5.4 底 径 4.6	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	外 淡黒灰色 内 淡灰色	精良	良好	イ
172	网 上		口 径 14.4 器 高 5.4 底 径 5.0	外側 亂方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰灰色	2 mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	外側にヘラ ミガキなし 断面方形の 高台、端部 は内傾する 凹面をもつ =ア
173	网 上		口 径 14.5 器 高 4.8 底 径 5.8	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	暗灰色	密	良好	断面連三角 形の高台、 端部は丸い =イ
174	网 上		口 径 14.6 器 高 5.0 底 径 5.0	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黑灰色	密	良好	断面方形の 高台、端部 は内傾する 凹面をもつ =ウ
175	网 上		口 径 14.7 器 高 5.6 底 径 5.2	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	1 mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	ウ
176	网 上		口 径 14.8 器 高 5.0 底 径 4.4	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黑灰色	密	良好	断面連三角 形の高台、 端部は内傾する 凹面をもつ =エ
177	网 上		口 径 14.8 器 高 5.4 底 径 5.2	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黑灰色	密	良好	エ
178	网 上		口 径 14.8 器 高 5.4 底 径 5.2	外側 指痕痕のち乱方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	密	良好	ウ
179	网 上		口 径 15.4 器 高 5.0 底 径 5.8	外側 指痕痕のち織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	1.5 mm以下の 砂粒を少 量含む	良好	エ
180	网 上		口 径 14.3 器 高 5.6 底 径 4.8	外側 指痕痕のち織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	精良	良好	エ
181	网 上		口 径 14.5 器 高 5.4 底 径 5.0	外側 亂方向のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	精良	良好	ウ
182	网 上		口 径 14.6 器 高 5.0 底 径 4.2	織縫状のヘラミガキ 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	密	良好	ウ
183	网 上		口 径 14.6 器 高 5.6 底 径 5.0	外側 織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黑灰色	密	良好	エ
184	网 上		口 径 14.7 器 高 5.2 底 径 5.4	外側 指痕痕のち織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	エ
185	网 上		口 径 14.7 器 高 5.2 底 径 5.6	外側 織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	田灰色	密	良好	エ
186	网 上		口 径 14.8 器 高 5.8 底 径 5.0	外側 織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	灰黑色	密	良好	エ
187	网 上		口 径 14.8 器 高 5.4 底 径 5.4	外側 指痕痕のち織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黑灰色	密	良好	エ
188	网 上		口 径 15.0 器 高 5.2 底 径 5.2	外側 指痕痕のち織縫状のヘラミガキ 内側 織縫状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	密	良好	エ

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	内観	色調	胎土	焼成	備考
189 (丸筒)	筒	大和A2型	口径 15.0 器高 5.0 底径 5.0	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	暗褐色	密	良好	エ
190	同 上	大和A2型	口径 15.2 器高 5.6 底径 5.4	外面 指掘痕のち乱方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	暗黒灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	エ
191	同 上	大和B型	口径 15.2 器高 5.6 底径 5.0	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	無灰色	1.5mm以下の砂粒を微量に含む	良好	断面連三角形の高台、輪部は内傾する凹面をもつ=ア
192	同 上	大和B型	口径 15.2 器高 5.2 底径 4.8	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黒灰色	密	良好	断面連三角形の高台、輪部は内傾する凹面をもつ=イ
193	同 上	大和B型	口径 14.6 器高 5.0 底径 4.4	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	外淡灰色 内淡灰色	密	良好	ア
194	同 上	大和B型	口径 14.8 器高 5.2 底径 4.4	外面 球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黒灰色	密	良好	ア
195	同 上	大和B型	口径 14.9 器高 5.2 底径 5.0	外面 球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰色	稍良	良好	ア
196	同 上	大和B型	口径 15.0 器高 5.2 底径 5.2	外面 球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黒灰色	密	良好	ア
197	同 上	大和B型	口径 15.2 器高 5.4 底径 4.8	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡黒灰色	稍良	良好	ア
198	同 上	大和B型	口径 15.2 器高 5.4 底径 4.8	外面 球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	灰褐色	密	良好	ア
199	同 上	大和B型	口径 14.4 器高 5.4 底径 5.8	外面 亂方向のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	黒灰色	密	良好	ア
200	同 上	大和B型	口径 14.8 器高 5.6 底径 4.8	外面 指掘痕のち球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	外淡褐色 内淡褐色 —無灰色	稍良	良好	ア
201	同 上	大和B型	口径 15.1 器高 5.2 底径 4.6	外面 指掘痕のちヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡黒褐色	密	良好	ア
202	同 上	大和B型	口径 15.6 器高 5.6 底径 4.5	外面 指掘痕のち球旋状のヘラミガキ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みは連結輪状のヘラミガキ	墨灰色	密	良好	ア
203	同 上	和泉B型	口径 9.4 器高 2.2	外面 球旋状のヘラミガキのち平行縞ヘラ 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みはヘラミガキ	乳灰色	0.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	外間にヘラミガキ有り 輪部は丸い=ア
204	同 上	和泉B型	口径 8.6	外面 指掘痕 内部 球旋状のヘラミガキ 見込みはヘラミガキ	乳灰褐色	0.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	外間にヘラミガキなし 輪部は丸い=イ
205	同 上	和泉B型	口径 5.6	外面 ナデ 内部 見込みは連結輪状のヘラミガキ	淡灰黑色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	イ
206	同 上	和泉D型	口径 9.2 器高 1.8	外面 ナデ 内部 見込みはシザゲダ状のヘラミガキ	乳灰色	稍良	良好	外間にヘラミガキなし 輪部は内方に若干肥厚する=ア

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	調査	色調	胎土	焼成	備考
207 (丸)	和泉D型	口 径 9.6 器 高 2.0	外側 平行錐状のヘラミガキ 内面 見込みはジグザグ状のヘラミガキ	外 銀灰色 内 灰色	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	表面にヘラ ミガキ有り 端部は丸い =イ	
208	同 上	和泉D型	口 径 9.4 器 高 2.0	外側 ナデ 内面 見込みはジグザグ状のヘラミガキ	乳灰褐色~乳 黒灰色	0.5mm以 上の砂粒を微 量に含む	良好	ア
209	同 上	和泉C型	口 径 8.8 器 高 1.8	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは平行錐状のヘラミガキ	淡灰褐色	1mm以下 の砂粒を微量 に含む	良好	表面にヘラ ミガキなし 端部は丸い =ア
210	同 上	和泉C型	口 径 9.6 器 高 5.5 底 径 5.4	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは平行錐状のヘラミガキ	淡灰褐色	精良	良好	ア
211	同 上	和泉C型	口 径 10.0	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは平行錐状のヘラミガキ	淡灰褐色	精良	良好	表面にヘラ ミガキ有り 端部は丸い =イ
212	同 上	和泉E型	口 径 8.3 器 高 2.0	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	乳茶褐色~淡 灰褐色	1mm以下 の砂粒を微量 に含む	良好	表面にヘラ ミガキなし =ア
213	同 上	和泉E型	口 径 9.0 器 高 2.2	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	乳灰褐色	3mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	ア
214	同 上	和泉E型	口 径 10.0 器 高 2.8	外側 横錐状のヘラミガキ 内面 横錐状のヘラミガキ 見込みは放射状のヘラミガキ	淡灰褐色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	イ
215	同 上	和泉F型	口 径 9.4 器 高 2.1	外側 ナデ 内面 塵毛の為調査不明	淡灰褐色	精良	良好	外表面にヘ ラミガキな し=ア
216	同 上	和泉F型	口 径 11.0 器 高 2.4	外側 摩耗の為調査不明 内面 横錐状のヘラミガキ	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色 ~乳灰褐色	0.5mm以 上の砂粒を微 量に含む	良好	外表面にヘ ラミガキな し=イ
217	同 上	和泉F型	口 径 8.4 器 高	外側 塵毛の為調査不明 内面 塵毛の為調査不明	乳灰褐色	0.5mm以 下の砂粒を微 量に含む	良好	ア
218	同 上	和泉F型	口 径 10.0 器 高	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ	灰白色~淡灰 褐色	0.5mm以 下の砂粒を少 量含む	良好	イ
219	同 上	和泉F型	口 径 12.0 器 高 3.0	外側 ナデ 内面 横錐状のヘラミガキ	淡灰褐色	2mm以下の 砂粒を微量 に含む	良好	イ

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	調査	色調	胎土	焼成	備考
220 (深底窓)			口 径 30.8	外側 回転ナデ、下位に不定方向のナデ 内面 回転ナデ、下位に不定方向のナデ	灰褐色	8mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	
221	同 上		口 径 30.5 器 高 10.6 底 径 10.5	外側 回転ナデ、底部ナデ(未切り残る) 内面 回転ナデ	灰褐色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	
222	同 上		口 径 31.7 器 高 11.2 底 径 13.4	外側 回転ナデ、底部ナデ(未切り残る) 内面 回転ナデ	淡青灰褐色	2mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	

遺物番号 （図版番号）	器種	形式分類	法量 (cm)	調査	色調	地土	成形	備考
223	羽釜 (上倒置)		口 径 23.6 脚 径 26.6	外面 口縁部・脚ヨコナデ、体部ヘラナデ 内面 ヘラナデ	乳茶色	0.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	焼付着
224	円上		口 径 24.4 脚 径 28.2	外面 ヨコナデ、頸部に指痕痕 内面 口縁部ヨコナデ、仙ナデ	外 淡灰茶色 内 褐茶褐色 ～淡灰茶色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
225	円上		口 径 27.0 脚 径 31.6	外面 口縫と調開ナデ（ヘラケズリ・指痕 え残る）、仙ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ	淡灰褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	焼付着
226	円上		口 径 22.2 脚 径 28.4	外面 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	淡茶褐色	7mm以下の砂粒を少量含む	良好	
227	円上		口 径 22.8 脚 径 28.6	外面 体部ヘラケズリ後ヘラナデ、仙ヨコ ナデ 内面 口縫跡ヨコナデ、体部ヘラナデ	淡茶色	1.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	焼付着
228	円上		口 径 23.7 脚 径 28.4	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ、頸部痕 裏剥 内面 口縫跡ヨコナデ、体部ヘラナデ	褐茶色	1.5mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
229	円上		口 径 25.6 脚 径 34.4	外面 口縫と調開ヘラケズリ後ヘラナデ、 仙ヨコナデ後ヘラケズリ、仙ヨコナデ 内面 ヘラナデ	褐茶色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	焼付着
230	円上		口 径 28.0 脚 径 37.0	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、体部ヘラナデ	淡茶褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
231	円上		口 径 38.2 脚 径 33.4	外面 ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、体部ヘラナデ	外 淡褐色 内 淡褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	焼付着
232	円上		口 径 28.4 脚 径 37.6	外面 口縫と調開ナデ、体部ヘラケズリ。 他ヨコナデ 内面 ヨコナデ	淡褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	焼付着
233	円上		口 径 38.5 脚 径 29.0	外面 ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、仙ヘラナデ	淡茶褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	
234	円上		口 径 30.8 脚 径 37.6	外面 ヨコナデ 内面 ヘラナデ	淡茶褐色	4mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
235	円上		口 径 31.0 脚 径 41.2	外面 口縫部と調開ナデ、他ヨコナデ 内面 ナデ	淡茶色	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	体部欠損後 断面を研いでいる
236	円上		口 径 32.0	外面 ヨコナデ 内面 ナデ	褐茶色	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	
237	円上		口 径 32.2 脚 径 40.4	外面 口縫部と調開ナデ、仙ヨコナデ 内面 ナデ	淡褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	焼付着 開 先端に1条の沈殿
238	円上		口 径 27.4 脚 径 33.0	外面 口縫部と調開ナデ。仙ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、体部ナデ	外 淡褐色 内 淡茶褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	焼付着
239	円上		口 径 28.2 脚 径 33.0	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ 内面 ヘラナデ	淡茶褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
240	円上		口 径 28.8 脚 径 37.6	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ 内面 ヘラナデ	淡茶褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
241	円上		口 径 30.4 脚 径 37.8	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、体部ナデ	淡茶色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	焼付着
242	円上		口 径 33.8 脚 径 41.6	外面 口縫と脚の間ヘラケズリ、体部ナデ、 仙ヨコナデ 内面 ヘラナデ	淡茶褐色～淡 茶褐色	6mm以下の砂粒を多量に含む	良好	
243	円上		口 径 29.4 脚 径 36.8	外面 体部ヘラナデ、仙ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ、体部ヘラナデ	淡茶褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	調	色調	胎土	焼成	備考
244	羽輪 (土師器)		口 径 20.8 脚 高 36.4	外面 リコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、全体ハラナデ	深茶色	1mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	調	色調	胎土	焼成	備考
245	盃 (土師陶器)	—	口 径 10.6 器 高 21.6 底 径 9.7	外面 耳指ナデ、他回転ナデ 内面 回転ナデ	暗 オリーブ 色 素地 黄褐色	密	良好	残存2/3

遺物番号 図版番号	器種	形式分類	法量 (cm)	調	色調	胎土	焼成	備考
246	楕円 (土師陶器)	—	口 径 10.0 器 高 4.7 底 径 4.5	外面 回転ナデ、花文 内面 同転ナデ	乳青色(文様 青紺色)	密	良好	残存2/3
247	同上		口 径 13.0 器 高 7.4 底 径 6.5	外面 同転ナデ・花文・高台筋に圓線3条 内面 回転ナデ	乳青色	密	良好	残存1/2
248	同上	—	口 径 16.2 器 高 8.6 底 径 6.8	外面 回転ナデ・底面・高台筋に圓線1条 内面 回転ナデ・岩と家原の文様・口縁端 部布巾と底面外に圓線2条	乳青色	密	良好	残存2/3

第9章 まとめ

芝塚古墳調査成果については前章で詳細に説明したとおりである。ここではこれらの調査成果で得られた資料についてもう一度要点を絞り、簡条書にしてまとめた。

1. 芝塚古墳が築造された時期や使用されていた時期について、築造された時期は石室の形態、石室内で検出した石棺や遺物から判断することができた。遺物は奥壁付近に副葬品として埋納されていた須恵器の形態的な特徴から6世紀後半ごろに造営され、奥棺（石棺I）を安置したのであろう。残る手前の2基の石棺（石棺II・III）については、石棺Iを安置した後に追葬された。西側の石棺IIには7世紀前半に比定される遺物が置かれ、東側の石棺IIIには7世紀中葉に比定される遺物が置かれていた。この置かれていた遺物をみると、最終的に7世紀中葉までこの古墳が使用されていたことが判明した。
2. 副葬品については、玄室内からほぼ原位置に近い状態で出土したが奥壁付近で検出した土器内には東袖の角付近（石棺IIIの底石）から出土した土器の破片と一致するものがあり、石棺を追葬する際に副葬品を奥壁付近へ移動したことが明らかになった。
3. 石室内に3つの石棺が納められている事例については、大阪府下ではこの時期のものとしては初めてである。近畿では奈良県桜井市の孤塚古墳について2例目である。が、芝塚古墳の石棺はほぼ完全な形で検出しておらず、石棺を研究する上で非常に貴重な資料が得られた。
4. 石棺の使用された石材及び産出地については、第5章で述べているように石棺Iが兵庫県高砂市竜山付近の流紋岩質凝灰岩（通称竜山石）、石棺II・石棺IIIが大阪府太子町の二上山牡丹洞付近で採取される流紋岩火山礫凝灰岩の石材が持ち込まれていることが分析の結果、明らかになった。また石棺IIの石棺材には二上山でも若干採取される場所が異なる石材が含まれていることが判明した。
5. 組み合った石棺については、石棺Iの底石は小口側の端の底石は棺身と合うようにカットせず、はみ出したままである。また石棺II・IIIの石棺の蓋石は別々の石棺材を寄せ集めて組み立てたことがわかった。
6. 石棺の上部（約1mほどの土砂が埋まった上面）から平安時代後期～鎌倉時代前期に比定される土器が多量に出土しており、生活または倉庫などして再利用されていたと考えられるが、詳細なことは不明である。また、出土した土器は人半が瓦器楕で個体数にして約200個を数える。形式では和泉型と大和型があり、6:4の割合で含まれていた。
7. 芝塚古墳の埋葬順序と仮説について、安置された三棺の順序については調査成果でも述べているとおりである。しかし、何故、三棺の石棺を安置しなければならなかつたのか。複数を埋葬しているのは、この時期の古墳では普遍的にみられる。平均的には三～五体の被葬者

埋葬されている。多いもので大阪府大藏古墳の11体以上、山畠古墳の8体の埋葬が確認されている。これらは後の追葬者であり、非常に多い。

芝塚古墳では、埋葬施設の設計として二棺を安置するスペースを確保した築造であった。それは調査で確認した床面の敷石の配列にみられる。石棺を安置する場所には敷石が敷かれていなかった。石棺I（奥棺）と石棺II（前棺西）の間を仕切る石列と東側に通路としてあけた空間部分には敷石が敷かれている。石棺III（前棺東）の下には敷石が置かれており、土器片（副葬品の一部）もその下から出土している。奥壁に置かれていた土器（副葬品）と一致する破片であった。この石棺を設置する時には東袖付近に置かれていたことがわかる。副葬品は石棺IIIを安置する際、石棺Iと奥壁の間に移動したことが判明した。

8. 副葬品について、石棺内には後世（平安時代末以前）の盗掘者により荒されており、その時に石棺の蓋を開放又は破壊し、副葬品を持ち出したのであろう。しかし、石室の床面に置かれていた土器類・鉄製品等は、現位置のままで遺存しており、メインと思われる金銅製品・石製品・玉類などを主に盗んだものと思われる。

辛うじて残ったものの一つに刀装具がある。この刀装具は大小1刀ずつの鉄製の直刀で、その刀の柄頭・鐔などに象嵌文様が施してあった。この象嵌技法は5世紀中頃から朝鮮半島の大陸文化より伝播したものであることは「古墳時代の副葬品（象嵌遺物）」の研究者達によって明らかにされている。象嵌刀装具の編年をされた西山氏によれば、芝塚古墳の象嵌遺物は6世紀後半に位置づけられるものと考えられ、築造した芝塚古墳の時期と一致する。その理由として、伝播した際の文様より、退化・簡略化した文様になっている。例えば鳳凰などの文様がハート形（心葉形）となり、もとの形の意味がわからなくなっている。この時期は量産が必要、また国内で製作されるようになったこともその理由であろう。

しかし、象嵌技法を施した副葬品がある古墳の数は数える程であり、芝塚古墳の第1被葬者を考える上で、有力豪族のなかでも特筆的な人物を埋葬したものと思われる。

9. 棺内に遺存した遺骸について、石棺内には被葬者のものと考えられる遺骸が微量に遺存していた。遺骸にはほとんど土質化していた状況であり、骨格などは明瞭にできなかつたが、石棺IIIの棺内に土質化した顎に歯の一部が良好な状態で遺存していた。その歯を鑑定した結果、歯は乳歯で、その歯はあまりすり減った痕跡がみられないことから6～7才児までのものであることが判明した。このデータにより石棺IIIに埋葬された人物象は幼児ということになる。

10. 石棺IIIの追葬について、以下のような仮説を立ててみた。埋葬は当初二棺を安置する墳墓として築造したものであったが、親族ないしは氏族に關係の深い幼児が急死したことにより、あえてその墳墓に安置したのか。それとも新たな墳墓を築造する力がなくなり、仕方なく安

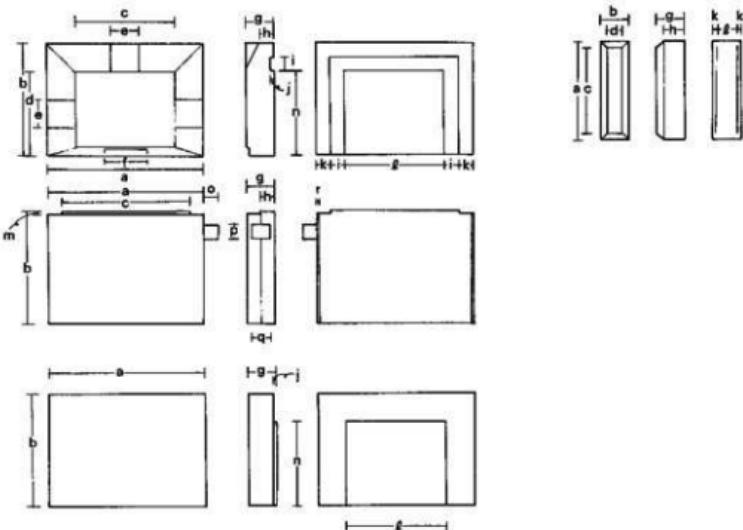
置したものであろうか。また、追葬された時期から考えると石棺Ⅲ付近に置かれていた土器の時期から7世紀中葉になり、木田氏（註1）が論証した「三骨一廟」の埋葬形態を真似たものか。などが想定される。

11. 被葬者の氏族について、物部氏・玉造氏・高安氏・秦氏などがあげられる。まず物部氏であるが河内地方において勢力があったことは史料や地名に残っている。が、文献では「蘇我氏と争いで物部氏は6世紀後半に敗れた」と記載されており、芝塚古墳の第1被葬者（石棺I）とは時期的一致するものの、その後に追葬された被葬者については7世紀以後のものであり、時期的に一致しない。それでは被葬者に近い氏族を考えると、芝塚古墳の付近に玉造遺跡の存在することから玉造氏の説、周辺に残る地名や韓式系土器が出土した古墳があることから、高安氏などの渡来系氏族とする説である。また芝塚古墳の北西側に位置する秦氏の心合寺跡がある。この廃寺跡は京都太秦広隆寺の『広隆寺寺弁別院記』に記載されている「河内秦氏又秦興寺或薬師寺云流記等不明云々」であり、心合寺山古墳の西にあったと推定されている心合寺跡がこの秦興寺にあたるのではないかといわれており、これが事実であれば秦氏一族の氏寺と考えられる。また、心合寺跡の南には教興寺跡があり、これも秦川勝の建立と伝えた秦寺といったともいわれている。このことから想定すると高安地域では秦氏の勢力が強かったと思われ、芝塚古墳の被葬者が秦氏の一族の可能性も考えられる。が、明確にはいえないことであり、今後、周辺古墳の調査成果の増加により明らかになるものと確信する。
 12. 最後に、近年DNAによる分析が九州の吉野ヶ里遺跡などで徐々に行われている。DNA分析は発掘調査で検出した墓の主体部に残っている遺骸を分析し、その被葬者がどのような環境化であったが、またどこから来た民族などのなどを解明することにより、どのような人物像であったが浮かびあがってくる。それにより、その当時の社会情勢化に置かれていた被葬者の人物像を知る一つの手がかりとなる。今後、芝塚古墳の被葬者についての分析ができるようになれば、どのような氏族一族かが判明できるであろう。
- なお、この報告書作成にあたり、以下の方々には色々とご協力・ご指導になりました。八尾市教育委員会文化財課米田敏幸主査・奈良大学文化財学科西山要一助教授・八尾市立曙川小学校奥田尚教諭・徳島大学教授・八尾市立歴史民俗資料館安井良三館長他、大阪府教育委員会・その他関係機関や地元人の協力により、刊行することができました。ここに感謝とお礼に返させていただきます。

註

註1 米田敏幸「三骨一廟式の一例について」『日本に瀕ける社会と宗教』1991

第4章の第4次項目のアルファベットは下図に示す部位の位置を表す。



指 示 書

八戸市文書ノゾミ
昭和3年 6月6日

大地震ニヘイハセキ免縫綱地図表示書

(株)八戸市文化財調査研究会

理事長 福島 本 肇

連絡名、機関 高宮吉典
申請者 八戸市役所、山陽住友
申請地 八戸市神立2丁目地内

現状 田畠地。
目的 通路
工事面積 500 m²
測定表示面積 別途算出 250 m²

仕様書

監督 主管係担当課 通路工務2係 (内340)

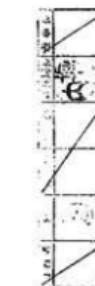
下記申請地の先頭文化財の免縫綱地図については、(株)八戸市文化財調査研究会において実施されることが適当と判断されますので、申請者と協定の上
測定を実施して下さい。

記 古城

連絡名、機関 高宮吉典
申請者 八戸市役所、山陽住友
申請地 八戸市神立2丁目地内
現状 田畠地。
目的 通路
工事面積 500 m²
測定表示面積 別途算出 250 m²

仕様書

監督 主管係担当課 通路工務2係 (内340)



免縫綱地図に付した紙面

測定地 神立2丁目地内
測定範囲 地図の上決定
測定目的 土木工事によって被覆が予想される自走地について、道路、建物
の在位置を把握し、保存のための記録を作成する。
測定方法 免縫綱地図は、手振りにより実施する。測定の実施にあたっては、
下記の2段にわたる免縫綱地図が必要である。
測定1. 石室構造および既存地図を確認し、測定2を実施するための基
礎資料を作成する。
測定2. 全面地図により既存の敷地および石室内を観察し、石室の位置
や状況を記録する。
測定結果の作成にあたっては、写真撮影および実測値の作成を実施する。
測定中重要な遺跡、建物を検出した場合は、ただちに報告をおこない、保
存とその他の調査方法について協議する。
測定終了後は、測定記録、出土遺物を整理し、調査報告を作成する。

備考 測定1と測定2は、兩用を以てして実施する予定であるが、測定
1の結果、状況によって可能であるならば、測定2へ移行すること
がありうる。



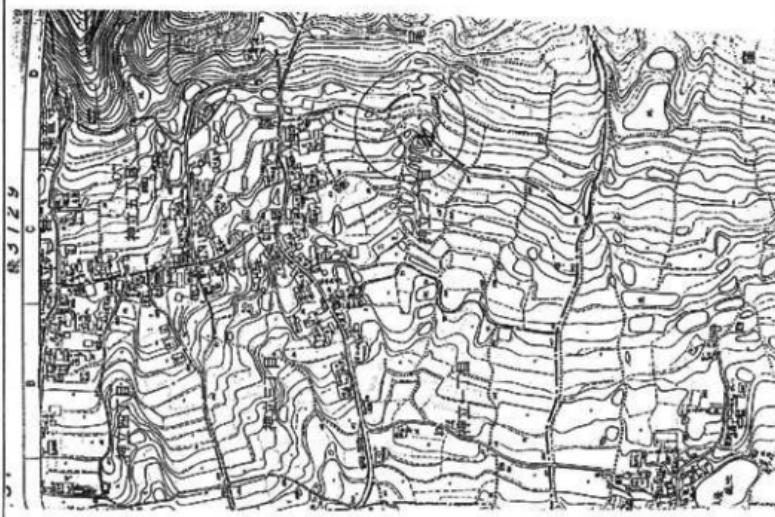
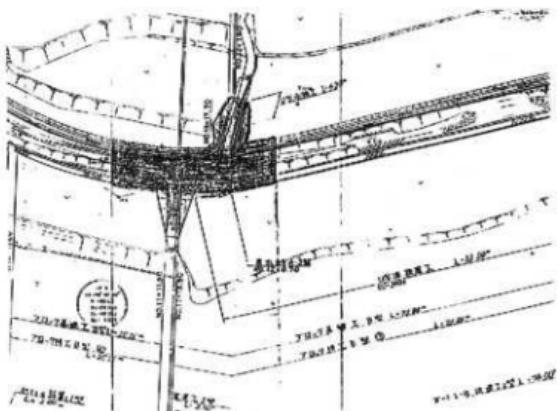


図 版



高安古墳群全景(上空から)



石室完掘状況(南西から)



石室状況(南西横から)



玄室床面状況(南西から)



玄室床面状況(北東から)



第1次調査の石室調査状況(南西から)



石室上面状況(南西から)



石室奥の上面状況(南西から)



石室玄門付近の上面状況(北東から)



石棺検出状況（南西から）



石棺検出状況（南西横から）



石棺配置状況(南西横から)



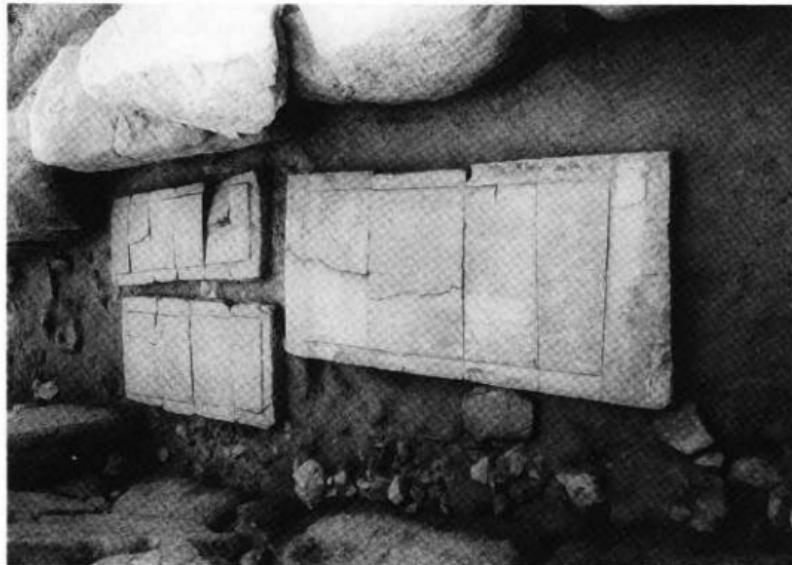
石棺内完掘状況(南西から)



石棺内完掘状況(南西横から)



石棺の底石配置状況(南西から)



石棺の底石状況(南西から)



石棺I底石状況(南東から)



石棺II・石棺III底石状況(南西から)



石棺I内遺物検出状況(南東から)



石棺II・石棺III遺物検出状況(南西から)



石棺III遺物検出状況(南東から)



石棺 I 遺物状況(南東から)



石棺 II 器台片検出状況(南西から)



石棺III遺骸検出状況(北西から)



石棺I 東側床面直刀検出状況(南東から)



石室奥の東側遺物検出状況(南西から)



石室奥の西側遺物検出状況(北東から)



石棺Ⅲ東床面検出遺物状況(北東から)



石棺Ⅰ東床面検出遺物及び封石状況(北西から)



芝塚古墳埋め戻し後の新設道路状況(南から)



芝塚古墳の石碑(南から)



S 1



S 3



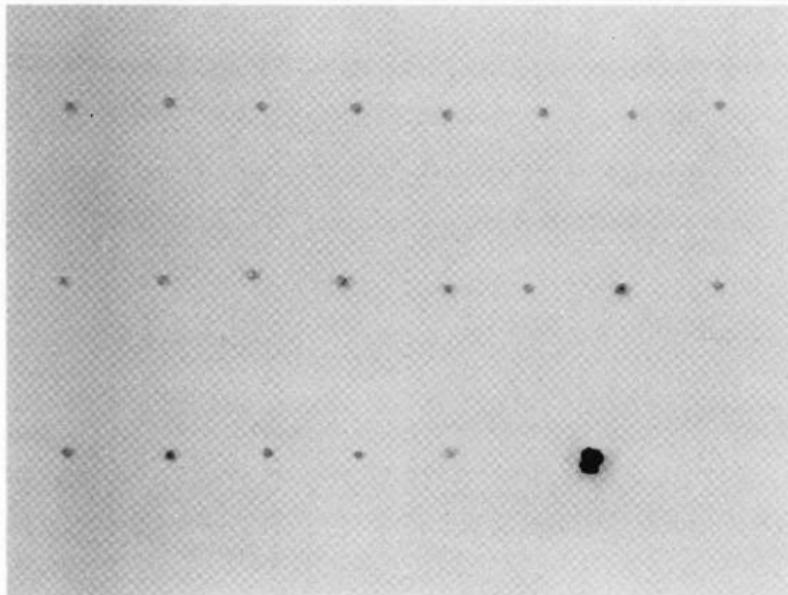
S 2



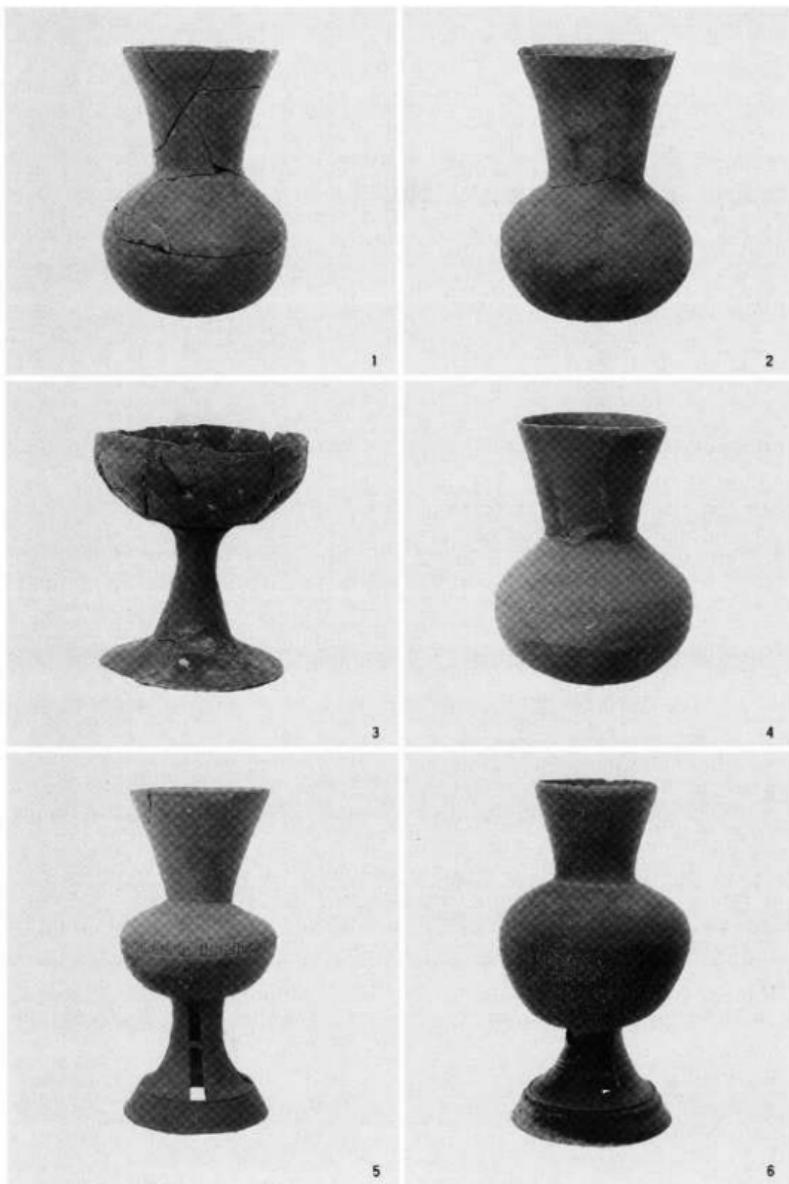
S 4



S 5



石棺内遺物



石室内遺物 1 土師器 1~4・須恵器 5・6



7



8



9



12



13



10



11



14

石室內遺物 2 須惠器 7~14



15



16



17



18



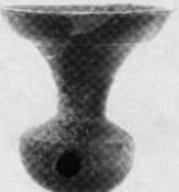
19



20



21



22



23



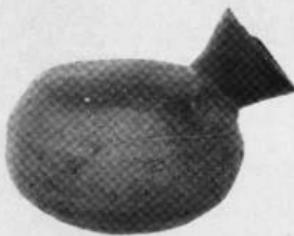
24



25

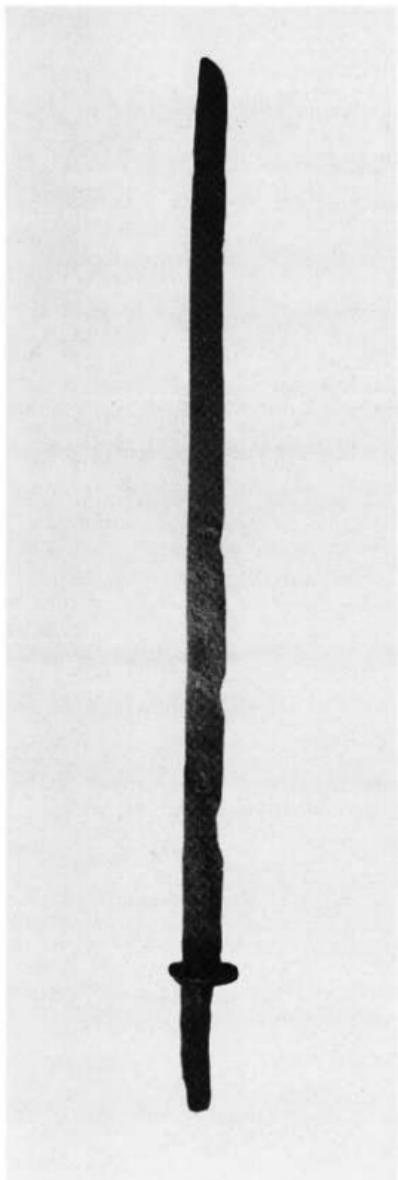


26

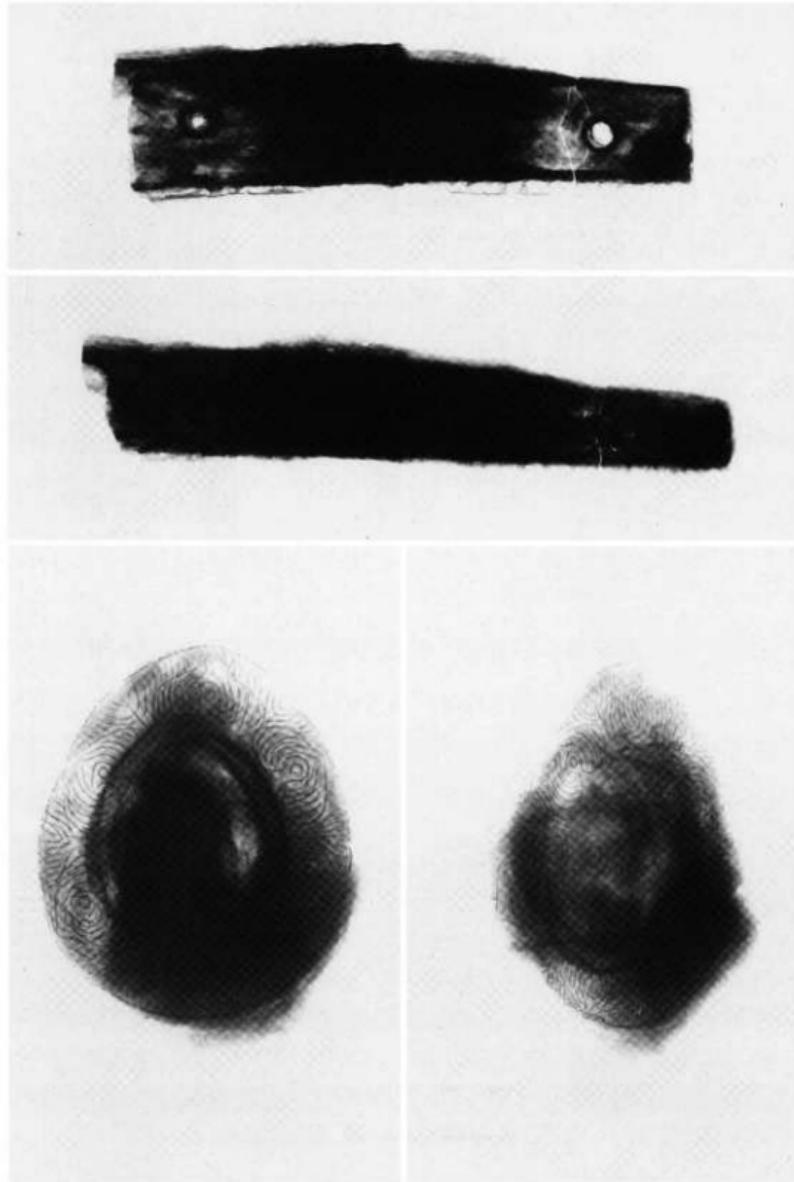


27

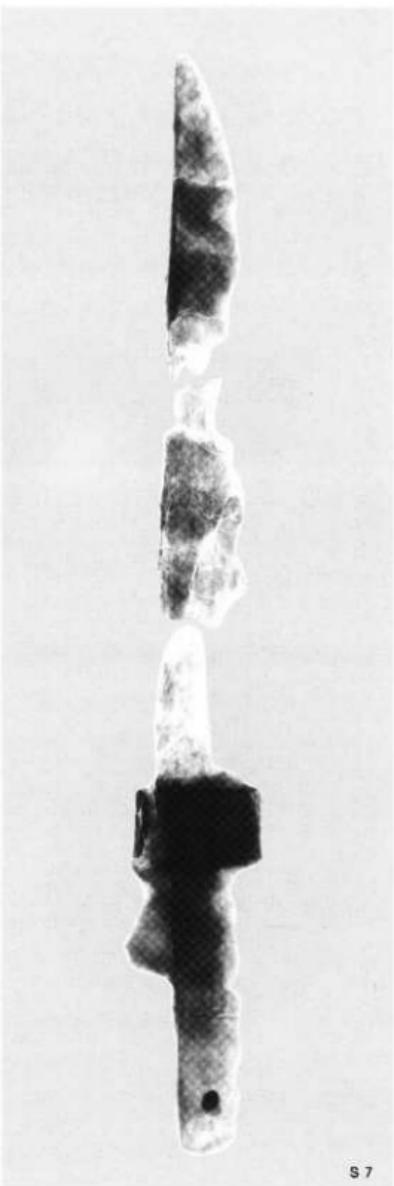
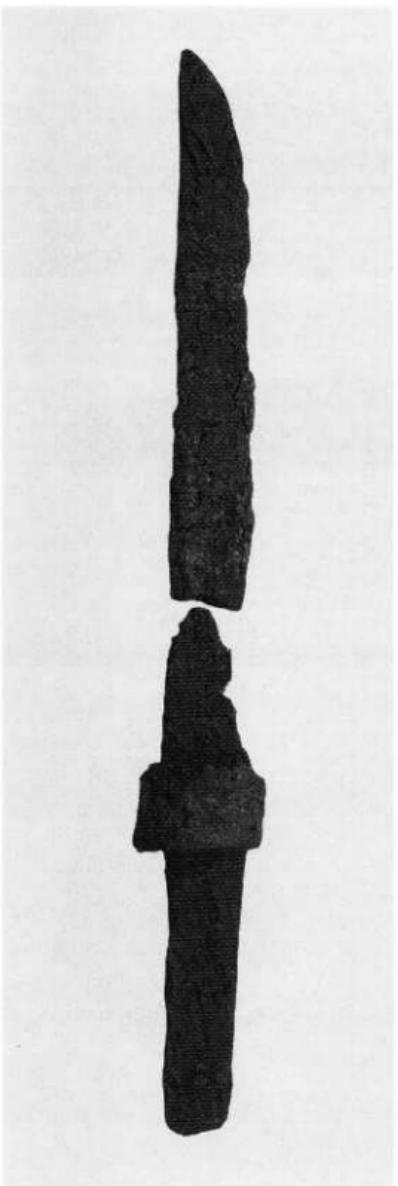
石室內遺物 4 須恵器 23~27



石室內遺物 5 直刀



石室内遺物 7 直刀の柄・鐔



S 7

石室内遺物 8 直刀(小)



S 8



S 8 X線写真

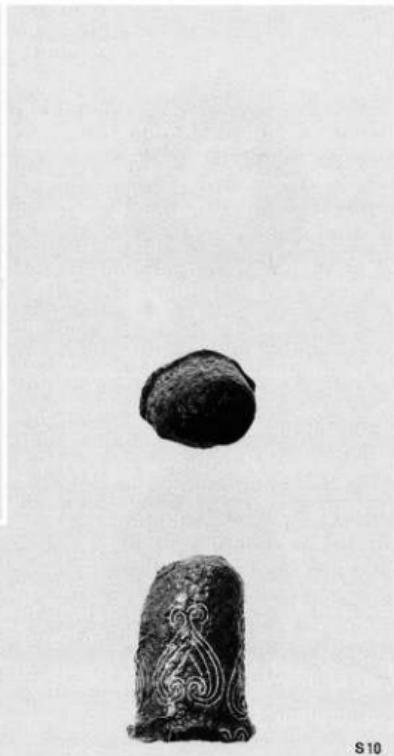


S 9

石室内遺物 9 直刀の柄頭



S9 X線写真



S10



S10X線写真

石室内遺物10 直刀の鐔・柄頭



S11



S11X線写真



S12



S12X線写真

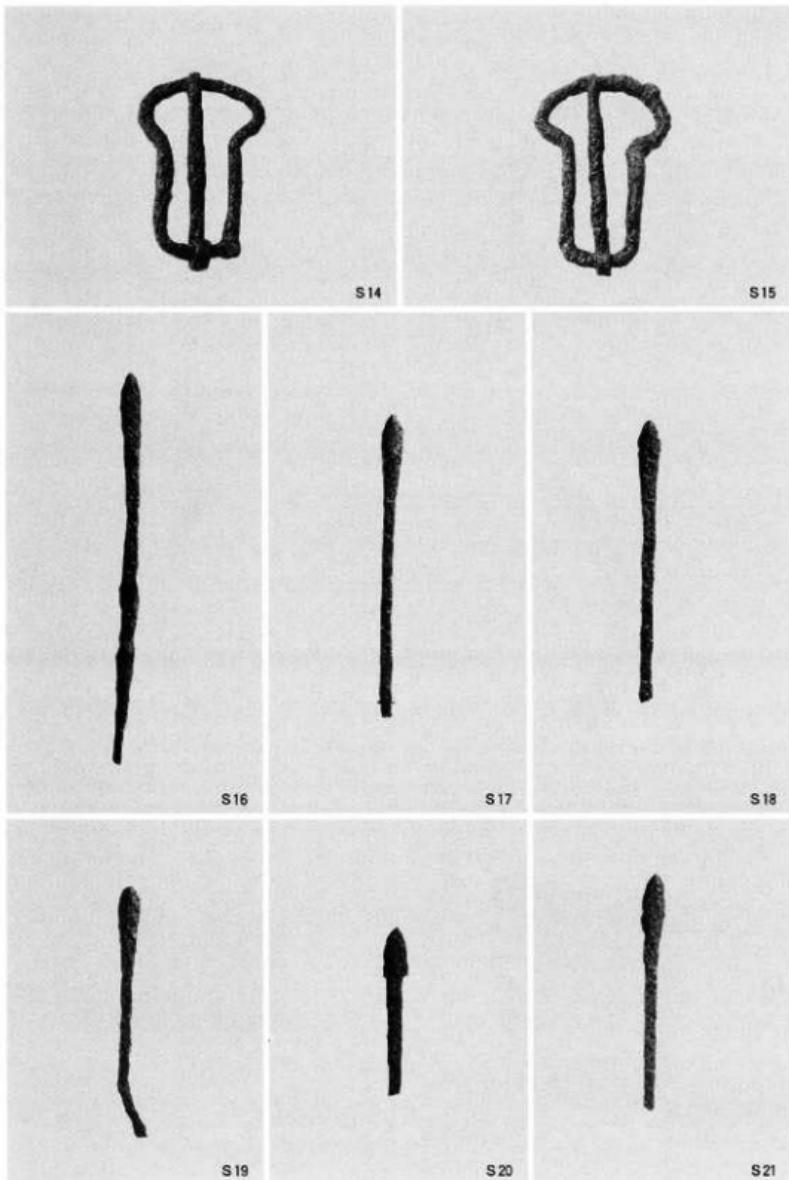


S13

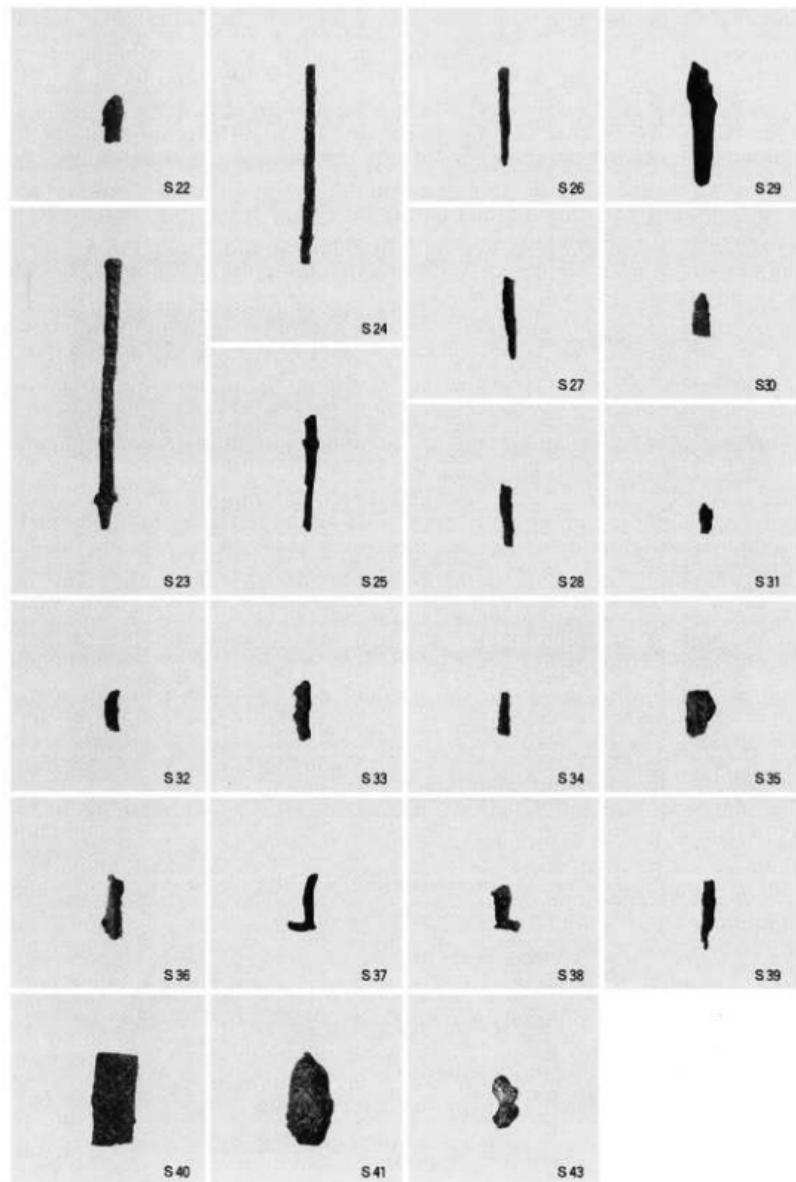


S13X線写真

石室内遺物11 直刀の鑑



石室内遺物12 鈎具・鉄鍔



石室内遺物13 鉄針・刀子・不明金属製品



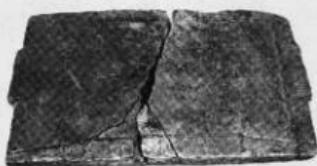
I-1



I-2



I-3



I-4



I-5



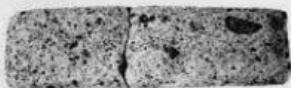
I-棺身



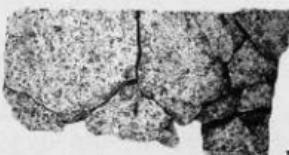
I-棺身



I-棺身



II-1



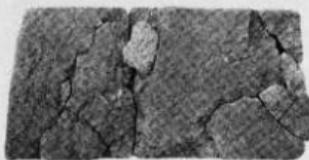
II-3



II-4



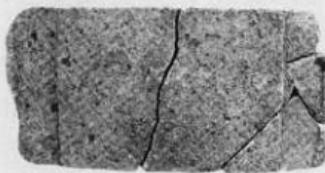
II-5



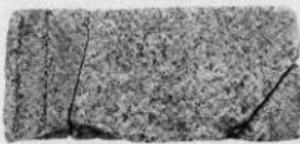
II-6



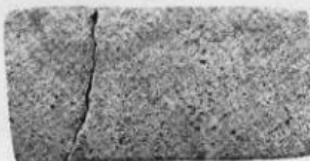
II-7



II-8



II-9

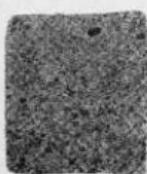


II-10

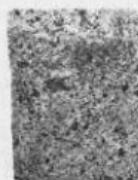


II-11

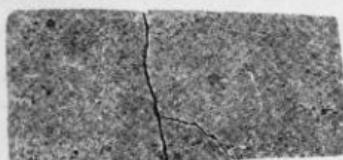
石榴Ⅱ



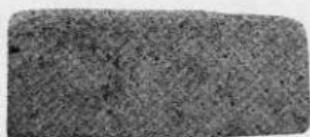
II-12



II-15



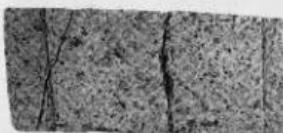
II-13



II-14



II-16



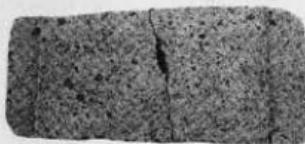
II-17



II-18



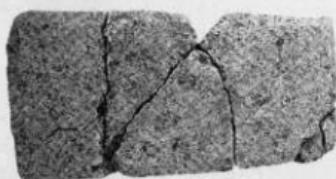
II-19



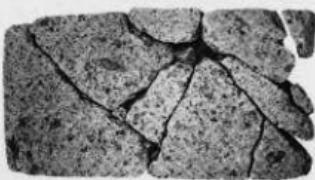
II-20



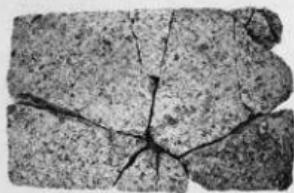
II-21



III-1



III-2



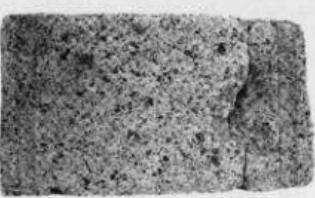
III-3



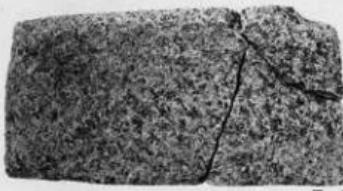
III-4



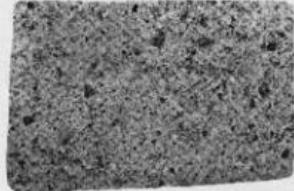
III-5



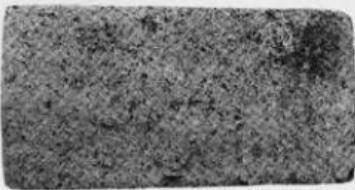
III-6



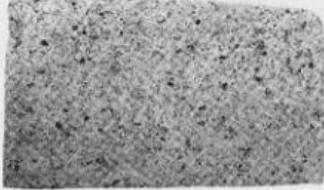
III-7



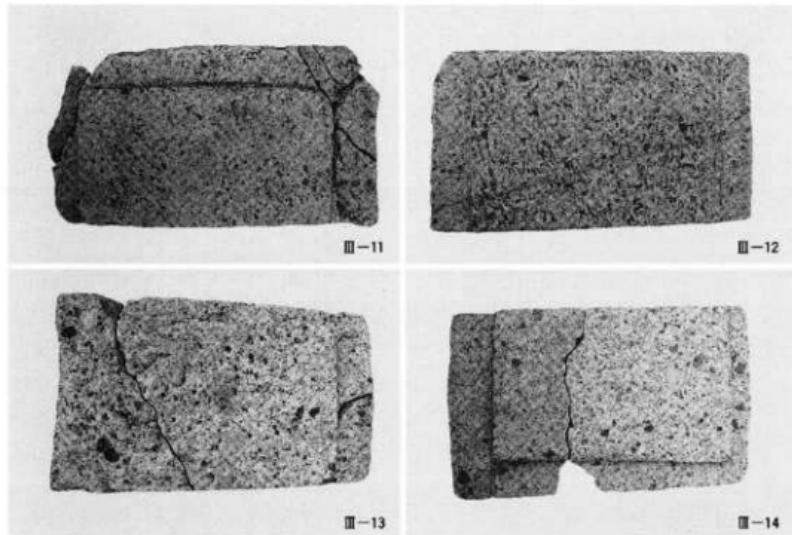
III-8



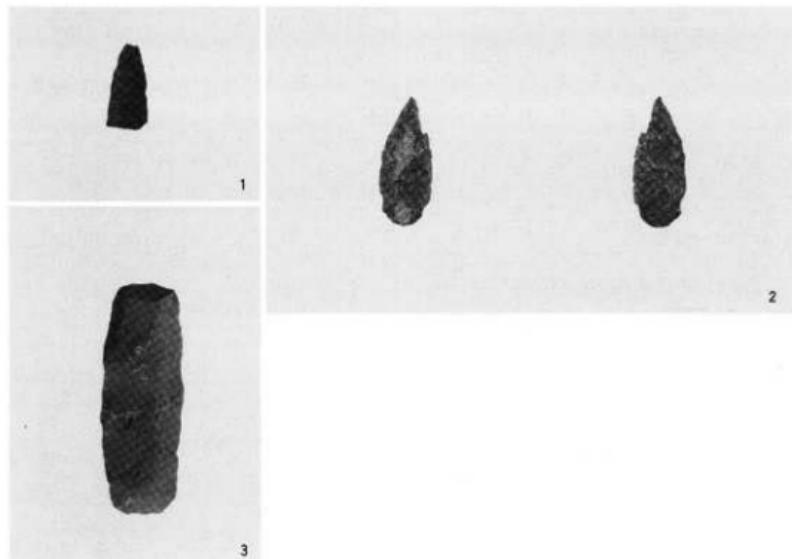
III-9



III-10



石棺Ⅲ



石室内遺物14 石器（石錐・石槍）

(財)八尾市文化財調査研究会報告38

高安古墳群

芝塚古墳

発行 平成5年3月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号

TEL (0729)94-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号

TEL (0729)72-5918

表紙 レザック65 <260kg>

本文 書籍用紙 <70kg>

図版 マットアート <135kg>

